

ナースなのはさん+α

全開

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

季節は冬

ある日、風邪をひいて寝込んでしまっていたユーノのもとへ、ナース服を着たものとなのはに着いてきたフェイトがやって来た。

※フェイトは普段着。

少しアレな看病をするのはや嫉妬心に燃えたフェイトに振り回されるユーノ。

ちよつとした百合展開もあればキャラ崩壊のネタ（ギャグ？）もある話です。
基本ユーナの要素が多いです。（汗）

まだまだ不馴れなので違和感ありまくりの小説になると思いますが、軽い感じで読んで頂けたら嬉しいです。

もはやフェイトが別人です。

別人過ぎるフェイトは嫌だっ！という方は避けてくださいm（ ）m
不定期投稿になりますが、どうぞ、よろしく願います。（ペコリ

評価や感想は好きにどうぞ…

勉強になりますのでく（ ）*（ ）>

目次

本編 1

全力全開の看病〈1〉〜看病、始めます

〜 1

全力全開の看病〈2〉〜フェイトちゃん

との撮影会、始まりませす〜 12

全力全開の看病〈3〉〜撮影会強制終了

なの〜 24

全力全開の看病〈4〉〜フェイトちゃん

とオジサン〜 38

全力全開の看病〈5〉〜間接キスなの〜

全力全開の看病〈6〉〜泊まり掛けの看

病なの〜 56

病なの〜 79

全力全開の看病〈7〉〜ユーノくんと

フェイトちゃんのトランプ対決とお婆さ

んとなのはなの〜 99

番外編〈〜お正月〜〉

着物なのはさんの初詣〈1〉〜新年も振

り回されますなの〜 117

着物なのはさんの初詣〈2〉〜今年も皆

元気です、特にフェイトママは…なのっ

〜 144

着物なのはさんの初詣〈3〉〜エロ眼鏡

淫獣って…エロって言うか妄想ばかりし

てるフェイトに言われたくな…なのっ…

〜————— 165

なユ一ノくん、なの〜

着物なのはさんの初詣へ4〜今日のはの下着はピンク…なの…あ、鼻血がつ…〜 179

番外編へ〜+α〜

〜なのはさんと変態フェイトのエイプ

リルフル〜————— 204

〜ナスフェイトさん〜————— 218

〜フェイト、エロゲーをプレイする+

おまけ〜————— 224

〜5人で王様ゲームなのつ〜————— 248

本編2

全力全開の看病へ8〜ラッキースケベ

本編1

全力全開の看病〈1〉～看病、始めます～

——季節は冬——

「ゲホッ…ゲホッ」

緑色の瞳をし、金髪の長い髪を緑のリボンで纏め、ベッドに横たわっている青年が咳き込む。

彼はユーノ・スクライア（15）。

「風邪…ひいたかなあ……」

頬は少し赤く染まり、寝返りをしながら時計を見る。

「10時かあ…寒いし、今日は休暇だし、明日は仕事だし、しっかり寝て風邪を治さないとな………体温計何処だっけ…ま、いいや…寝よう……」

ユーノがゆつくりと瞼を閉じた時、

ピンポーン♪

チャイムが鳴った。

「こんな時に誰が……うう……体に力がはいらな……」

ユーノはゆつくりと起き上がり、ふらつきながらも玄関へ向かう。
鍵を開け、ドアを開いた。
すると

「こんにちは、ユーノくん」

「こんにちは、ユーノ」

亜麻色の髪を一つに纏めた少女と、金髪の長い髪を黒のリボンで纏めた少女が立っていた。

「あれ……なの……えっ」

少し視界がぼやけるが、なのはを見て目を見開く。

なのははピンク色のナース服を着ていた。

フェイトは普段着だ。

「なんだ、幻覚と幻聴か……」

ユーノは取り合えずそう呟き、何も見なかった事にしようとドアを閉めた。

「ちよっ！ ちよっとユーノくんっ！何で閉めるのーっ!？」

ドアをドンドンと叩いて叫ぶなのは。

「よし、なのは帰ろう」

フエイトは真顔でなのはに言う。

「えっ!? いやいや、ちよっとフエイトちゃんっ、今日はユーノくんの看病に来たのにそれはっ」

「マスター、こうなればこの邪魔なドアを破るしかないです」

なのはの胸元でチカチカと光る赤い球がなのはに言う。

ペンダントにしてあるこの赤い球はなのはのインテリジェントデバイス、レイジングハート。

「そうだね…やるしか…ないか…」

なのははため息を吐きながらレイジングハートをバスターモードにすると、構える。

「ビュービューなのはさんかっこいっ！ (棒)」

全く感情がこもっていない台詞を言うフェイト。

なのは気づかなかつたが、この時、フェイトはニヤリとにやついていた。

「デイバイーンツ!!」

「ちよつと待ったあぁーつ!!! 人の部屋に向かって砲撃を撃つなんて何考えてるんだよなのはっ!!」

顔を青くし、慌ててドアを開けて叫ぶユーノ。

「あつ、ユーノくんっ」

〈やりましたよマスター〉

「うん、協力してくれてありがとう、レイジングハート」

レイジングハートをスタンバイモードに戻し、につこりと笑むなのは。

「やだなあ、ユーノくんの部屋に向かって撃つわけじゃないじゃない、冗談だよ? こうでもすればユーノくんがドアを開けてくれるかなって♪」

にやははと少し頬を染めて笑むなのは。

そして、ユーノには何処かから小さく舌打ちが聞こえたが取り合えず気にしない。

「冗談って…… まったく……なのは前からおも……って……」

ユーノは体の力が抜け、ユラリと倒れかける。

が

「ユーノくんっ!」

なのはがユーノを抱き止めた。

「んっ……」

(柔らかい……)

ユーノの顔は柔らかい物がクッションとなり、なのはの顔とユーノの顔がぶつかる事はなかった。

「セーフ…… ユーノくん大丈夫?じゃないか……取り合えず寝ないとだね」

「あはは……ごめん、ちよつと熱があつて……」

ユーノはなのはから離れようとするが、掌になにか柔らかい物があたり、それを見て顔を真っ赤にする。

「わ、わあっ!?! ゴ、ゴゴっ、ごめんなのはっ!! 触るつもりはなかったんだっ!!」

慌ててユーノはなのはから離れ、熱があるため上手く頭が回転しないが必死に謝る。

「いいよ別に、熱があるからふらついちゃっただけだし……私の胸がクッションがわり

になったなら良かったよ」

「にっこりと笑みながら言うのははまさに天使、いや女神。

なんならもう一度ふらついてその胸でまた受け止めてもらいたいという思いがユーノのなかで沸き上がるが、いかんいかんとユーノは首を振り、なのはに向かつて笑む。

「あ、ありがとう、なのは… 取り合えず上がってよ、寒いし」

「うん、フェイトちゃんもこっちにき」

ドドドツ
!!!

壁を殴る音を聞いてなのはの顔とユーノの顔は凍りつく。

「フェイト…ちや…?」

「あつ、ごめんなのは。ちよつと…虫がいたから。」

フェイトは苦笑しながら言う。

フェイトが殴ってヒビをいれたであろう壁には本当に虫がおり、跡形もなくなっていた。

「私も邪魔するね、ユーノ」

ユーノににっこりと笑みながら手を払うフェイト。

「う、うん……どうぞ……」

ユーノはひきつった表情をしながらなのはとフェイトを部屋へ上げる。

「はい、フェイトちゃんはお茶と、ユーノくんはお水と薬ね」

フェイトにはお茶を注いだ湯飲みを、ユーノには水が入ったコップと錠剤を渡す。

「僕の部屋なのにごめん、こんなことしてもらって……」

「いいよいいよ、ユーノくんの部屋には何度も来たことあるし、ユーノくんは熱があるんだから寝ないとダメだしね」

「あはは、ありがとう」

ユーノは少し照れながら言うと、薬を飲む。

「それにしても……何で僕が風邪ひいてるってわかったの？」

ユーノは薬を飲むとコップをなのはに渡す。

「昨日通信したじゃない？ その時にユーノくんちよつと声が変わったし、咳してたし、もしかしたら明日あたり熱出すんじゃない？と思つて、様子を見に&看病をしに来たんだよ」

「私も…ユーノが心配だったから来たんだよ、ユーノ？」

にっこりと笑みながらユーノを見るフェイト。

ずつとにっこりとしている。ユーノはフェイトを見て身震いをした。

「あはは…フェイトもありがとう……」

「今日は夜まで私とフェイトちゃんが看病しちゃうから、安心してね♪」

「安心、してね、ユーノ」

まだにっこりと笑んだままのフェイト。

言い方に少しトゲを感じるのは気のせいかな。

「う、うん…ありがとう……なのは、フェイト……」

「うーん、やっぱりフェイトちゃんもナース服着れば良かったのに」

「えっ、嫌だよ、なのはの為ならまだしもいん……い、嫌だよ、だって恥ずかしいし

……」

一瞬真顔で言い始めたフェイトだが、ハツとした表情をし、慌てて言い直す。

（今いんって聞こえたんだけど気のせいだよね……淫獣って言いたかったのかな……）

「フェイトちゃんナース服絶対似合うよ〜？」

「そうかな？なのはに言われると…嬉しいな」

頬を染めて照れるフェイト。

「というか……何でなのはナース服なの？」

「えっ？ んー……ほら、なんか……一度着てみたかったんだよ、こういうコスプレ服」

なのはユーノの前でクルリと一回転し、にっこりと笑む。

「なのはに良く似合ってるよ、後で写真撮らせて？」

（私は止めたんだ……っ……止めたのに着るって言うから……なのはにナース服で看病されるなんて羨ましい……）

ユーノの部屋に1日いれば移るかな……）

フエイトは内心嫉妬心を燃やしていたが、笑みながらスマホを片手に言う。

「うん、いいよー」

えへへと照れわらいするなのは。

（なんというか……スカートが短すぎなような……ナース服に白のニーハイソックス……スカートが短すぎて見え……）

ダメダメだっ、スカートが短すぎてなのはが見えそうだとかそんな事考えたらダメぞ僕っ！

ああ、でも見えたら見えたで……ナース服のなはとかレア過ぎて……

落ち着け、落ち着いて、ナース…ナースなのは……)

ユーノはなのはのスカート部分を見つめて顔を赤くすると考えすぎて爆破し、ベッドに座っていたユーノだがベッドに倒れた。

「ユーノくんっ!?!」

「あ、ユーノ」

フエイトはお茶を啜りながらユーノを見て言う。

明らかに心配していない。↑

一方、なのはは慌ててユーノのもとへ寄り、ユーノの額に触れる。

「わっ、熱いよっ! 体温計ないのかな…ユーノくんしっかりしてっ、体温計はあるっ?」

なのははユーノに話かけるが、ユーノは答えずにグルグルと目を回転させる。

「と、取り合えず濡らしたタオルをおでこにーっ!」

なのはは洗面器を片手に慌てて洗面所へ向かった。

「そうだ…もうすぐお昼…お昼はお粥にしよう、熱々の出来立てをなのはと作ってあげるからね、ユーノ」

ニヤリと一瞬笑って言うとお茶を啜るフエイト。

これから数時間、二人の看病に振り回される事になるユーノ。
ナースなのはさんの看病はまだ続きます。

全力全開の看病へ2〓〓フエイトちゃんとの撮影会、始まります〓

「んっ……」

なのは水で濡らし、しぼったタオルをユーノの額に乗せる。

「ごめん……なのは……」

ユーノは熱のせいなのか、なのはに見とれているせいなのか頬が赤い。

「顔赤いね……体温計何処に行ったかわからないんだよね？」

しまったなあ……私の持つてくれば良かったね」

「あはは、別に体温計くらいいいよ。さつき薬飲んだし、暫くすれば熱も下がるだろうし」

「下がったらいいんだけどねえ……」

なのははうーん……と考え込む。

「ユーノ、取り合えず寝たら？」

（なのはと二人きりであんなことやこんなことをする撮影をしたいから早く寝てくれな
いかな…）」

フェイトは頭のなかでなのはにあんなことやこんなことをさせてスマホを片手に撮
影する自分を妄想していた。

ユーノにはまるで、邪魔だから早く寝ろと言っているかのようなのだ。

「う、うん…寝るよ……」

（フェイトの視線が突き刺さるなあ…）」

フェイト（が一方向的にだが）とユーノが視線でバチバチと火花を散らしていると

「あつ！ 熱測る方法あつたつ！ 小さい頃はよくお母さんやお父さんにしてもらって
たなあ…」

フフツ、と笑いながらなのははギシリと音が鳴るベッドに乗り、ユーノに覆い被さる
ような体勢になる。

「えっ」

フエイトは目を見開き、硬直する。

「わっ！ ちよっ！なのはっ!？」

ユーノは赤い顔を更に赤くし、いきなりベッドに乗り覆い被さってきたのはに驚く。

「タオルちよつと退かすね」

なのははタオルを取り合えず洗面器に入れると、

ユーノの額に自分の額をあてる。

「な、なのはっ!？」

「結構熱いね……38度は超えるかなあ……」

お互いの額をあて、唇が重なるまで後数センチもない。

なのはの白く、柔らかい肌と可愛い瞳、柔らかさそうで思わず奪いたくなる唇が至近距離にある。

ユーノの心拍は上昇し、顔を真っ赤にする。

「あ、あの……な、なのは……近い……っ……」

「あ……ごめんね、もうすぐで離れるからもう少ししまっ」

「つ必要はないよ、もう離れて、なのは」

フェイトが真顔でなのはを抱え、ユーノを嫉妬心が更に燃えた瞳で見つめる。

「ちよつ、ちよつとフェイトちゃつ、そんな抱え方したらスカートが上がっちゃうっ！
下ろしてつ、今ユーノくんの熱測つてたのにつ」

なのはは頬を染めながらフェイトに抱えられて上がるスカートを必死に引つ張る。

「なのは、私達ももう子供じゃないんだよ？ わかつてる？」

（恥ずかしがるなのは可愛い……もつと雑に抱えれば見えたかな……）

フェイトは脳内で恥ずかしがるなのはをリピート再生しながら、表情は真顔で言う。

「わかつてるよ？ ん？ 私達はもう子供ではないのかな？ そうなのかな？ まあいいや、わかつてるけどそれがどうしたの？」

なのはは？を浮かべ、首を傾げる。

「はあ……なのははなのはだね……授業で習つたのに忘れたの？」

男は狼、いつ変貌して私達女をおそ」

「ゲホツ、ゲホツ！」

フェイトに言わせまいとばかりにユーノが咳き込んだ。

「ユーノくんっ！」

なのは慌ててタオルをしぼり、ユーノの額に乗せる。

「あはは…ごめんなのは、大丈夫だから…」

「全然大丈夫じゃないよっ、お昼はお粥作ってあげるからねっ」

なのは不安げな表情をしながらユーノの手を握る。

「あ、ありがとう…なのは…」

(手…握ってくれてる……………幸せだなあ…)

「私も、一緒に作るからね、ユーノ」

にっこりと笑みながら言うフェイトからは、早く手を離せと言われてるように感じたユーノはフェイトに向かって苦笑した。

「ユーノくん、何かしてほしい事とかあったら遠慮なく言ってね」

「うん、ありがとう、なのは」

(じゃあ、取り合えずずっと手を握ってて……………なんて言えない…)

「ユーノ、私にもしてほしい事とかあったら…遠慮なく、言ってね?」

(いつまで手繋いでるの、ユーノはなのはにしてほしい事なんて絶対あんなことやこんなことをさせる事しか想像してない…)

させるかっ!!! これ以上ユーノの要素を増やすわけにはいかない、なのフェイルート

を完成させる為にっ!!!!

その為に私はなのはに着いてきたんだっ!!)

フェイトは内心で高笑いしていた。

ユーノの事などまったく心配していない。

「う、うん…ありがとう、フェイト…」

(絶対なにか企んでるなこれ…)

「ユーノくん、取り合えず、お昼まで寝てていいからね」

「うん、それじゃあ…暫く寝るね」

「うん、おやすみ、ユーノくん」

ユーノはなのはに手を握ってもらったまま、瞼を閉じ、数秒もせず眠りについた。

「熱が下がりますように…」

ユーノを見つめながら言うなのは。

を見て、なのはの後ろに座っているフェイトがキラリーンと赤い瞳を輝かせ、ニヤリと笑う。

（ユーノは眠った、ユーノは眠りさえすれば空気、空気だと思えばいい。

今起きているのは私となのはだけ、空気は寝てる。

つまり今は私となのは二人きり……フフフツ、アハハハハッ!!）

「ねえフェイトちゃん、ユーノくんにつつてあげるお粥普通のお粥がいいかなあ？
が入ってる方がいいかな？」 卵

（そんなのどうでもいい）

「普通のお粥でいいんじゃないかな？」

（何で私がユーノの為に考えないといけないの）

「そうだね」

「うん、じゃあなのは、ユーノ寝てるし、今は特にすることないだろうから写真いいかな
？」

「え、今？ うん、わかった、いいよ」

「うん、じゃあそのソファーに寝てくれないかな？」

フェイトはスマホを片手にソファアームを指さす。

「え、寝るの?」

「うん、お願い」

「わかった」

なのはソファアームに乗り、横たわる。

「じゃあなのは、左手を胸元に、右手をお腹辺りに置いてこっち向いて」

「う、うん……こう……?」

なのは少し頬を染めながらフェイトの指示に従う。

「うん」

（あああああああ……可愛い……可愛いよなのは……あ、鼻血が出そ……）

なのはの前で鼻血なんて出したら変態だと思われちゃう……

ソファアームに寝てるナースが頬を赤くしてこっち見てるなんてなんか……

取り合えず連写連写。）

フェイトは連写をし、段々と息を荒くする。

「それじゃあ、なのは、次はこの体温計をこう持って、見せつける感じで、足を少し上げて……こっち向いて」

フエイトはなのはに体温計を持たせると指示を出す。

「えっ、フエイトちゃん体温計持ってたのっ!？」

「あ、うん」

「ならさつき貸してくれたら良かったのにつ」

「あ、ごめん、持ってきてたの今気づいたの」

(ユーノに私の体温計を貸すのは嫌だ、なのはにないいいけど。それにこれは撮影用だし)

「後で貸してくれないかな？ また熱測らないといけないから」

「えっ……………う、うん……………ワ、ワカタタ…」

(ここで嫌だつて言ったらなのはに嫌われるかもしれない、ユーノのルートになるかもしれないからここは領くしかっ…)

フエイトはなのはに向かってぎこちなく領く。

「うん、ありがとう、フエイトちゃん」

「それじゃあなのは、写真撮るからこっち向いて」

「うん…」

「あ」

フェイトはスマホをポケットに入れると、なのはのナース服、胸元のボタンを3つの内2つを外す。

「ちよつ、ちよつとフェイトちゃんっ!？」

突然ボタンを外され、顔を真つ赤にするなのは。

「こうした方が可愛いかなって」

(可愛い…顔が真つ赤なのは可愛い……)

「ええっ!？」

「ほら、いいからこつち向いて」

フェイトはなのはから離れるとスマホを手に取り、再び連写。

(体温計持って、顔を赤くしてこつち見てるなんて……なんかエ……)

じゃない、あれは体温計、妊娠検査薬じゃない。

君の赤ちゃん妊娠しちゃった…とか顔を赤くして言うのはとか……最高だよっ!!

じゃないっ! 妊娠とかしたら大問題だよつ、あああああ、ボタン外してそんな風に

こつち見てるとそう見えても仕方な…)

フェイトは荒い息を吐きながら連写を続ける。

が、床にポタリと赤い液が落ちる。

「ふえ、フェイトちゃん血がつ！」

「え？ あ……ち、ちちち、違うのなのはつ、これは別につ、さ、最近よく鼻血が出るのつ！」

別になにかに興奮して出したわけじゃつ……」

「はい、フェイトちゃんティッシュ」

なのはポケットからポケットティッシュを取り出し、ティッシュを二枚渡す。

「あ、ありがとう……」

フェイトはなのはの天使、いや女神のような対応に感動しながらもティッシュをなのはからもらう。

（ああ……幸せ……）

フェイトはティッシュを手に持ったまま更に鼻血をダラダラと流す。

「ちよつ！ フェイトちゃん鼻血つ、早くティッシュをつ!!」

「あ、うん、えへへ……」

フェイトはにやけながらティッシュを鼻に詰めた。

（何で笑ってるんだろう……）

なのははティッシュを詰めてにやけるフェイトを見て表情がひきつる。

「よし、なのは、まだ写真撮るから次はっ」

「ええ!?! ま、まだ撮るの!?!」

「うん、次はこうして、こうねっ」

「ちよっ、ちよっと待ってよフェイトちゃんっ!」

なのはは涙目になり、フェイトにされるがままになっていた。

フェイトとなのはの撮影会、まだもう少し続きます。

全力全開の看病へ3 撮影会強制終了なの

「あのく…フエイひよちゃ…なんひえたいふんひえいくひあえなきやいひえにやいの？」

※【あのく…フエイトちゃ…なんで体温計くわえなきやいけないの?】

なのはは苦笑し、体温計を口に少しくわえながら言う。

「なんでつて、可愛いからだよ」

(エロいからに決まってるじゃない、なのは)

スマホを片手に真顔で言うフエイト。

鼻に詰めているティッシュで真顔が台無しである。

「はい、もう口離していいよ」

「うん…」

なのはは体温計を口から離し、苦笑する。

「あの、フェイトちゃん、もういいかな？流石にもう…」

なのはは起き上がり、立ち上がるとユーノのもとへ向かう。

「えっ、ちよっ、なのはっ」

「タオルをそろそろかえないと…」

なのはがユーノの額に置いているタオルを取ろうとする

と

「なのはっ」

フェイトは素早くなのはの背後に回り、背後からなのはの口を手で塞ぐところの際とばかりになのはの胸を触っている。

「んぐっ!! んっ、んんーっ!」

なのはは抵抗しようとするが、フェイトにズルズルと引きずられると床に押し倒された。

「まだ写真撮りたいんだけど…いい?」

フェイトはなのはに覆い被さり、しれっとなのはの腿を右手で撫でている。

「あ、あのつ、フェイトちゃん手がっ、撥ったっ…」

「ああ…ごめんね、触っちゃって。写真、もう少しだけ撮らせて?」

(フフフツ…:…これからが本番だよ、なのは…)

「もう変な格好は嫌だよフェ」

「スカートもう少し上げようか、ボタンも全部外して」

フェイトはなのはのナース服のボタン、最後の一つを外し、スカートの中に手を入れる。

「ちよつ、ちよつとフェイトちゃんっ?! な、なにしてっ、やめてっ、やあっ!」

なのはは顔を赤くしてスカートの中に手を入れて触れてくるフェイトに抵抗しようとする

が、手首にバンドをかけられ、腕を動かせない。

「スカートを上げて…:…」

フェイトがなのはのスカートを上げると、なのはのピンク色のショーツが見える。

「やっ、やだっ、フェイトちゃんやめてっ、やめてよお!」

なのはは恥ずかしさに思わず涙目になっていた。

「写真撮るだけだから大丈夫、それに、大きい声出すとユーノが起きちゃうよ?」

(あああああっ…:可愛い、可愛いよなのは…:…涙目のなのは可愛い…:…)

クスリと笑いながら言うフェイト。

空気となっているユーノはなのはがフェイトに襲われかけっていると知らず、起きない。

「な、なんでこんなことするの…っ？ 写真撮ってなにをするのっ？」

「別に何もしないよ、ただなのはの可愛い姿を撮りたいだけなの。ねえなのは、ちよつとこのナース服サイズが小さいんじゃない？ 胸元が苦しそうだよ？」

フェイトは真顔でそう言うと、なのはの胸を揉み始めた。

「きやつ！ やつ、な、なにをするのフェイトちゃつ！ フェイトちゃんやめてえつ！んつ、ひあんつ！」

（なのはが可愛い声上げてる……このまま揉み続けて、なのはが快楽に堕ちたらなのはのあんな場所をこんなにしてああして……なのはを可愛がるんだ……フフツツ♪）

フニフニとなのはの胸を揉みながら、舌舐めずりをするフェイト。

「やつ、揉まないでつ、やめててばつ、フェイトちゃんつ！」

「体が火照ってきてる……もしかしてなのは…私に触られてかん」

「違うっ！ 違うよっ、お願いだからやめてっ、やめてよお！」

なのはイヤイヤと首を振り、涙をポロポロと流す。

(妄想した通りの反応……♪ 後は、なのはのそこを……)

フェイトは舌舐めずりをしながら、またなのはのスカートの中に手を入れようとした。

通報レベルの光景である。

が、その時

フェイトに目掛けて濡れたタオルが飛んできた。

「あぶなっ！」

フェイトは間一髪でタオルを避ける。

「あのさ、人の部屋で何してるの……？ 僕風邪ひいてるんだけど……というか……フェイト、なのはを泣かせるのはどうかと思う。」

いつの間にか起き上がり、ひきつった表情をしながら言うユーノ。

「ゆ、ユーノ……」

「ユーノくっ……グスッ……フェイトちゃんが私の写真撮るって言ってっ……それでっ……」

なのは涙をポロポロと流してユーノを見る。

「なのはっ、大丈夫!?!」

ユーノは慌ててベッドから降りるとなのはのもとへ駆け寄る。

「ユーノくっ……ユーノくん……っ……」

「ご、ごめん……なのは……」

(と、取り合えず謝って計画は中止に……っ……)

フェイトはバインドを解くと、なのはを起こそうとする。
が

「フェイトちゃんのカカあ!! やめてって言ったのにつ! フェイトちゃんなんかもう知らないっ!!」

なのはは顔を赤くし、泣きながらスカートを引っ張り、見えていたショーツを隠す。

「ガーンツ!!」

フェイトはなのはの発言にショックを受けると、涙を流しながら放心状態になる。

「いや、ガンツ！じゃないよ……どう考えてもこうなるに決まってるじゃないか……
ユーノはひきつった表情をしながら言うとなのはの背中を摩る。

「なのは、大丈夫……？」

「うん……ごめんね、騒がしくて起こしちゃったね……グスツ……」

なのはは手で涙を拭いながら言う。

「いや、気にしなくていいよ、熱も今は下がってるみたいだし、平気」

「熱が下がったなら……良かったけど……」

「えーつと……フェイト……？」

ユーノは守るようになるのはを抱き寄せ、苦笑しながらフェイトに話しかける。

「ほえええ……」

フェイトは口から魂を飛ばし、放心状態。

「ダメだ、放心状態……」

（どうしよう……なのははフェイトに色々と触られて傷ついてるはず……

「だけど二人がこれで不仲になるのは……いちかバチか……」

「なのは、えーつと……フェイトは遊び心でやったんだと思う……よ……」

（あれ……これ遊び心でやったって言って許される事なのかな……）

「フェイトがなのはと同性だからまだ良かったとして……いや、良くないか……」

「遊び……心……？ フェイトちゃんが遊び心で……？」

「う、うん……」

「……フェイトちゃん……」

「なのはは少し小さい声でフェイトの名を呼ぶ。」

「……ハッ！ い、今なのはに呼ばれたような……」

「あの……フェイトちゃん……遊び心で私に……こんな事したの……？」

「えっ？」

「フェイトは嘘だろという表情をしながらなのはを見る。」

「もし……遊び心でしたら別に……今回だけは許してあげる……」
「えっ？　ちよつとなのは、それどうい」

《フェイト、一応今回は本当に謝った方がいいよ。フェイト自身の為にもね……》
ユーノは念話でフェイトに伝える。

「……………ご、ごめん……………なのは……………その…あ、遊び心でした……………」

（遊び心じゃないのに……違うのに……ただなのはが好きだから……なのはが好きだからあ……………）

フェイトは涙を流しながら苦笑して頭を下げる。

「あ……………えつと……遊び心でならいいの……………ごめんね、フェイトちゃんなんか知らないなんて言っちゃって……」

フェイトちゃん、もうこんな事しないって……約束出来る……？」

「する、約束するよ……あはっ……あはははは……」

（えっ、こんな事？　それは……触れるなどいうこと？　もう私の体に触らないでっ

てこと？　）　　といつかなにちゃっかりなのはを抱き寄せてるの淫獣……っ……）

フエイトは表情が固まり、ただ涙を流してあはははと壊れたように言う。

「あ、あの、フエイトちゃん……その……傷つけちゃったね……私はフエイトちゃんが大好きだから、だから、嫌いになったりなんてしないよ」

なのは不安げな表情をするも、優しく笑み、ユーノから離れるとフエイトの手を握る。

「な……なのは……なのはあつ……う……つ……グスツ……なのはつ……私もなのはが好きだよつ、大好きなのおっ！」

フエイトは涙をポロポロと流しながらなのはに抱き着き、うわーんと泣く。

（こういう流れで言っているのかわからないけどなのは『好き』とフエイトの『好き』は違うんだよなあ……まあ……フエイトの気持ちはわからなくもないんだけど……難しいな……恋愛って……）

ユーノはなのはとフエイトを苦笑しながら見ていた。

「フエイトちゃん、鼻水が……はい、ティッシュ」

「ありがとお……グスツ……なのはあ……つ……」

「泣きすぎだよ？フエイトちゃん」

なのはクスリと笑いながらフエイトの頭を撫でる。

「でも良かったあ、私、フエイトちゃんは百合なのかなと思って本当にどうしようかと思っただよ」

私はフエイトちゃんを友達として見てるから……実際にフエイトちゃんが百合だったら……友達以上としては見れないし、どう対応したらいいのかわからなくなりそうだよ」

あはは、と苦笑するなのは。

「えっ」

（あ………告白する前に否定された……体に触れるな的な事を言われたあげくお前を友達以上には見れないって言われた……）

フエイトは静かに涙を大量に流し、なのはから離れる。

「フエイトちゃん？」

「ごめ……ちよつと……外の空気吸ってくるね……」

フエイトはフラリと立ち上がり、玄関に向かうと靴を履き、走ってユーノの部屋を出た。

「うあああああああつ!!!!!!」

(おかあああああああんつ!!!!!!)

フェイトは号泣し、内心でも叫びながら走り、何処かへ行ってしまった。
ドアがバタリと閉まり、部屋にはなのはとユーノ二人きり。

「フェイトちゃん何処に行ったんだろ…」

「すぐ戻ってくると思うよ…多分…」

なのはとユーノは苦笑しながらドアを見て言う。

「あつ、そうそう、フェイトちゃんが体温計持ってたの、これで熱測って?」

なのはは体温計をユーノに渡す。

「あ、うん、わかった」

ユーノは体温計を受け取り、スイッチを入れると脇に挟む。

「もう12時過ぎてるね、ユーノくんが熱下がってる間にお粥作るから食べてね」

なのははそう言うのと立ち上がる。

「うん、ありがとう、なのは。 あつ……あおさ、なのは……その……ボタン……留めた方

「がいいんじや……」

ユーノはなのはを見てふと気づき、頬を染め、人指し指で頬を搔きながら言う。

「あ……っ！　　っ、ごめんっ、ありがとうユーノくんっ！」

なのははボタンを留める事を忘れていたのを思いだし、慌てて留めると頬を染めたままキッチンへ向かった。

「なのはのお粥か……楽しみだな」

嬉しそうに笑みながらユーノが眩くと、フェイトのスマホにメールが来たのか待ち受けが表示される。

「あ、フェイトスマホ忘れて………わっ！」

スマホに触れはしなかったが、待ち受けを見て顔を真っ赤にするユーノ。

フェイトはいつの間にかスマホの待ち受けを先ほど撮った、ソファーに寝、頬を染め、体温計を持ってカメラ目線のナースなのはの写真にしていた。

「ハ、ハ、ハ、これって……っ……」

（さつき写真を撮るとかなんとかって言ってたけどこんな事をなのはにさせてたのか

フエイトはっ!!

な、なんとというかエ……じゃないっ!

取り合えず、この写真を待ち受けにしてるなんてなのはにバレたら確実にフエイトが困るだろうからっ……)

ユーノはフエイトのスマホにそつと触れ、電源を切った。

恥ずかしい写真を親友に待ち受けにされている本人はキッチンで調理している為気づいていない。

(今の写真はちよつと……ああ……欲しいとか思ってしまう自分がいる……)

僕も欲し……じゃない……あんな写真持ってたのはにバレたらそれこそ終わりだっ……)

ユーノはグルグルとそんな事を頭で考えながら、体温計がとつくに熱を測り終え、ピピッと音が鳴っていた事に暫く気づかなかった。

なのはさんの看病、まだもう少し……続きます。

全力全開の看病へ4〓フエイトちゃんとおジサン〓

「フエイトちゃんまだ帰って来ないのかな……あ、もうすぐでお粥出来るかも……火止めよっ……」

「大丈夫だよ、まだ15分くらいしか たってないし、何処かで何か買ってたりするんじゃないかな？」

「でも……泣いてたし……私がフエイトちゃんを傷つけちゃったから……」

「いやいや、大丈夫だよ、フエイト泣きながらなのはに大好きだって言ってたじゃないか」

苦笑しながら言うユーノ。

「そうだけど……いきなり出ていっちゃったらやっぱり不安になるっていうか……フエイトちゃんだいじよ」

となのはが話していたところでガチャリとドアが開く。

入ってきたのは

フェイトだった。

「あつ、フェイトちゃ…つ…?」

「フェつ…イ…ト…?」

ドアを閉め、玄関に立っているフェイトを見てなのはとユーノは表情が凍りつく。

「……………」バリツ バリツ

無言でフランスパンをバリツバリツと音を鳴らしながら食べ、泣きすぎたのか赤い目を隠す為なのかサングラスをかけたフェイトがそこにいた。

なんというか、食べ方が

オツサンだ。

「あ、あの…フェイトちゃん…どうしたの…?」

「オジサン…」バリツ バリツ

「フェイト……？」

「変なおじさんに買わされたの……リアル逃○中みたいだったよっ!! 怖かったよなのはああああっ!!」

フェイトは袋に入った数本のフランスパンを投げ捨て、靴を脱ぐと食べかけのフランスパンを片手に泣きながらなのはに抱きつく。

「逃○中って……なんか懐かしいね……一体何があったのフェイトちゃん……」
なのはは苦笑しながらフェイトの頭を撫でる。

「うっ、グスッ……んぐ……」 バリッ バリッ

泣きながらもフランスパンを食べるフェイト。

「取り合えずフェイトちゃん、フランスパン食べるの止めよう」

フェイトの肩をガシリと掴んで言うなのは。

「んぐ……っ……ごめっ……さつきね……っ」

フェイトはフランスパンを飲み込むと話し始める。

——遡る事15分前——

「おかあああああああんっ!!!」

ダバダバと涙を流しながらただ走っていたフェイト。

泣きすぎて目が赤くなっている。

「百合のなにか悪いんだよおおっ!!!」

グスツ…百合で悪いかこの野郎おおっ!!!」

フェイトは足を止め、コンクリートの壁を涙をダバダバと流しながら殴っていた。

「うわあああーんっ!!」

次第に殴るスピードを速めるフェイト。

「バルディツシユのバカあああっ!!!」

バルディツシユ、とぼちちりである。

フェイトが殴る度にコンクリートにヒビが入っていく

すると、肩をポンポンと背後から叩かれた。

「誰だよっ、私に今かわるなあっ!」

フェイトは大量に涙を流しながらキレ気味に後ろへ振り返る。

「ナクナヨオジョウサン、ナイタラカワイイカオガダイナシダヨ」

フェイトの後ろにはサングラスをかけ、上半身は裸で、半ズボンとリュックを着用し、ボロボロのサンダル履いている、頭の真ん中が禿げた片言で喋るオッサンが立っていた。

「わあっ!?!」

フェイトは明らかにヤバイ雰囲気を持ったオッサンに表情をひきつらせ、思わず一方下がる。

「シツレンデモシタノカイ?」

いい男オーラを放つオッサンにこれはヤバイ、ヤバイぞこれ。と感じたフェイトは逃げ去る体勢をとる。

が

「カナシンデイルキミニチヨウドイイモノガアルヨ」

オッサンはリュックを下ろし、リュックの中からフランスパンを取り出す。

「キミニコノセカイイチカタイフランスパンヲウツテアゲヨウ」

「いや、別にいらないます」

フェイトは真顔でそう答えると猛ダツシユで走り出した。

（ヤバイよヤバイよあのオジサンっ!! かかわつちやダメだつ、早くユーノの部屋にも
どうろう!!）

ダダダダダダッ
!!!!!!と猛ダツシユで走るフェイトは顔を真っ青にしていた。

（足の速さなら少し自信があるっ!! オジサンなんだから追い付けるわけないし追いか
けてこな）

ダダダダダダッ
!!!!!!

フェイトの真横でそんな音がした。

フェイトはギギギギツ…と首を動かし、冷や汗を出しながら横を見る。

「フランスパン、オイシイヨツ」

例のオツサンがリュックを背負い、フランスパンを片手にフェイトをガン見して真横
で走っていた。

「うわあああああつ?!?!」

フェイトは更に走るスピードを速めようとする

が

最悪のタイミングで躓き、グルグルと瞬時に二回転をするとズシアアアツ!!と音を鳴らして地面に着地。

「いたたた…っ…:…」

フェイトはふらつきながらなんとか立ち上がる。

が

「フランスパン、オススメダヨ」

猛ダツシユで走ってきたにもかかわらず、息を乱さずにフランスパンをフェイトに差し出してくるオッサン。

「だからっ、いらないうっていったじゃないですかっ!! 何で追いかけて来るんですかっ!!」

「フランスパンカッテホシクテ……コレ、イチオウカタイカラヤクニタツヨ?

ヨクシツレンシタテデカナシンデルヒトヤイラダツテルヒトガヒトヲナグルノニツカウラシイ」

「物騒だなおい」

真顔でツツコむフェイト。

「というか、フランスパン買ったら追いかけて来ませんか?

犯罪ですからね、まわりからしたら。

上半身裸のオジサンが女の子を泣かせて追いかけて回してるのっ」

「ゴメン、ニホンゴワカラナイ」

「さっきまで片言だったけど日本語喋ってたじゃないですかっ!!! なめんなよコラアツ!!」

フェイトは怒りを露にして叫ぶ。

言葉が荒いのは気のせいなのだろうか。

「いや〜さ、ほら、僕、借金抱えたまま妻に捨てられちゃってさ〜

金もない家もない、妻もないっ☆

だから、フランスパンを買って僕にお金を恵んでくっださいっ♪」

体をクネクネとくねらせ、頬を染めてフェイトに頭を下げるオッサン。

おかげで禿げているのがよく見える。

「気持ち悪いんだよオッサンっ!!! お金がないとかしらねえよっ! とうるか片言どころか日本語ペラペラじゃねえかあああっ!!!」

フェイトは怒りを思いきり足にこめ、オッサンを蹴り飛ばした。

「グヘバツ!!!」

コンクリートの壁に蹴飛ばされたオッサンは地面にパタリと倒れる。

「ふざけやがって……このハゲツ!!!」

「は、ハゲだなんて……グエツ……どつか痛めたなこりや……」

オッサンは体をプルプルと震わせながらなんとか立ち上がる。

「ハゲだなんて失礼だなお嬢さん……これでもハゲ始めたのは最近で……っ……」

「ハゲ始めた時期とかしらねえよっ!! 人がどれだけ怖い思いしたかわかってるんです

かっ!!
!!」

「ご、ごめんごめん、どうしても買って欲しくてき……金無くて服もまともに買えなくて……」

「お金ないのに何でフランスパンなんか持って……」

「……………じ、自分で作った」

「嘘つけっ!!」

「とにかく買って下さいお願いします」

オジサンはフェイトに土下座をする。

（やっかいなのに絡まれたな……………何でこうなるんだろう……………買ったら帰ってくれるかな……………一刻も早くこのオジサンから離れたいっ!!）

「わかりました、買います、買いますからさつきと私の前から消えてくださいよっ?」

フェイトはひきつった表情をしながらそう言うと、ポケットから財布を取り出す。

「あ、ありがとうっ、ありがとうお嬢さんっ!!」

オツサンは涙を流しながらリュックからフランスパンを取り出す。

「で、いくら？」

「3つで5000円」

「高っ!! いやいや、人に買ってつて土下座しといてそれはないでしょ」

「ほら、質がいいからっ、材料にこだわってるからっ!」

何故か真顔で言い切るオツサン。

「仮にそうだとしても3つもいらないうですけど……1つでいいです」

「1つだと5000円ですっ♪」

「ふざけてんのか」

フエイトはゲシゲシとオツサンを踏む。

「イダダダダっ!!! ごめんなさごめんなさっ!!」

「はあ……じゃあもう3つ下さい」

（もういいや、早くこのオジサンから離れられるならさっさと買お…）

フエイトはため息を吐くとお金をオツサンに渡す。

「おおおっ!! ありがとうっ、ありがとうお嬢さんっ!!!」

オッサンは大量に涙を流しながらフランスパンを袋に入れる。

「いえいえ…それじゃあさようなら」

フェイトはオッサンからフランスパンが入った袋を受け取ろうとする

が

オッサンは袋を離さない。

「ちよっ、あの…離してくださいよ」

「おまけにこのサングラスもあげるよ、僕さ、妻の金勝手に使って離婚迫られて…仕事するの嫌いだから就職も出来なくてさ…金がないから借りまくって借金背負って…」

何故か勝手に自分の人生を話し始めたオッサン。

「いや、あの、別にオジサンのサングラスいらななんですけど… とうか話聞くんもりもな」

「本当にありがとうお嬢さんっ！ これで1日また生き延びれるよっ!!!」

オッサンは嬉しそうに笑みながらフェイトに袋とサングラスを渡す。

「いや、押し売りされただけなんですけどね………というかサングラス……」

「お嬢さん泣いてたけど大丈夫っ、きつと君にはこれから良いことがあるよっ！」

(オジサンに言われてもなあ……)

「あ、あの……オジサン、これだけは言いますが、ああいう売り方はしない方がいいと思います。いつか捕まりますよ、絶対。」

それじゃあ、さようなら」

フェイトはジト目でオッサンを見ながら言うと、歩いて行く。

「今日はなんか変わった子だったなあ……」

オッサンはリュックを背負い、やりきったぞという表情をし、歩き出そうとすると

「見つけたぞっ！」

「ストーカー行為、万引き容疑で逮捕するっ!!」

オッサンは男性数人に取り押さえられる。

「えっ……えええ……っ……」

オツサンは弱々しい声でそう言うと、男性達に連れていかれた。

「何でこんな目にあわなきやいけないの……早くユーノの部屋に帰ってなのはに慰めてもらおう……あっ!!今なのはとユーノ二人きりっ!!

しまったっ……というか……絶対目腫れてるよね……」

フェイトは片手に持っているサングラスを見る。

「……………一応かけるか……」

フェイトはサングラスをかけるとフランスパンを袋から取り出し、食べる。

「……………」バリッ バリッ

「案外……美味しいかも……」バリッ バリッ

「それに……そんなに固くないし……」バリッ バリッ

フェイトはオッサンのようにフランスパンを食べながら、なんだかんだユーノの部屋へと向かっていった。

「ということとで……歩いてたらいきなり変なおジサンに話しかけられて、逃げたら追いかけて……フランスパンを押し売りされて……怖かったよなのはあくっ」

フェイトは泣きながらなのはの胸に顔を埋める。

※一部自分にいいように内容を変えてフェイトはなのはとユーノに伝えています。

「そ、それは怖かったねフェイトちゃん……よしよし……」

なのははフェイトの頭を撫でる。

（なのはの胸っ、なのはに撫でられてるっ、見るがいい、見るがいいぞユーノっ！フハハハッ!!）

フェイトは内心で高笑いしながらなのはの胸にフニフニと顔を暫く埋めていた。

「にしても3つで5000円って特なのか損なのか…素材がいいからって…」
フェイトの心配よりそなのかユーノ。

「あつ、お粥っ！ ユーノくんのお粥っ！温め直さなきゃっ！」

なのはハツとユーノにお粥を作っていた事を思いだし、慌ててフェイトから離れるとキツチンへ向かった。

「あつ、なのはあ…っ…：…チツ…」

なのはが自分から離れ、俯くと小さく舌打ちをするフェイト。

「ねえユーノ、フランスパンいる？」

玄関に投げ捨てたフランスパンを指さしながら言うフェイト。

「いや、流石に投げ捨てられたフランスパンはちよつと…」

「そっか…：…いらぬからユーノに押し付けようと思つたのに…：…チツ…」

フェイトは小さな声でボソツと呟くと小さくまた舌打ちをする。

「フェイト、心の声漏れてる」

「ん？あつ、そうだった、お粥で思い出したっ！」

（そうっ！ ユーノに：フフツツ……私も看病してあげるって言うってたんだった……♪）

フェイトはニヤリとにやついた。

「ねえ……フェイト、いまさらなんだけどき、サングラス……外さないの？」

「あ」

フェイトはサングラスを外すと

投げ捨てた。

「ちよっ！ ここ僕の部屋なんだけどっ！」

「サングラスあげるよ」バリッ バリッ

フェイトは座るとフランスパンを再び食べ始めた。

「いやっ、今投げたから完全に壊れてるよねっ!?というかいらないよっ!!」

「じゃあ捨てておいて？」バリッ バリッ

「自分で捨ててくれよっ!! フランスパンもサングラスも投げ捨ててさっ!!」

「あんまり叫ぶとなのはが心配するし、熱が出るよ〜」バリツ　バリツ

フェイトは真顔でそう言いながらフランスパンを食べ続ける。

「誰のせいであつ…」

ユーノが段々とイライラとしてはじめていると

「お待ちせ〜、お粥温まったよ〜って、どうしたの?」

「別に何でもないよ、なのは。お粥美味しそうだね〜、今度私が風邪引いたら作つてくれない?」

「あはは、いいよ♪　でも風邪ひくのはいいことじゃないからね?」

ユーノくん、お粥出来たから食べて?」

「あ、うん、ありがとう、なのは。」

お椀にお粥を注ぐなのは。

そんななのは目を光らせて見るフェイト。

そして、そんな二人に振り回されるユーノ。

なのはさんの看病、まだ後もう少し続きます。

全力全開の看病へ5 〓 間接キスなの〓

「ふう……ふう……はい、ユーノくんあーん」

なのははスプーンでお粥を掬い、息を優しく吹き掛けるとユーノの口へ運ぶ。
「ええっ!? い、いいよ別につ、自分で食べるからっ」

ユーノは顔を赤くしながら言う。

「ユーノくんは風邪ひいてるんだから、こういう時ぐらい甘えてもいいんだよ？」

はい、あーん」

「えええ……っ……ううっ……あ、あーん……」

「どう？ 味は丁度いいかな？」

「う、うん……丁度いいよ……」

甘い空気をフワフワと作るなのはとユーノ。

そんな二人を、フェイトはキラリと目を光らせて見ていた。

「なのは、ユーノにお粥食べさせるのは私がするよ」

「えっ？ いや、いいよ、私がするから」

「私もユーノの看病したいの、だからお願いっ！」

「う、うーん…… まあ、フェイトちゃんが言うなら……はい、ユーノくんにご飯食べさせてあげてね」

「えっ、ちよっ、なのっ」

ユーノは先ほどまで赤かった顔を戻し、なのはを止めようとする
が

「いっ!!」

フェイトになのはから見えないよう脚をつねられた。

「うん、任せて、なのは」

フェイトはにつこりとなのはに向かって笑むと、ユーノに向かっても笑んだ。

なのははお椀とスプーンをフェイトに渡すと立ち上がり、洗面器を片付けたり、投げ捨てられたサングラスとフランスパンを片付けたりと始めた。

※これより、二人は暫くなのはに聞こえないよう念話でほとんど会話します。(念話

の場合は「」が《》になります)

《フェイト……っ》

《甘いよユーノ……なのはにあーんなんてさせてたまるかつ！

いつどんな時でもなのはにあんん言わせていいのは私なんだよっ！》

《それ違う意味のだろっ!! あんんなんて僕はなのはに言わせてないよっ！》

《私がない間なにしてたの? もしなのはにあんんことやこんな事をしてなのはにハメてたりしたら……っ……なのはをベッドの上であんんなんて言わせたりしたらっ……この熱々のお粥をかけるからね》

フェイトはスプーンでお粥が入った鍋を指しながら念話で言う。

《そんなことしないよっ!!》

ユーノはフェイトの発言に、ふとベッドの上で乱れるなのはを想像してしまい、顔を真っ赤にする。

《あつ！ 真っ赤になった！ 顔を真っ赤にして何考えたのこの淫獣っ!!》

《ち、違うっ！ そのっ、僕だつて年頃なんだしそういう事を考えちゃうことだつてあ》

《じゃあ、今想像したんでしょっ、このエロ淫獣っ!!》

《なっ！ ふえ、フェイトだつてどうせそんな事ばかり考えてるんだろっ!?

僕はフェイトより全然マシだよっ!」

《考えるに決まってるよっ! せめて想像しないと生きていけないし、せめて妄想の中でくらいなのは抱きたいよっ!!》

※未成年の会話です↑

《今日だつてつ、今日だつて妄想通りなのはを快樂に堕ちさせるつもりだったのにユーノが邪魔するからっ!!》

《邪魔つて! 阻止するに決まってるだろっ!》

《本当はつ、本当は今ごろこうなつてつ…》

フェイトは静かに涙を流しながら妄想する。

——フェイトの妄想にお付き合ってください——

『あつ、やあつ、フェイトちやつ、そこはあつ、そこは舐めないでつ、ああんっ』

『本当は舐めてほしいんでしょ? なのは凄いい濡れてるね、そんなに大きい声出したら

ユーノが起きちゃうよっ?』

『ごめつ、ごめんなさつ、声ちつちやくするからあつ、だからもつとして…つ…もつと私
のここ舐めてえ…つ…お願い…フェイトちゃん…つ』

※ユーノへはフェイトが一人二役をして伝えました。↑

《ふえ、フェイトっ!!》

ユーノはフェイトの妄想の話に顔を更に真っ赤にする。

《フフフツ…♪ あ、鼻血がまた出そう》

フェイトは慌てて鼻を押さえた。

《君はいつもこんな妄想を?》

ひきつった表情をしてフェイトを見るユーノ。

《当たり前でしょ? さ、じゃあ取り合えずお粥食べようかユーノ》

《いや、自分で食べるよ…》

ユーノはフェイトからスプーンを取ろうとする。

が

《真面目そうな顔して夜はなのはの事ばかり…ううん、24時間ずつとなのはにHなことばかりする妄想してるんでしょっ!!》

《それフェイトの事だよねっ!?!》

《つべこべ言うんじゃないよユーノっ! 取り合えず熱いお粥をくらええっ!!!!》

フェイトはお椀に注いだお粥ではなく、熱々の鍋からスプーンでお粥を掬うとニヤリと笑う。

「ちよっ! フェイトまつ」

フェイトはユーノが口を開いたのを一瞬を狙い、スプーンを入れ込んだ。

「あっつっつっつ!!!!!!」

ユーノは噎せながらなのはが先ほど水を注いで置いてくれたコップに手を伸ばすが、コップがない。

すると

「ふはっ」

フェイトは満面の笑みでそのコップの水を飲み干していた。

(やられたっ!!)

ユーノは慌ててなにか冷たいものがないか探すと、丁度テーブルにペットボトルのお茶があつた為、それに手を伸ばした。

「あつ、それっ!!」

フェイトが顔色を変えて叫ぶと

その時にはユーノはキャップを開け、お茶をグビグビと飲んでいた。

「はっ、助かったっ……………っ……………!!」

フェイトっ!!火傷したじゃないかっ!

ユーノはペットボトル握ったままキレ気味に言う。

「ゆ、ユーノ…それ…っ……………」

フェイトはプルプルと体を震わせ、顔を俯ける。

「なに?　　とうかこのお茶…いつ買ったやつかな…昨日買ったっけ…?」

ユーノはフェイトの様子を見て首を傾げ、ふとこのお茶を買ったのか考え始めるが、
どうも記憶にない。

「ユーノくん、このタオルなんだけどつかつ……………なにしてるの…？ユーノくん……………」
「あ、なのは…別になにもしてないよ？」

「それ……………」

なのははユーノが握っているペットボトルのキャップが開いている事に気づき、頬を染める。

「なのは？」

「それ…飲んだの…？」

「うん」

「……………私の…お茶なんだけど……………」

「……………はい？」

幻聴か、そうかそうか。

取り合えずもう一度聞こう、ユーノはとんでもない言葉がなのはの口から聞こえてきた為、聞き直す。

「だ、だから、それっ、私のお茶っ……………」

なのはは恥ずかしそうにもう一度言う。

「えっ……えええええええっ?!!!!」

ユーノは一瞬で顔を真っ赤にして叫ぶと、ペットボトルをテーブルに勢いよく置いた。

「あはは……」

なのは頬を染めたまま恥ずかしそうに苦笑すると、手に握っていたタオルで口元を隠す。

「……………グスツ……………」

フェイトは体を震わせながら無言で泣いてい

(なのはと間接キス……なのはと間接……なのはと……なのはとお………あの淫獣………)

フェイトは大量に涙流してユーノを睨む。

「ゴ、ゴ、ゴ、ごめんなのはっ!! なのはのだったなんて知らなかったからっ!!!」

ユーノは顔を真っ赤にしたまま頭を抱える。

「あ、その……別に気にしないから大丈夫……だよ………あはは……間接キスだね……っ

て、私なに言ってるんだろっ！ はは……っ……」

なののは顔を赤くして苦笑する。

(そんなこと言われたら余計に意識するじゃないかなのはあっ!!)

顔を真っ赤にして内心で叫ぶユーノ。

「なののはっ、間接キスぐらい気にしちやダメだよっ！ 私達だつてしたことあるし、ねっ？」

フェイトは顔を赤くしているなののはに向かって言う。

「えっ、あ、う、うん？ そ、そうだね……？」

(あれ？女の子同士でもカウントされるんだ？)

なののはは不思議に思いながらも苦笑し、頷いた。

(ユーなののフラグが立つなら私がへし折るだけっ……このままじゃまたフラグが立つかもしれない……それだけは阻止っ!!)

フェイトはなにか策はないかと考える。

と

(あ………体温計………)

フエイトは暫く体温計を見つめ、ニヤリとにやついた。

そんなフエイトには気づかないのはとユーノ。

「えと、ユーノくん、食欲はどう？ あんまり食べてないみたいだから…」

なのははフエイトの隣に座ると、コップに水を注ぎ、ユーノの前に置く。

「あ、いや、食欲はあるよ。 えっと…熱いからなかなか食べれなくて…」

なんとなく誤魔化すユーノ。

取り合えずフエイトに熱いお粥を無理矢理口に入れられた事は黙っておく。

「ごめんね、温め過ぎたみたいだね…って、フエイトちゃんユーノくんを食べさせてあげるんじゃなかったの？」

「……………」

フエイトは無言でなのはに背を向け、なにかをしている。

「フエイトちゃん？」

「ごめんなのは、ユーノに食べさせてあげて」

「え？」

「ちよつと…今出来なくて」

「あ、わ、わかった」

なのは何ししてるんだろう？と気になったが何も聞かず、お碗とスプーンを手に取るとお粥を掬う。

「ふう……ふう……はい、ユーノくん、あーん」

「あ、あーん……」

「どう？ 熱いかな？」

「うん、丁度いいよ、ありがとう、なのは」

ユーノは頬を染めながらなのはに向かって微笑んだ。

「じゃあもつと食べよう？」

「うん」

「はい、あーん」

「あーん……」

なのはとユーノが甘々な空気を作っていると

ヤツが動き出した。↑

「ゲホツ、ゲホ…ッ！」

何処からか咳き込む声が出た。

この部屋にはなのは、フェイト、ユーノの3人しかいない。

ユーノはお粥を食べており、なのはは咳などしていない。

だとすれば

「フェイトちゃん大丈夫？」

なのははお碗とスプーンをテーブルに置き、フェイトのもとへ向かうと背中を摩る。

「えっ」

ユーノは顔をひきつらせてフェイトを見る。

「なのは………なんかちよつと頭がボーッとするから熱測ろうとしたんだけど……体温計、壊れてるみたい……ケホツ……」

フェイトは体温計をなのはに渡す。

「フェイトちゃんも風邪引いちゃったかなあ……体温計さつきまで大丈夫だったのに……」

あ、本当だ、つかない」

なのはは体温計のスイツチを入れようとするが、つかない。

「熱があるかなと思つて測ろうとしたけど……これじゃ測れないよ……あ、そうだ……なのは、さつきユーノにしてみたいにおでこで測つてくれない……?」

「あ、そうだね、じゃあフェイトちゃん、ちよつとこつち向いて?」

「うん」

フェイトは頬を染めながら顔を上げると、なのはを見つめる。

が

「ちよつ、ちよつと待つてよつ! フェイトさつきまで元気だったのにいきなりつ……」

(明らかにおかしい……つ……さつきなにかしてみたいだし……あんなに元気だったのにいきなり弱るなんておかしいよつ!)

「ケホツ、ケホツ……本当は朝からちよつと喉が痛くて……つ……ユーノの看病をしに来たのにごめんね……ユーノ……」

フェイトは風邪アピールをし、ユーノに謝る

が、ユーノは見た。

一瞬ユーノへ向かってフェイトがにやついたのを。

「風邪気味だったんなら言ってくれたら良かったのに……寒いし悪化しちゃうよ……ほら、フェイトちゃんこっち向いて」

「うん」

なのは額をフェイトの額にあてる。

「んー……熱はなさそうだけど……」

（なのはの顔が目の前に……なのはの可愛い唇が目の前にいい……可愛いっ、ダメっ、鼻血出したらアウト……っ！　ああああ……っ……その可愛い唇を奪ってあげたい……押し倒したいっ……）

フェイトは段々と顔を赤くし、心拍が上昇する。

フェイトがまたまた脳内でなのはにあんなことやこんなことをする妄想をしている事を知らないのは。

「あれ、フェイトちゃん顔が赤く……熱があるのかな……体も熱いね」

なのははフェイトの首に触れながら言う。

「そうだね……あるかも……」

（なのはが私の首を触って……っ……なのはにら服を脱がされても……触れられたら体が火照ってきた……）

脳内でムフフと笑いながら妄想するフェイト。

なのはに触れられ、興奮したのか体が火照り顔が更に染まる。

「わっ、フェイトちゃん体が凄く熱いよっ！ た、大変っ、どうしよう……っ……フェイトちゃん、取り合えずソファーに横になろう？」

「……うん……」

フェイトはなのはに支えられながら立ち上がり、ソファーへ向かう。

「えっ、ちよっ！ なのはっ！」

「ごめんね、ユーノくん、お粥……食べててくれないかな？」

フェイトちゃんも熱出しちゃったみたいで……」

なのははソファーにフェイトを寝せると苦笑し、水に浸したタオルをしぼるとフェイ

トの額に乗せる。

「わ、わかった……けど……その……なのはもあまり無理しないでね、僕は今のところ熱下がってるし」

（熱が下がってる間は起きておこう……フェイトがなのはににするかわからないし）

ユーノはお碗とスプーンを手に取り、なのはとフェイトを見ながらお粥を食べ始める。

「うん、ありがとう、ユーノくん。私は平気だから安心して？ あ、毛布借りるね」

なのははユーノが使っていない畳まれた毛布を抱えると広げ、フェイトにかける。

（ユーノの毛布っ!!? ちょっととまっ、私はなのはの体で温めてもらおうとっ!

というかユーノは早くお粥食べて寝ろよっ!!!）

フェイトはユーノの毛布をかけられ、ひきつった表情をする。

「フェイトちゃん、寒かったら言ってるね? 掛け布団も借りるから……」

なのはは心配そうにフェイトを見ると、フェイトの手を握る。

「う、うん……ありがとう、なのは……」

（ああああああっ……可愛いつ、なののが可愛すぎて辛いっ、何でこんなに可愛いのか……大丈夫だよなのは、今はなののお陰で体が火照ってるから熱いくらいだよ）
「でも困ったなあ……フェイトちゃんがこの調子じゃ帰れないよね…

一応泊まる準備はしてきたんだけど…」

なののはの発言にお粥を吹き出すユーノと

思わず呼吸が止まるフェイト。

「えっ、ちよっ、ユーノくん大丈夫っ!？」

「だ、だだ、大丈夫っ、平気平気っ」

苦笑しながら言うユーノの手はカタカタと震えていた。

（なののが泊まる……なののが泊まるっ!?)

ボンツと音が鳴るのではないかと思うほど真っ赤になるユーノ。

と

一方…

「な、ななな、なのっ、なっ、なのはっ！」

なのはの名前がなかなか言えず、やっとの思いで名を呼ぶフェイト。
動揺し過ぎである。

「なに？ どうしたのフェイトちゃん」

「泊まるのっ?! ユーノの部屋に泊まるのっ?!」

「えと……出来れば泊まりたいなって……ユーノくん無茶しそうだし……」

取り合えず、フェイトちゃんは後でアルフさんに迎え」

「大丈夫っ!!! なのはが泊まるなら私も泊まるっ!!」

（ユーノと一夜を過ごさせるわけにはいかないっ……ユーノだって男っ、夜変貌してなのはをバインドで縛ってなのはにあんなことやこんなことをするかもしれないっ!!
ユーノに犯されながら泣くのは……っ……あ、鼻血出そう）

フェイトは自然と妄想モードに入り、慌てて現実に戻ると鼻を押さえる。

「えっ、フェイトちゃんも?」

「うん、なのはに看病してもらいたいし……なのはとユーノが二人きりなのは心配だし

…

「あはは、やだなあフェイトちゃん、ユーノくんと二人きりになるからって風邪移るとは限らないよ?」

苦笑しながら言うのは。

フェイトの言葉の意味を全くわかっていない。

「そ、そうだけどね……あはは……」

(意味が違うっ、意味が違うんだよなのはっ…)

フェイトは内心でシクシクと泣いていると

「じゃあ、ユーノくん、今日は泊まらせてもらうね」

もはやユーノの許可を貰う気無し。

「あの…僕男なんだけど…」

「そんなの前から知ってるよ? なにいつてるのユーノくん」

「あー……うん……ごめん……」

(わかっていない、意味をわかっていないよなのは………まあ、そんなことしないけど)

ね)

笑みながら言うなのはに苦笑するユーノ。

「よし、じゃあ夜ご飯はどうしようかなあ……ユーノくん家の冷蔵庫飲み物ぐらいしか入ってなかったから後で買い物に行かないと」

「なのは、私お粥がいい。あ、卵入りで」

「あ、うん、わかった」

「僕もお粥でいいよ、風邪引いてるから丁度いいし」

「ユーノくんもお粥ね、わかった」

なのはメモ用紙に材料を書くとポケットに入れる。

「もうすぐ1時かあ……3時頃に買い物に行こうかな」

（3時頃……なのはは買い物に……ユーノと二人きり……なのはが帰ってこないとかそんなオチないよねっ!?)

フェイトはユーノと二人きり、を考えて顔をしかめる。

(なののが買物物に行ってる間、フェイトと二人きりか……はあ……)

ユーノもフェイトと二人きり、を考えてため息を内心で吐く。

「よし、じゃあ今日は泊まり込みでユーノくんの看病と、フェイトちゃんの看病をするからねっ」

「うん、お願い……ケホッ……」

フェイトはわざとらしい咳をしながら言う。

「お粥ごちそうさまでした。あはは、明日には治るよう頑張るよ」

(夜が不安で仕方ない……)

苦笑しながら言うユーノ。

まだまだフェイトの暴走となのはの行動にユーノは振り回されるようだ。

なのはさんの全力全開の看病、もう少し続きます。

全力全開の看病〈6〉～泊まり掛けの看病なの～

「フェイトちゃん、体調はどう？」

「うん、大丈夫…さつきよりは楽だよ」

あれから1時間、時刻は約2時。

「良かった、じゃあちよつとユーノくんのところに行つてくるね」

なのははフェイトの頭を優しく撫でるとソファから離れ、ユーノが寝ているベッドへ向かう。

「あつ、なのは…っ……」

（ユーノまだ寝てないのっ!? 風邪ひいてるのに何で寝ないのっ!?)

フェイトはなのはに手を伸ばすが、なのははユーノのもとへ行ってしまった。

「ユーノくん、体調はどう？」

なのは洗面器の水に浸したタオルをしぼり、ユーノの額に乗せる。

「うん、大丈夫だよ」

「なら良いんだけど……ユーノくん、汗かいてない？体とか拭かなくて大丈夫？」

「ええっ!?　だ、大丈夫だよつ、平気だからっ！」

なのはの発言に顔を赤くするユーノ。

「そう?　わかった」

なのははそう言うのと座り、ユーノを見つめる。

「なんか改めて考えるとこうして3人で過ごすのって久しぶりじゃない？」

特にユーノくんは無限書庫が忙しいから……」

「あはは、そうだね……本当に……なのはと一緒にこうやって過ごすのは久しぶりだね、最

近は通信でたまに話すくらいだし」

頬を染めてなのはを見つめるユーノ。

なのはもまた、優しげな瞳でユーノを見つめている。

が

《私がいるの忘れてる？ おーい、フェイトがいるの忘れてませんか？ いつまでなのはと話してるの、私はもうとっくに体の熱が冷めてるんだけどなー、なのはに温めてもらわないと寒いんだけどなー》

なのはと話をしていると念話でフェイトが話しかけてくる。

(うるさい……取り合えず無視しよう。 少しくらいなのはと話したいし)
ユーノは表情をひきつらせるとフェイトの声を完全に無視する。

《無視っ!? 無視する気なのっ!? ユーノっ! 人の話聞いてるっ!? 淫獣っ! 眼鏡ーっ!!》

ひたすら念話で叫ぶフェイト。

(眼鏡って……あ、無視無視……なのはに集中集中……)

「コホンッ」

ユーノは咳払いをする。

「ユーノくん大丈夫？」

「あ、平気だよ」

「咳止めの薬あるけど飲む？」

「ああ、大丈夫だよ、咳はそんなに出ないから」

「ユーノくんがそう言うなら……別にいいけど……咳が酷くなったら飲んでね？」

「うん。ねえなのは、眠れないから少し話相手になつてくれない？」

「いいけど、寝ないとダメだよ？」

「わかってるよ、少しだけだから」

「うん、じゃあ少しだけ」

「じゃあ……えっと……」

なのはと話をしたい、そう思っていたのだがなにを話そうかと悩むユーノ。

5年も思いを寄せている思い人が自分を見つめている、ユーノは気恥ずかしさから視線をそらした。

「ユーノくん？」

「あ……ごめん……えっと……」

なにを話そうか、なにを話せばいいのか、思いつかない、どうしようかとユーノが思っている

「あつ、そうそう！ この前ね、アリサちゃんとすずかちゃん、私とフェイトちゃん、動物園に行ったんだけど、その動物園にフェレットがいたのっ！」

嬉しそうにスマホをユーノに見せるのは。

スマホにはなのが撮影した可愛らしいフェレットが写っている。

「フェレット？ 可愛いね」

「ユーノくん、そっくりでしょ？ なんかフェレットモードの頃のユーノくん思い出しちゃって楽しかったよ」

「あはは、フェレットモードか…懐かしいね」

「そうだね…ユーノくん、今度久しぶりにフェレットモードになってみてよ、久しぶりに見たいな、フェレットユーノくん」

嬉しそうに笑みながら言うのは。

「ええっ!? いや、変身魔法最近使わないから上手く出来るかわからないし…」

（フェレットモードになったらなのは揉みくちやにされそうだし…まあ…悪くはな

いけど……ってなにいつてるんだ僕は……)

なのはの発言と自分に苦笑するユーノ。

「えー？ ユーノくんなら余裕で出来るよ〜」

「あはは……まあ、いつかするって事で……」

苦笑しながら誤魔化すようにユーノが言っている

「ゲホツ、ゴホツ！」

咳き込む声が聞こえた。

「あつ、フェイトちゃん！」

なのはは慌ててフェイトのもとへ駆け寄る。

「な、なのは……ごめん、ユーノと話してたのに……」

「気にしないで、咳止めの薬あげるから飲んで？」

なのははフェイトに咳止めの錠剤を渡す。

「あ、ありがとう……」

(風邪ひいてないのに咳止めか……演技の咳し過ぎて喉が痛い……)

フェイトは起き上がると錠剤を見る。

「はい、お水」

なのはコップに水を注ぎ、フェイトに渡す。

「うん…ありがとう、なのは」

「これで咳が止まると良いんだけど…」

「そ、そうだね…」

《フェイト、風邪引いてないんだろう？ 薬飲んで大丈夫なの？》

ユーノが念話でフェイトに話かける。

《薬くらい大丈夫だよ、それよりも……ユーノ…もしフェレットモードになってなのは服の中に入り込んだりし》

《しないしないっ！ そんなことしないからねっ!?!》

《もししたらっ》

《だからしないってばっ!!》

ユーノが若干キレ気味で叫ぶと

「2時30分過ぎたかあ……そろそろお買い物に行こうかな」

なのはが時計を見て言うと

「え、もう行くの……?」

ユーノがベッドから起き上がり、言う。

「うん、早めに行つて帰つて来ようと思つて、つてユーノくんちゃんと寝てないとダメだよ」

「そっか……あ、大丈夫だよ、寝るから。で、なのは」

「なに?」

「あのさ……その格好で行くの?」

ユーノは頬を少し染め、苦笑しながら言う。

「あつ、そうだね、流石にこの格好じゃ行けないや」

なのははバッグから服を取り出す。

「えつと、脱衣所で着替えるといいよ」

ユーノは顔を赤くしながら脱衣所を指さす。

「うん、ありがとうユーノくん」

なののは服を持って脱衣所へ向かった。

（何も考えるなっ……なののはが着替えてるからってこんなに緊張する必要はないだろ僕……っ！）

ユーノは着替え中のなののを想像し、顔を真っ赤にするとベッドに再び寝る。

一方

（なののはが着替えてる……なののはがナース服脱いで下着姿になって……なののはの可愛いブラとショーツが今そこに……っ……）

あ、ヤバッ……鼻血出てきたっ……）

フェイトは慌てて鼻を押さえ、なののはがまだ脱衣所から出てこないのを確認すると起き上がり、ティツシユを取る。

「フェっ……フェイトなにして……」

ユーノはひきつった表情をしてフェイトを見る。

「育ち盛りの子はたまらん……」

ウヘへとやけながらティツシユを鼻につめるフェイト。

「なに言つて……」

ユーノは更に表情をひきつらせ、フェイトを見る。

すると

「よし、着替え終わった〜」

なのはが脱衣所のドアを開け出てきた。

「っ!?!」

フェイトはなのはの声がする方を振り返る。

まだ自分に気づいていない、ならば今のうちにソファーへ
と思ひ、フェイトは慌てて立ち上がり、ソファーへ向かう

が

「へふっ!!!」

フェイトはカーペットに足を躓かせ、勢いよくその場に転んだ。

「フェイトっ!?!」

「フェイトちゃんっ!?!」

なのは慌ててフェイトに駆け寄る。

「ぐっ……こ、これは……別の意味で鼻血が……」

フェイトはプルプルと体を震わせながら起き上がり、ティツシユをつめていない方から鼻血がポタリと床に落ちる。

「ふえ、フェイトちゃん大丈夫っ!?! 鼻血出てるよっ!! た、大変っ、取り合えずティツシユをつ」

なのは慌ててフェイトにティツシユを渡す。

「あ、ありがとうなのは」

フェイトはついに両鼻にティツシユをつめた。

女子としてこれはどうなのだろうか。

「だ、大丈夫かい……? フェイト……」

(なんとというか……フェイト容姿は完璧なのに……流石に年頃の女の子がそれは……)

ユーノは苦笑しながら言う。

「大丈夫、これくらい平気だよ。」

フェイトは立ち上がり、振り返って言うが、ティツシユをつめているせいで鼻声になつているのを聞き、なのはとユーノは苦笑する。

「フェイトちゃんおでこ赤くなつてる…痛い…?」

「痛くないよ、大丈夫。なのは、そのワンピース可愛いね」

フフと笑みながらなのはの手をちやつかり握るフェイト。

「あ、ありがとう…:フェイトちゃん体調は大丈夫なの…? ちゃんと寝てないとまた熱出ちゃうよ?」

なのはは苦笑しながらフェイトの手を握りしめ返す。

「あつ」

フェイトは表情をひきつらせる。

(あはは…:絶対忘れてたね、風邪ひいてる演技してたの)

ユーノは呆れた表情をしながらフェイトを見る。

「ゲホツ、ゴホツ、だ、大丈夫だよなのは…:今は熱ないから平気、気を付けて行ってきて

ね、なのは…ゲホッ」

フェイトはわざとらしい咳をしながらふらふらとソファーへ向かい、横たわった。

「えつと…じゃあ…フェイトちゃん、ユーノくん、私はお買い物に行ってくるからちゃんとしてね？」

なにかあつたらすぐ通信か電話してよ？」

「うん」

（フェイトと二人きりか…凄く不安だ…）

「う、うん、気を付けてね、なのは…」

（鼻で息が出来ないってこんなに苦しいんだ…っ…）

フェイトは苦笑しながらなのはに手を振る。

「それじゃあ、行ってきます」

なのはは玄関で靴を履くとドアを開け、部屋を出た。

ドアはガチャリと音を鳴らして閉まる

のを確認すると

フェイトはにやついた。

「二人きりに…なったね、ユーノ…」

「そうだね…それじゃあおやすみ、フェイト」

ユーノは取り合えず眠ることにした。

瞼を閉じ、眠ろうと。

「寝させてたまるかあああつ!!!」

フェイトはガバツ!と起き上がり、目をキラーンと光らせてユーノのもとへ来ると、

ユーノの掛け布団を剥ぎ取る。

「うわあつ?! ちよつ、フェイトっ!?!」

「ユーノ…:…なのはをかけて真剣勝負だよっ!!」

フェイトはポケットからトランプを取り出し、ユーノに見せる。

が、全て鼻のティッシュと鼻声で台無しだ。

「いや…あのさ、僕風邪ひいてるんだけど……」

「大丈夫、今は熱ないでしょ？　　とうか寧ろ私に風邪を移してくれてもいいんだよ？」
 「いやいや、今は薬飲んだから熱がないだけで……とうかなんでフェイトが大丈夫なのかを決めるんだよ……」

ユーノは苦笑しながら言う。

「水風呂にでも入れれば風邪ひくかな……私も本当に風邪ひいてなのはに看病してもらいたい……」

フェイトがトランプを片手にブツブツと呟く。

(取り合えず寝よう、眠りさえすれば……)

ユーノはフェイトを見て、掛け布団を整えると瞼を閉じ、再び眠ろうとする。

「寝るなって言っただろうがあああつ!!!」

フェイトは再びユーノの掛け布団を剥ぎ取る。

「わああああつ!?!　ちよつ!　フェイトいい加減につ!!」

「勝負はババ抜き、勝った方は…今晚なのはを独占できる券をもらえるっ!」

「なんだそれ……独占って…なのはは看病しに来てくれてるんだし、物じやな」

「ユーノ……ユーノは男なんだよ、なのはと一晩過ごすんだよ……あんなに可愛いのはを前にしてなにもしないなんて無理でしょ？ どうせ私が寝たの確認したらなのはを襲うんでしょ!？」

「前から思ってたけどフェイトには僕がそんなやつに見えるのっ!？」

「え、だって男だし……男だし……」

「それだけが理由っ!？」

「とにかくっ!! 一戦だけ勝負っ! 負けても文句無しだからねっ!」

「一戦だけしたら終わりだよね? フェイトはともかく僕は風邪ひいてるし……」

「当たり前だよ、一戦だけの真剣勝負っ! さ、テーブルの前に座ってっ」

フェイトは座り、トランプをシャッフルする。

「フェイト、じゃあ僕からも…僕が勝つたら、なのはにはなにもしない事、襲ったり変に触ったりしない事、いい?」

「というか、勝った条件にしなくてもやめてほしいんだけど……」

ユーノはそう言いながらベッドから降り、フェイトの前に座る。

「いいよ、私が勝つから!」 というか…あんなのスキンシップだよ」

トランプを配りながら平然と真顔で言うフェイト。

「どこが!？」

そんなフェイトにツッコむユーノ。

「女子同士なんだし、スキンシップだよ」

「どう見てもあれはセクハラだよっ!!　なのは若干嫌がつてるじゃないか!」

「はあ……わかってないねユーノ……嫌がつてるように見せかけて内心では喜んでるんだよ、なのはは。私の妄想ではそうだよ」

「それ妄想の中でだよねっ!？」

「風邪ひいてるとは思えないくらいにツッコみだねユーノ。ほら、トランプ配ったよ」

「誰のせいでツッコんでると思ってるんだよ………まったく……」

ユーノはため息をつきながらトランプを見る。

「あ、ジョーカーいない………という事は……フェイトが持つてるのか」

（何でジョーカーが私のところにいいいつ?!　運がなっ……いや、表情さえ……表情

さえ変えなければ大丈夫、どこにジョーカーがあるかなんてわからないはず。一戦だ

けの真剣勝負………）

（なののはの為にも……）

(なのとは私の百合ルートの為にも…)

(この勝負、負けられないっ!!!)

バチバチとトランプを手に見つめあつて火花を散らすフェイトとユーノ。

一方的にフェイトが、だが。

その頃のなのはさん

「あ、野菜安いなく…って、違う違う、自分の買い物じゃないんだし…必要な物だけ買って帰らないと」

「つつい野菜を手を取ろうとしたなのは、イヤイヤと首を振り、歩き出す。」

「卵はどこかな…」

「奥様聞いた〜？ この近所で中年の男性が捕まっただんですって。」

「あら、本当？」

「なんでも、その男性女の子や女性を見かけてはストーカーしてたんですって」
「やだあく、怖いわね」

「それに、あちこちのスーパーでフランスパンを万引きしてたらしいわよ」
「あらあく…やだわあ、なんでフランスパンなのかしら？」

「怖いわよね、ストーカーだなんて。フランスパンだなんて謎よね」
「本当ね」

（フランスパン？ あれ、フランスパンって………フェイトちゃんが言ってたオジ

サンの事？ 捕まっただっ、良かったあ…）

おば様達の話聞いてホッとするのは。

「って…あつたあつた、卵見つけた、えつと…次は……」

フェイトとユーノが寝ずに自分をかけて勝負（トランプ）をしていると知らずに買い物をしているのは。

なのはさんの看病、

とフェイトとユーノのトランプ対決は

まだもう少し続きます。

全力全開の看病へ7へユーノくんとフェイトちゃんのと
ランプ対決とお婆さんとなのはなの

あれから15分後

フェイト↓残り2枚

ユーノ↓残り1枚

（なにこれっ!! 負けるフラグ凄い立ってるじゃんっ!! 何でユーノは1回もジョーカー引かないのっ!!）

フェイトはガタガタと手を震わせ、涙目になりながらユーノを睨む。

「残り1枚……フェイト、僕の勝ちだよ」

ユーノはそう言うのと、フェイトのカードを引こうとする。

(右か左か……よし、右のにしよう)

ユーノは右のカードを掴み、引こうとする

が

「……ちよつ……ちよつとフェイト?

カード、そんなに力入れてたら引けないんだ

けど」

(やっぱり左がジョーカーだったか!!)

苦笑しながらなんとかしてカードを引こうとするユーノ。

「ユーノ………それ、ジョーカーだから引かない方がいいよ」

ユーノから視線をそらして言うフェイト。

「明らかに嘘だよ、それ。前から思ってたけどフェイト嘘つくの下手だよ」

真顔で言うユーノに対してガタガタと震えるフェイト。

明らかに動揺している。

「う、嘘じゃないっ! フェレットに誓えるよっ! このカードはジョーカーだよっ!!」

「いやいや、ないわ、それはないよフェイト」

「言い間違えただけなんだよユーノ、そんなに言わなくてよくない？」

冷や汗を出し、苦笑するフェイト。

「あれは言い間違いじゃないよ、どう聞いても。」

ジト目でフェイトを見るユーノ。

「うっ……じゃ、じゃあ……その……なのは写真送ってあげるからそれで許して」
「何の写真？」

「なのはが妊娠け……じゃなかったっ、なのはが体温計持つてる……これだよ」

フェイトはスマホに映ったなのはの例の写真をユーノに見せる。

「こ、これっ……！」

（あの時見たフェイトが待ち受けにしてた写真っ!?)

ユーノは写真を見て顔を一気に赤くする。

「後でメールで送るっていうのでどう？　写真送ってあげるから後一戦、お願いっ！」

「い、いやいやっ、その……っ……」

（落ち着け、冷静に、冷静に考えろ僕っ……あ、あ、あんな写真……欲しくないうって言った

ら完全な嘘になるけど……

あんな写真僕が持つてるの見つかつたら……なのはに殺されるっ!!)

—— ユーノの想像 ——

〈ハマスター、あの変態(ユーノ)をお仕置きしましょう。〉

チカチカと光る赤い球、レイジングハートがどこか嬉しそうに言う。

『そうだね、レイジングハート……』

『ちよつ、ちよつと待ってよなのはっ!! 確かに写真を持ってた僕が悪かったけどこれはっ』

『ユーノくんにはガツカリなのっ! 変態さんにはお仕置きなのっ!』

『デイベインツ!!』

なのははレイジングハートをバスターモードにし、魔法陣を展開すると構える。

『ま、待つてよっ!! 本当の変態はそこにいつ』

ユーノはグヘへとやついて笑うフェイトを指さすが

『バスターツ!!!!』

『うわあああああっ!!!!
!?!?!』

桃色の魔力光に飲み込まれた。

(見える…見えるよ……僕がバスターに飲み込まれたのを見てガッツポーズをとるフェイトが……)

たとえ想像の中だとしてもガッツポーズをとるフェイトにイラツとしたユーノ。赤かった顔がいつの間にか青くなっている。

「フェイト、写真は断るよ、僕の為にも。仕方ない、後一戦だけならいいよ、しよう。

だけど…次で終わりだからね、いい？」

「OKだよユーノ、私には勝利の女神、なのはがいるからね」

フツと笑いながらカードを配るフェイト。

「今なのははいないけどね」

真顔でツツコむユーノ。どこか疲れているようだ。

「いや、私の心にいるんだよ」

「そうだったね、ごめん」

まったく感情がこもっていない返事をするユーノ。

フェイトはカードを配り終え、腕をグルグルと回して気合いをいれる。

「よし、なのは、私に力を貸してねっ」

フェイトは自分のカードを手に取り、見る。

と

「ファツ?!」

フェイトは目を見開くと顔を青くした。

(なんで……なんでお前がいるんだよおおおっ!!!)

フェイトは内心で一枚のカードを見て叫んだ。

そう、フェイトの手持ちのカードにはやつがいた

ジョーカーだ。

(のんきにジャグリングしやがって……っ! なにがジョーカーだよっ!! その赤い鼻とつてやろうかつ!!!)

内心で血涙を流すフェイト。

勝利の女神ことなのはは変態に力を貸さなかった。
まあ、当たり前だろう。

(フェイト、またジョーカー持つてるな……まあ、引いたとしてもまた引かせればいいんだから大丈夫か……)

プルプルと体を震わせ、カードを見て涙を流すフェイト。
そんなフェイトを見てユーノは苦笑した。

「よし、とにかく始めよう、ユーノっ！」

「うん、始めようか」

バチバチと火花をちらす二人。

なのはをかけたトランプ対決、第二戦が今始まる。

「あ、ちよつと待って」

「えっ？」

「は……っ……ふんっ!!」

フェイトは鼻に力を入れ、鼻に入れ込んでいたティツシユを飛ばした。

「……………」

ユーノは表情が凍りつき、目が点になる。

「よし、じゃあ始めようかユーノ。 って…あれ、どうしたの?」

目を点にして硬直しているユーノに首を傾げるフェイト。

「あ……あはは……いや、なんでもないよ……」

表情を凍らせたまま言うユーノ。

「変なの」

(フェイトいつの間になんな子になったんだ……………あれは…ないわ……………)

顔を青くしてフェイトを見るユーノ。

気を取り直して、なのはをかけたトランプ対決第二戦、始まります。

その頃のなのはさん

〈大丈夫ですかマスター〉

「あはは…大丈夫だよ、レイジンググハート。 ちよつと痛いけど…」

苦笑しながら首もとを触るなのは。

首もととはうつすらと赤くなっている。

「でも危うく死んじやうところだったよ…あはは…」

遡る事数分前

買い物を終えたのははユーノの部屋へと帰っていた。
が

『どういけばええのかわからんわあ〜…』

お婆さんが小さな地図を片手にうろろうろとしていた。

『お婆さん、どうしたんですか?』

なのははお婆さんを見て駆け寄り、話しかける。

『あつ、お嬢さんや、助けてくれ……この公園に行きたいんだけど道がわからなくてねえ……』

お婆さんはなのはに地図を渡す。

『ああ、この公園ならすぐ近くで……良ければ公園まで一緒に行きますよ』

『いいのかい？ ありがとうねえ……優しいお嬢さんだ』

お婆さんは嬉しそうに笑む。

『あ、良かったら背負いますよ、乗ってください』

なのはは優しく笑むと、屈む。

『いやいや、お嬢さんにそこまでしてもらおうわけにはいかんよお』

『いえいえ、乗ってください、大丈夫ですから』

『……いいのかい？ ごめんねえ、ありがとう』

お婆さんはなのはの上に乗る、なのははお婆さんを背負うと歩き出す。

『重くないかい？』

『全然軽いですよ』

『本当にありがとうねえ』

お婆さんはそう言うのと、なのはの首もとに腕を回し、落ちないようにと腕に力を入れる。

『ぐつ、ううつ、お、おはあさつ、締まってるっ締まってるっ!!!』

なのはは顔を青くし、苦しさに叫ぶ。

『なんか苦しそうだね、どうしたんだい?』

『腕っ、首締めてますっ、うでえ…っ!!』

なんとお婆さんの腕がなのはの首を締めていた。

『腕? あつ、あああつ! ぐ、ごめんよお嬢さんっ! 大丈夫かい…?』

お婆さんはパツとなのはの首もとから腕を離す。

『ゲホッ、ゲホ…ッ! はっ…はあ…っ…だ、大丈夫です…あはは…腕は肩に置いといて下さい…』

なのはは苦笑しながら言う。

お婆さんはなのはに言われた通り肩に腕を置く。

(死ぬかと思った…あはは…)

なのはが顔を青くしたまま歩き続けて数分後

『おお、ありがとうねお嬢さん、公園に着いたわ』

『はい、それじゃあ私はこれで』

なのははお婆さんをおろした後、礼をすると歩き出す。

『本当にありがとうねえ〜っ!』

お婆さんはなのに向かつて手を振っていた。

「まあ、無事にお婆さんを送れて良かったよ」

〈そうですね〉

「さ、早く帰ろっ、ユーノくん達が待つてるから。」

「ちゃんと寝てるかな〜?」

〈マスター、走って帰りませんか?〉

「えっ、は、走るの?」

〈たまには走りたいです〉

「いや、走るのは私なだけど……」

〈さあ、行きましようマスターっ!〉

風を体を感じるのですっ!

走れマスターっ!〜

「えっ、いや、あの……」

「ゴォゴォマスターっ、走れマスターっ!!」

なかなか走らないのはに若干キレ気味に言うレイジングハート。

「な、なんでキレ気味なのっ？ わ、わかったからっ、走るからっ、だからそんな大声で言わないでっ」

なのはは表情をひきつらせ、嫌々走り出す。

「マスターっ、風がっ、風が気持ちいいですよっ！ ヒューッッ」

「言っとくけどっ、レイジングハートは走ってないんだからね!」

なのははレイジングハートに向かって叫ぶと、走ってユーノの部屋へと向かった。

「後残り一枚、今度も僕の勝ちだよフェイト」

「ぐ……っ……」

またまた

フェイト↓残り二枚

ユーノ↓残り一枚。

「じゃあ、引かせてもらおうよ、フェイト」

ユーノはフェイトのカードに手を伸ばす。

「待ってっ!!」

「えっ」

「シャッフルを……」

フェイトは険しい表情をしながら二枚のカードをシャッフルする。

「さっ、引くがいいよユーノっ!!」

(右引け右引け右引け右引け右引け右引け右引け)

フェイトは内心で右引けと呪文のように言う。

「じゃあ……左引くね」

ユーノは左のカードを引こうとする。

「………待って」

フェイトが顔を俯け、言う。

「えっ?」

「シャッフルうまくできてなかったみたい、もう一回シャッフルするね」

フェイトは表情をひきつらせ、カードをシヤツフルしようとする。

「ちよつ、フェイトっ！ いい加減に…っ！」

「なのはとの一夜がかかっているんだよっ!!」

フェイトはそう言うのとトランプを胸元に入れ込んだ。

「なっ!!」

フェイトの行動に表情をひきつらせるユーノ。

「あつて良かった胸っ！ ジョーカーは今私の胸元にあるよ、チエリーなユーノにはとれないでしょ？」

「さあ、負けを認めてよユーノっ！」

ドヤ顔で言うフェイト。

「もはやトランプした意味ないじゃないかっ!!」

「ほら、負けを認めっ」

「ないよっ!!」

ユーノはそう言うのと立ち上がり、フェイトのもとへ向かう。

「なっ、触るつもりかこの淫獣っ!!」

フェイトは殴りかかる体勢をとる。

「触るわけないだろっ!! 違うよ、僕はフェイトの横にある僕のスマホを取ろうとっ」

「ユーノのスマホっ!?!」

フェイトは目をキラリーンと光らせ、ユーノのスマホを取ろうとする。

「ちよっ、フェイトっ!?!」

「ユーノのスマホおおっ!!!!!!」

フェイトはユーノのスマホを取り、ガッツポーズをする。

「か、返してよフェイトっ!!」

ユーノはフェイトが握っている自分のスマホを奪い返そうとした

その時、ユーノはバランスを崩してしまった。

やってしまいましたユーノ、

なんとフェイトを押し倒したような体勢になってしまった。

そしてそこヘナイスタイミング?

「ただいま……はあっ、はあ……っ」

疲れたような声でドアを開け、荷物を抱えて入ってきた。

「えっ」

「えっ」

フェイトとユーノは玄関から聞こえた声に目を点にする。

「……………すみません、部屋…間違えマシタ…」

なのはは玄関で目の前の光景を見て表情を凍らせ、取り合えず部屋を出る。

「ちよっ、なのはっ!？」

ユーノは慌ててフェイトから離れ、玄関へ向かう。

「違うのなのはっ、私は別にユーノのスマホのなのはの写真を見ようとしてたわけじゃっ!!」

フェイトは涙目になりながら立ち上がり、玄関へ向かう。

やっぱりフェイトはなのはしか頭がない。

なのはさんの看病、まだもう少し続きます…

番外編へくお正月く

着物なのはさんの初詣へ1く新年も振り回されますなの

く

あれから数年、

なのはとフェイトは立派な女性になっていた。

この日は新年を迎えたばかりの：

1月1日。

そう、この物語は恋する女性達の恋愛物語：

であり：そうではないかもしれませんが。

1月1日、この日…新年早々変態な事しか考えていない変態の中の変態、その名もフェイト・T・ハラオウンが、この日も暴走します。

【とある神社前】

「明けまして、おめでとうございます」

着物を着用した女性と少女が一人の女性に向かって一礼する。

「うん、明けましておめでとう、なのは、ヴィヴィオ」

着物を着用した女性、フェイト・T・ハラオウンはそう言うど屈み、少女の頭を撫でる。

「エへへ、おめでとう、フェイトママ♪」

ここにこと笑みながら言う少女は高町ヴィヴィオ、高町なのはの娘である。

「はい、ヴィヴィオ、お年玉だよ」

（ああ……いいよヴィヴィオ……もっとママって呼んでっ！）

大丈夫だよ、絶対に今年こそはなのはの夫…いや、妻…、ん…？
ま、まあ、ヴィオの本当の親になるから。

取り合えず今年こそは、なのはと結ばれてユ一なのルートを bad end にさせて私となのはは happy end を迎えるっ！それが私の今年の目標!!)

※去年も同じ目標でした。

「あはは、わざわざありがとう、フェイトちゃん。ほらヴィヴィオ、フェイトママにお礼は？」

ヴィヴィオと同様、にこにこ笑いながら言う女性が高町なのは。
これまでフェイトに数々のセクハラをされてきた被害者である。

「フェイトママ、ありがとう♪」

笑いながら言うで一礼するヴィヴィオ。

「いえいえ♪」

「それじゃあ、揃ったし、御詣りに行こうか」

ヴィヴィオの手を握り、なのはが言う。

「そうだね」

「うんっ♪ ……本当は…ユーノパパもいたのになあ…」

なのは達と歩きながらボソリと爆弾発言を言うヴィヴィオ。

そんな爆弾発言に目を点にする女性二人。

一人は顔を赤面に、もう一人は表情を凍らせて硬直。

(い、いいい、いいい、いま世界が終わるような言葉が聞こえた気がするけどきつと気のせいなはず…っ…)

新年早々耳がおかしいのかな？ ははっ、まだ若いのに…よし、今度病院に行こう！

ギギギツ…と恐る恐る首を動かし、ヴィヴィオを見るフェイト。

額には汗が浮かんでいる。

「ちよっ！ ちよつとヴィヴィオっ！ ぱ、ぱぱぱっ、ユーノくんをパパだなんて…っ！」

顔を真っ赤にして恋する乙女状態なのは。 そんなのはを見てフェイトの瞳

は死んだ。

「だってママ、ユーノさんが好きなんでしょ？ ならユーノさんは私にとってパパだ

よっ」

エヘヘ、と頬を染めて言うヴィヴィオ。

そんなヴィヴィオの発言にフェイトの心はSLBで撃ち抜かれた。

(待つて…っ…お願いだから待つてえ…っ…爆弾投下され過ぎてわけがわからなっ
…っ…ユーノがなに？ フェレットは可愛いねって？ 何でなのはの顔があんなに赤
いの？ 何でいきなり恋する乙女になってるの？

だれ…っ…誰がパパだつてえええっ?!)

フェイトは心の中で叫び、頭に浮かぶユーノを脳内で再起不能になるまで殴つてい
た。

「な、なに言ってるのヴィヴィオっ、これは私の片思いなだけでっ…っ…ユーノくんと一緒に
になれるかはわからないし…っ…それに私の片思いだけでユーノくんはパパになりま
せん！」

「えー…っ？」

ムスツと剥れるヴィヴィオ。

「もう、ユーノくんの前でパパだなんて呼ばないですよ？」

呼んだらどうなるか……わかるよね？ 高町ヴィヴィオちゃん？」
ニツコリと笑みながら言うのは。

「ひっ！ は、はいっ！ 高町ヴィヴィオっ、約束守りますっ!!」

なのはの笑みに顔を青くし、ガタガタと震えながら敬礼するヴィヴィオ。

「うん、わかつたならいいよ、ヴィヴィオ」

「は、はは……」

ヴィヴィオは額に汗を浮かべて苦笑する。

そんな二人の横で、

(パパ……っ……パパっ……いつから……いつから二人はそんな関係に……っ……)

なのははいつからフェレットを好きに!? 二人はもう体を重ねた関係に!?

何でもない素振りをしてなのはにあんなことやこんなことをしたのかあの淫獣はあ

あっ!!!)

フェイトは唇を噛み締め、叫ぶのを堪えていた。

なのはの話など耳に入っていない。

「よし、じゃあ御詣り、行こうか、フェイトちゃ」

屈んだまま固まっているフェイトを見て言うなのは
をフェイトは立ち上がり、ガシリとなのはの肩を掴んだ。

「フェイトちゃんっ!？」

「フェイトママ?」

「どうして……どうして言ってくれなかったの……っ……」

ユーノといつかからそんな関係に!? どこまでいったの!?

まさか妊娠なんてしてないよね!？」

涙目になりながら叫ぶように言うフェイト。 なのはは顔を青くして回りをキョロキョロと見る。

「にんしん?」

ヴィヴィオは目を点にしてなのはを見る。

「ち、ちがつ、違うのヴィヴィオっ、落ち着いてよフェイトちゃんっ!お願いだから叫ばないでっ、ね?」

なのははフェイトを落ち着かせようとするが、落ち着くわけがなく。

「なんだなんだ？」

「なにかしら？」

「揉め事か？」

フェイトの叫び声を聞いた人々が回りに集まってきた。

「私はっ……私はずつとっ、ずつとなのはのこと……っ……私はなのはのことがっ」

涙で瞳を潤ませながら告白しようとするフェイトだが、上手くいくわけがない。

「あ、なのはっ！」

少し離れた場所から男性がなのはの名を呼んで走ってくる。

「ユーノくんっ！」

なのはは男性の、ユーノの声を聞くと振り向いた。

「……っ……！ あのねっ、なのは、私っ」

ユーノの声を聞いて一瞬顔をしかめるも、勢いにのせて告げようとするフェイト。

「あつ、ユーノさんだっ！ ユーノさーんっ！」

ヴィヴィオは走ってくるユーノを見て嬉しそうに笑むとユーノに向かって手をふる。

そう、なのはの名を呼んで走って来たのはフェイトの恋のライバル&なのはが想いを寄せている、というより本人達は気づいていないが両想い中のユーノ・スクライア。

決してフェイトの邪魔をする為に来たわけではない。

毎度毎度彼のタイミングが良いだけだ。

「は……ははっ……久しぶりだね……ユーノ……っ……」

（わかってた、上手いかわないことくらいわかってた。

わかってたんだ……っ……）

フェイトは涙をポロポロと流しながらユーノを見る。

「はっ、はあっ……はあ……っ……えつと……何でフェイトは泣いてるの?」

走って乱れた息を調えながらユーノはフェイトを見て苦笑する。

「別に泣いてないよ……目にゴミが入って痛いだけだよ……っ……」

「そうなんだ……」

（絶対嘘だな……）

「ね、ねえ、ユーノくん…お仕事だったんじゃないの…？」
「なののが頬を染めながら言う。」

「あはは…ちよつと司書の皆に気使われちゃつてさ。」

「一時間休憩貰ったから急いで来たんだよ、まあ…後40分ぐらいしかないけど…ごめん。」

ユーノは腕時計を見て苦笑する。

「ううん……休憩の間に来てくれただけでも凄く嬉しいから…ありがとう、ユーノくん。
御詣りまだしてないから一緒にしよう？」

「うん」

お互い照れながら言う二人からは甘々な雰囲気が増え…

フェイトはそんな二人を涙で潤んだ瞳で見つめていた。

「フェイトママ大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ、ヴィヴィオ…っ…」

フェイトは優しく笑むヴィヴィオに思わず抱き締めた。

「えつと…よしよし♪」

ヴィヴィオはフェイトの頭を撫でる。

(ヴィヴィオがなんだか子供の頃のなのには見える……)

【フェイトの妄想】

『フェイトちゃん、大好きだよ……』

『フェイトちゃん♪』

『フェイトちゃん、一緒に……お風呂入ろ……？』

『キスしようよ』

『ひやつ！ もう、そんなところ触られたらっ、もっと触ってほしくなっちゃうよ……』

「……まっ……！ ……ママっ……！ フェイトママっ！！ 鼻血っ、鼻血が出てるよっ！」
顔をひきつらせて言うヴィヴィオ。

「なのひゃあ〜……」

フェイトは完全に妄想の世界に行っている。

「わわっ、フェイトちゃん鼻血がつ！ しっかりしてフェイトちゃん！ 鼻血が着物についちゃうよっ」

なののはティツシユをフェイトの鼻にあてる。

「……………ハッ！ あれ、なののは？ どうしたの？」

なののはの声を聞き、妄想の世界からフェイト・T・ハラオウン、帰還。

「どうしたのじゃないよっ、フェイトちゃん鼻血がつ」

「え、鼻血？ あ、ほんとだ。」

「もう……まだ御詣りしてないんだから着物汚しちやダメだよ」

苦笑しながら言うなのは。

「エへへ……ごめんね」

（ああ……今までののは全部夢だったんだ。今日は私となのはとヴィヴィオの3人で初詣に来たんだ。

そう、『3人』で…ユーノは仕事、いるはずがないんだから。」

ユーノはいない、そう思い込み、目の前なのはを見て笑むフェイト。 なんともしせそうな表情だ。

「あ、3人共着物だったんだ」

フェイトから居ない者扱いされているユーノがフェイトの着物を見て気づき、ヴィオ、なのはの順で見えて言う。

（夢じゃなかった…っ…）

ユーノの声が聞こえ、フェイトは一瞬で真顔になった。

「もー、今気づいたんですか？ それで、うちのママの着物姿っ、どうですか？」

なのはの後ろに立ち、なのはを立たせてクルリと一周回らせると、笑みながら言うヴィオ。

「ちよつとヴィオっ…」

顔を赤らめてヴィオを見るのは。

「なに恥ずかしがってるのママっ、折角着物着たんだし、ユーノさんにじっくり見てもら

わないとっ」

「じつくりって……」

なのは顔を赤くしたままチラツとユーノを見る。

「えつと……うん……綺麗だよ、なのは。似合ってる。後で写真撮ってもいいかな……」

？」

頬をほんのりと赤く染めながら言うユーノ。

「あ、ありがとうっ……うん……いいよ」

先程よりも顔を真っ赤にし、恥ずかしさに顔を俯ける。

（ママが照れてるっ……）

ヴィヴィオはそんなのを見てプククと口を手でおさえて笑うのを堪えていた。

モジモジと恋する乙女状態のなのはを見て不思議に思うユーノ。

そんな3人に空気扱いされているフェイトは立ち上がり、ガシリとユーノの肩を掴む。

「4人揃ったし御詣り、行こうか」

ニツコリと笑みながら言うフェイト。

声が少し震えているように聞こえるのは気のせいだろうか。

「あ、あの……フェイト……？」

ただ肩を掴んでいるように見えるがフェイトの手には力が入っており、ユーノは痛み
に表情をひきつらせる。

「休憩の間にわざわざなのは達に会いに来てくれてありがとう、ユーノ」

刺があるような言い方でニツコリと笑みながら言うフェイト。

「えっ……あの……えっと……っ……フェイト、僕なにかし」

「よし、じゃあ行こう、なのは、ヴィヴィオ」

フェイトはヴィヴィオの手を引いて境内へ入る。

《なにかしたかつて？ 笑わせないでよユーノ……新年早々なのはに告白しようとして
た私の邪魔をしたのはどこの誰かな？

なんでユーノはいつも空気が読めないの!?!》

なのは達の前では話せないため、念話でフェイトはユーノに話しかける。

《新年早々告白!?! いや、とか別を意識してそのタイミングで来たわけじゃない
しっ、空気読めないのはどっちかと言うとフェイトの方がっ》

《意識して来たわけじゃないとなると余計に腹立つんだけどな……っ……》

(なのはという私の女神の心を奪っておきながらっ……ユーノ……私は諦めないからね、
なのはへの愛なら負けないし。)

フツ、私とヴィヴィオとなのはは3人で楽しむからユーノは後ろから1人でついて来るといいよ)

フェイトはふと隣にいるなのを見る

が

「……あれ…？　　ヴィ、ヴィヴィオ、なののはは？」

隣にいるはずのなののはがいなかった。

フェイトはキョロキョロと回りを見渡すが、人混みでなののはが見当たらない。

「ママなら多分、後ろの方にいるんじゃないかな？　ユーノさんと二人きりになりたい

みたいだ」

「なのは達のところに戻ろう、ヴィヴィオ」

ヴィヴィオが言いかけている途中で言うと、フェイトは真顔になった。

「え？　フェイトママ？」

(着物姿のなののはを見て興奮したユーノがなののはを襲ってるかもしれない…)

二人きりになったのを良いことに隠れてあんなことやこんなことをしてるかも…)

【再びフェイトの妄想】

『だ、だめだよユーノくん…っ…人に見られちゃうよっ…』

『大丈夫だよ、ここからは見えないだろうし。なののはの胸…柔らかいね』

『やつ、揉まないでっ、ひゃあんっ…！』

『凄い硬くなってるよ、これ』

『擦らないでっ、ああんっ！ はう…っ、それだめっ……やあ…っ』

(ユーノに着物をはだけさせられて…胸揉まれながら乳頭を指で擦られて喘ぐなののは……たまらんっ…)

フェイトは妄想の中のユーノに体を愛撫され、喘ぐなののはを妄想し、恒例のアレがポタリと着物に落ちる。

「フェイトママ鼻血っ！ また鼻血が出るよっ！」

ヴィヴィオは慌ててハンカチをフェイトに渡す。

「え？ あつ、ほんとだっ」

フェイトはヴィヴィオのハンカチを鼻にあてる。

「フェイトママ…着物に血ついちゃってるよ…まあ、黒地だったから良かったけど…」

「ごめんね、ヴィヴィオ。ハンカチは今度洗って返すね」

（たまたらんって言ってる場合じゃないっ…実際になのはとユーノが体重ねてたら新年早々大問題だよ。

なのは待ってて、今助けにつ…変態淫獣から助けるからっ!!!）

「別にいいよ、洗ってもらわなく」

「行くよヴィヴィオっ!」

フェイトはヴィヴィオが言いかけている途中なのを気にせずに手を引き、ヴィヴィオを引きずるように無理矢理引っ張ってなのは達のもとへ向かった。

「ちよっ! わっ、フェイトママっ、待ってっ、イダダッ、痛いっ、痛いよっ! フェイトママってばーっ!!!」

目をグルグルと回し、尻を地面にぶつけ、痛みに涙を目に浮かべて叫ぶヴィヴィオの声はフェイトに届かなかった。

【その頃なのは&ユーノ】

「フェイト達先に行っちゃったね」

苦笑しながらユーノはフェイト達が行った方を見て言う。

「そうだね…」

（フェイトちゃん…私の為にユーノくんと二人きりにしてくれたのかな…

フェイトちゃんも応援してくれてる、はやてちゃんに言われたように、恥ずかしながらばかりじゃ伝わらないもんねっ…）

なのはは頬をほんのりと赤く染め、深呼吸をする。

「じゃあ僕達も行こうか、多分フェイト達あっちで待つてるだろうし。

人多いからはぐれないようにしないと」

ユーノはなのはに手を差しのべる。

「え…?」

「ほら、人多いからさ、はぐれないように…手…繋いだ方が良かったって…」

（別に意識するようなことじゃないのになんか恥ずかしくなってきた…）

段々と頬を赤く染めるユーノ。

思わずなのはから視線をそらした。

「あ……えつと……そうだね……あ、ありがとう、ユーノくん……」

なのはは真つ赤になった顔を見られないように顔を俯け、ユーノの手に自分の手を重ねた。

「うん……じゃあ行こう」

（なのはの手……あたたかいし綺麗だな……）

ユーノはなのはの手を握り締め、二人は境内へ入る。

「フェイトちゃんとヴィヴィオ、もう参拝しちゃったかな？」

「待ってると思うけど……どこにいるのかな……」

キヨロキヨロと回りを見渡しながらフェイトとヴィヴィオを探すユーノ。

（ユーノくんと二人きり……フェイトちゃんとヴィヴィオが作ってくれた時間……）

ユーノくんは休憩時間を使ってわざわざ来てくれた……

……ユーノくんへの気持ちに気づいたのは数カ月前……でも……なんだろう、ユーノくんの事はつい最近じゃなくて……数年前から好きだったんじゃないかな……）

なのはは自然と優しくユーノの手を握り返し、歩みを止めた。

「なのは……？」

ユーノも歩みを止め、小さくクスツと笑むなのはを見てきよとんとする。

「ユーノくん……あのね……私……っ……」

（恥ずがってばかりでなかなか伝えられなかったけど……フエイトちゃんとヴィヴィオが応援してくれてる…

伝えた後がこわいけど……でも……伝えないままでは嫌だから…

なのはの心拍は上昇し、頬が赤く染まる。

恥ずかしさに視線をそらしたくなるが堪え、ジッとユーノを見つめる。

「なのは……？」

「わ、私ね……っ……ユーノくんのことっ……す」

「なのはあっ!!!」

なのはの名を呼ぶ声と共になのははガシリと誰かに肩を掴まれた。

「へ……？」

なのはは目を点にする。

「やっと見つけたよなのはあつ！ 良かった、何もされてないねっ、本当に良かったっ

……」

フエイトなのはの着物が乱れていないか確認するとにこにここと微笑む。

そんなフェイトとは裏腹に、なのはの頬に滴が伝う。

高町なのは、人生初の告白、親友に阻止され失敗。

「え…？　ちよつ…ちよつとなのは…？　何で泣いてるの…？」

フェイトは放心状態のなのはを見て顔を青くする。

「な、なのは何で泣いて!？」

ユーノも同じくなのはを見て顔を青くした。　自分が何かしたのではないかと勘違いして。

「ち、違うのっ…ちよつと目にゴミが入っただけで…っ…別に泣いてるわけじゃないのっ…」

なのはは涙を拭いながら笑むが、涙が止まらない。

そんななのはを見て二人は更に顔を青くする。

「ゆ、ユーノっ、なのはに一体なにをしたの!？」

原因が自分だと知らないフェイトはユーノを責める。

「ぼ、僕はなにもしてないよっ!!　あっ…手繋いだのが嫌だったのかな!？」

「手？」

フエイトはユーノの手を見た。

おうおう、手を握り締めあっているではないか。

フエイトは真顔で二人の手を引き離した。

「な、なのはっ、今ユーノの手をなのはから離れたからねっ！ だから泣かないで、ね？」

フエイトはなのはの頭を撫でながらユーノをジト目で見る。

「ち、違うのっ…ユーノくんは悪くないの…っ…」

《ごめんね…っ…フエイトちゃんっ…折角私とユーノくんを二人きりにしてくれたの
にっ…》

私…なかなか勇気が出せなくて…っ…もつと早く勇気出して告白すれば良かったっ

…っ…》

涙を拭いながら念話でそうフエイトに言うなのは。

フエイトの心は再びSLBで撃ち抜かれた。

（え…っ？ 告白…っ？ 誰に？ あ、私に？ ははは、私に告白するなら別に泣かなくても

…っ…私が時間を作った？

何の話？　なのはとユーノを二人きり？　私が好んで二人きりにさせるわけがないよ。　ユーノに告白…告白するつもりだったの？　新年早々!?!)

フェイトは目を点にして必死に混乱する頭を動かしていた。

「……ハッ！　あれ…って、イタタツ…お尻が痛い…っ…もうっ、フェイトママっ！

……え…っ………何でママ泣いてるの!?!」

空気扱いを暫くされ、グルグルと目を回していたヴィヴィオは目を覚まし、お尻を擦りながら立ち上がると涙目のなのはを見て驚く。

「あはは、ちよつと目にゴミが入っちゃってね…って！　ヴィヴィオ着物が汚れてるじゃないっ！」

そう言うとなのはは砂で汚れたヴィヴィオの着物を叩く。

「えっ、あ…あはは…ごめんなさい…」

ヴィヴィオはフェイトに引きずられ、汚れた着物を見て苦笑する。

「なのは、その…僕のせいにならごめん…」

「だから、ユーノくんはなにも悪くないよ。　気にしないで、ね？」

笑みながらそう言うなのは。

「ママ、何かあったの？」

「何でもないよ、気にしないで」

「あはは……いきなり泣いてたからビックリした……ね、フェイト」

苦笑しながらフェイトに言うユーノ。

「……そうだね」

（何で気づいてないのユーノ……なのははユーノに告白しようとして上手く告白出来なかったから泣いてたのにつ……

　　とうか笑いながら言わないでよつ……こんなに可愛いなのはが想ってるのに気づかないのが腹がたつからつ……

　　あ、でも気づかれたらヤバイよつ！　　そうだよつ、ユーノがなのはの想いに気づいたらなのフェイルートが完全に消える！

　　それだけはダメつ……でもなのはがあんな風に泣くのはなんだか少し辛い……ううつ……）
　　適当に返事をしながらそんな事を頭でグルグルと考えるフェイト。

「とうか……お詣り、さつきから行くうつて行ってまだ行ってないよ、ママ。」

　　お賽銭早く投げたいよ……つ

「あつ！　　そうだよお詣りつ！　　おみくじも引かなきゃいけないし、ユーノくんの時間

もあるし早く行かないとっ！」

「そうだね、それじゃあ行こう」

「フェイトちゃん、行こう？」

「ボーツとしているフェイトに言うのは。」

「あつ……うん、そうだね」

「お賽銭投げて、お願いして、おみくじ引いた後は屋台に寄りたいな♪」

「おみくじかあ……取り合えず健康でいられるかが気になるかな」

苦笑しながら言うユーノ。

日々書庫に隠っているため体が心配らしい。

「おみくじ……恋みくじ、引いてみようかな……」

ボソツと小さい声で呟くのは。

（恋みくじ……うん、私も引いてみよう。）

ニヤリとにやけるフェイト。

なんだかんだで今から参拝をする4人。

フェイトの暴走はまだもう少し続く。



着物なのはさんの初詣へ2〇〇今年も皆元気です、特に
フェイトママは：なのつく

「フェイトちゃん、フェイトちゃんつてばつ、朝だよー」

エプロンを着用したなのはが窓のカーテンを開けながら言う。

「んー……」

フェイトはベッドの中でモゾモゾと寝返りをし、窓から射す日差しを浴びないよう毛布を被つて顔を隠す。

「もう…折角朝ごはん作ったのに…起きないならおはようのキスしてあげないよ？」

毛布越しにフェイトの顔を指で軽くつつきながら言うなのは。

「起きますっ!!」

フェイトは勢いよく起き上がり、目を覚ます為に頬をペチペチと叩く。

「おはよう、フェイトちゃん」

「うん、おはよう、なのは」

なのはとフェイトは見つめあい、朝の挨拶をするとフェイトはなのはの腕を引き、抱き寄せる。

「なのは、おはようのキスして?」

「うん」

なのははフェイトの頬に触れると顔を近づけ、唇を重ねた。

数秒後、二人は唇を離し、再び見つめあうとフェイトはなのはを押し倒す。

「ちよつ、フェイトちゃん…?」

「キスだけじゃなくて…もつとなのはに触れたいんだけど…ダメ?」

フェイトはなのはに覆い被さり、なのはの髪を撫る。

「朝からなに言ってるのフェイトちゃん…ヴィヴィオが待ってるから早く行かないとね?」

一瞬目を点にするとクスリと笑い、フェイトの頭を撫でるのは。

しれつとフェイトに胸を揉まれているが気にしない。

「えー…? まあ、仕方ないか…」

フェイトはそう言いながら渋々なのはから離れる。

「夜はたくさん触れていいからね…フェイトちゃん」

膨れっ面をしているフェイトを見てなのはは笑むと、フェイトの耳元でそう囁く。

「いいの…?」

「うん、でもヴィヴィオが寝たあとでね？」

「なのは…うんっ！」

目を輝かせて頷くフェイト。

「…ウヘヘッ…」

(そんなフェイトを見てなのは微笑み、二人は再び唇を重ねた…)

見えるっ、なのフェイルートのhappy endが見えるよっ!!)

妄想に鼻血を出しそうになりながら脳内でガッツポーズをとるフェイト。

※フェイトの妄想劇場でした。

「ヴィヴィオ、お金持った？ あそこのお賽銭箱に入れないとダメだからね？」

「うんっ」

「賽銭箱にちゃんといれないとな…」

なのは、ヴィヴィオ、ユーノは賽銭を賽銭箱へ投げる用意をしていた。

〔参拝……願うのはただ一つ！ 今年こそはなのはと結ばれること!!〕

奮発して500円っ……どうかお願いします……〕

そんな3人を500円玉を片手に、にやけて見るフェイト。

「よし、それじゃあ投げようかつ」

「うんっ！」

「そうだね」

「うん」

（いざっ！ なのフェイhappyendを祈ってっ！）

「えいつ」

（今年中に……ユーノくんにご告白が出来ますように……そして、今年も大切な人達と平和に、健康に暮らせませすように……）

「ほっ」

（ママとユーノさんが結ばれますように……そして、フェイトママの鼻血がよく出るの

を治してあげてください…)

なのは、ヴィヴィオの順でお賽銭を投げて祈ると、最後はユーノとフェイトのみ。

「よっ」

(今年は少しでもなのはに想いを伝えられますように…)

なのはとヴィヴィオの笑顔がたくさん見れますように…)

「ていつー!」

ユーノが投げた後、フェイトは勢いよくお賽銭を投げた。

勢いよく500円玉は飛び、お賽銭箱へ入る

かと思われたが

カンツ! ※効果音

まさかの柱にあたり、勢いよく跳ね返ると

「グフアツ?! 目があああああつ!!!!」

フェイトの隣に立っていたお爺さんの右目にヒット。

「じいちゃあああーんっ?!?!」

お爺さんと共に来ていた孫らしき少年が顔を青くして倒れかけるお爺さんを支える。

「……………!!」

フェイトは隣にいたお爺さんが倒れたのを見ると顔を青くしてガタガタと震え、すぐに誰も見ていないか確認する

が、一人がフェイトを表情をひきつらせて見ていた。

※これより少しの間小声での会話になります。

「ふえ、フェイト…っ…」

見ていたのはユーノだった。

ユーノもフェイト同様顔を青くし、震えていた。

「ち、違うのユーノっ…あ、あれは事故で…っ…」

声を震わせながらユーノの腕を掴むフェイト。

「じ、事故もなにも…っ…は、早く謝らないと大騒ぎにっ…」

ユーノは腕を離せと自分の腕をブンブンと動かすがフェイトは離さない。

「わ、わかつてるよっ、謝るよっ」

フェイトは額に汗をダラダラと浮かべながらお爺さんを見る。

「た、泰蔵……わしゃもう無理じゃ……」

プルプルと体を震わせながら泰蔵（孫）の頬に触れるお爺さん。

人々はお爺さんと孫を囲み、大騒ぎとなっている。

「爺ちゃんの眼球に500円玉投げつけたの誰なんだよおおっ!!!」

なんの恨みがあつて投げたんだよおおっ!!!

爺ちゃん頼むよっ、目を開けてくれ……っ!!」

泣きながら言う少年。

「いや、開けるもなにも右目が500円玉で塞がれて見えないんじゃないが……」

「あ、そっか」

少年はお爺さんの右目にある500円玉を取り、しれつとポケットに入れる。

「誰がこんなことを……」

「新年早々嫌ねえ……お爺さん大丈夫かしら……」

参拝に並んでいた人々がざわざわと話始めた。

《ユーノ……大騒ぎになってるよ……っ……謝って済むのかなコレ?!?》

ガタガタと震え、ユーノに念話で話しかけながらヘルプと表情で訴えるフェイト。

《と、取り合えず謝った方がいいんじゃない?》

「なんの騒ぎ?」

「あつ、お爺さんが倒れてるよっ」

参拝を終えたなのはとヴィヴィオが騒ぎに気づき、お爺さん達を見る。

「な、ななな、なのは……っ……」

フェイトはお爺さんと少年がなのはとヴィヴィオに見えないよう慌ててなのはの前に立つ。

「フェイトちゃん、凄い震えてるけど大丈夫……?」

「フェイトママ、寒い……?」

「あ、あはは……ちよつ、ちよつとね……っ……」

(なのは達に知られたくないっ……)

「ゆ、ユーノっ、なのは達を連れて先に行つてっ?」

「私はちよつと用があるからっ！」

（本当は頼みたくないけどユーノに頼むしかっ…）

「え!?! あ、う、うんっ…」

フェイトを察し、苦笑しながらユーノは頷いた。

「えー? 一緒に行こうよフェイトママ〜」

「そうだよフェイトちゃん、用が終わるまで待つとこうか？」

それに…お爺さんがたお」

「いやいやいやっ! お願いだから先に行つてて!?!」

《ユーノっ、早くなのは達を連れてって!》

《わ、わかつたっ!》

「なのは、ヴィヴィオ、フェイトが嗚呼言ってるし、先に行つて待つてようよ、ね?」

「えっ、でもお爺さんがきにな」

なのはが倒れているお爺さんを見ようとすることを阻止するように、ユーノはなのはの手を掴むと歩き始めた。

「ちよっ、ちよつとユーノくん!?!」

ユーノに突然手を掴まれ、頬をほんのりと染めて驚くなのは。

「な、なのははお守りとか買わないの?」

(取り合えず少し離れた場所に移動しようっ…)

「お守り?」

(お守りかあ……恋愛……うん、良いかも……)

「……じゃあ……私、お守り買いたいから行こうか」

「ママ、手繋いでいい?」

「いいよ」

「ありがとう♪」

ヴィヴィオは嬉しそうに笑むとなのはと手を繋いだ。

「それじゃあ行こう」

(騒ぎが無事におさまると良いけど……)

なのはとヴィヴィオ、ユーノはお守りを買うに向う。

そんな3人を涙目でフェイトは見ていた。

(うぐぐっ……3人共幸せそう……っ……ユーノめ……ちゃっかりなのはの手握ってるっ……)

メラメラと嫉妬心を燃やすフェイトだが、今はそれどころではない。

「グエツ……」

「爺ちゃんしつかりっ!! 大丈夫だからっ、俺が必ず犯人を見つけてみせるからっ!!」

少年はお爺さんを抱き締めながら言う。

(は、ははは、犯人……っ……こ、ここは早めに謝って……)

フェイトは財布を片手にガタガタと震えながらお爺さん達のもとへ行く。

「ん？ あれ……ねえ、キャロ、あの人フェイトさんじゃないかな？」

「え？ あ、本当だつ、フェイトさんだ」

エリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエのカップルが偶然にもフェイト達が来ていた神社に来ていた。

「エリオくん、まだ新年の挨拶フェイトさんにしてないから挨拶に行こうか」

「そうだね」

キャロとエリオは恋人繋ぎをし、フェイトらしき人物のもとへ行く。

「あ、あの……」

冷や汗を額に浮かべ、顔を青くしたフェイトが少年に声をかける。

フェイトに声をかけられ、少年が振り向こうとすると

「……す……すいませんでしたああああっ」

!!!!!!

フェイトは着物が汚れるのを気にせず土下座した。
額を地面につけて。

「……………」

「……………」

叫びながら土下座するフェイトらしき人物を見てキャロとエリオは歩みを止め、表情を固まらせる。

「え……………」

突然のフェイトの土下座に驚く少年。

「いやっ、あのっ……お爺さんに向かって投げた訳じゃないんです!!」

お賽銭箱に向かって投げたんですけど偶々柱にあたっちゃってっ!

私っ、私まだやりたいことがあるんです! まだなのはに告白ものはと「ピー」も出来てないしっ、お爺さんに死なれたら困るんですよおっ!!!

それに職業上ヤバイですしっ……どうか生きてお爺さんっ!死ぬなああああっ!!!

フェイトは半泣きになり、人前で下ネタを吐くとお爺さんの肩を掴み、ブンブンと揺らす。

※「ピー」はご想像にお任せします。

「……………」

少年はフェイトの下ネタに顔を真っ赤にして硬直する。

「ウグエツ……！」

お爺さんは白目になりかけながらもフェイトの肩をガシリと掴み返した。

「ちよっ！ お爺さんなにすっ」

「お……お腹すいた……っ……」

ブンブンとフェイトに揺さぶられながら小さな声で呟くお爺さん。

「……………はい？」

フェイトは揺さぶるのを止め、お爺さんに聞き直す。

「お腹すいたんじゃよ……お腹すいて体に力が入らん……」

グルグルと目を回しながら言うお爺さんにフェイトはポカーンとした表情をする。

「お、お腹すいてるんですか……？」

「うむ。 ホホッ、お嬢さんは大袈裟じゃなあ……500円玉が目にあたつたくらいで死ぬわけないだろう。」

今日は孫と初詣に来たんだが孫に渡していたわしの財布を孫が無くしての……

屋台をはりきつてたものじゃから昨日の夜から何も食べておらんのじゃ……」

笑いながら説明するお爺さん。

お爺さんのお腹がグーグーと鳴いている。

「いや、張りきりすぎだろ。 って、なんだ…目が痛くて死にそうになつてたわけじゃ無かつたのか…良かった…」

真顔でお爺さんにツツコむフェイト。

「俺なんて昨日の昼からなにも食わずに寝てたよ！」

ハイツと手を上げ、自慢気に言う少年。

「なに自慢気に言つてんだよ、おい」

フェイトは少年にイラツとし、少年の頬をつねる。

「イタタタタツツ!!! お姉さん痛いっ!!!」

「財布無くすとかバカなのか君は? 屋台にはりきつて昨日から食べてないとかアホなのかあなた達はあつ!!!」

「バカじゃないよつ! 財布無くすなんて誰でもあるでしょつ!

それに俺には5000円がある!!」

ポケットから5000円玉を出して言う少年。

「いや、それ私のじゃ…? そういえば私の5000円玉は?」

「し、知らない…つ」

明らかに動揺して答える少年。

そんな少年を見てフェイトは溜め息をつく。

「ま、500円くらいならいいや。あげるよ。で…お金がないとなると…お爺さんと君は暫く何も食べれない生活が続くのか…」

「お姉さん、これも何かの縁だよ。ということであれと爺ちゃんを助けて下さいっ！」
「お腹すいたあ…」

目を輝かせて言う少年と目をグルグルと回して小さい声で呟くお爺さん。

「ううっ…：…どんな縁だよってツツコみたいけど…君はともかくお爺さんは限界みたいだし…お爺さんには申し訳ないことしちやったからなあ…」

仕方ない、昼ごはん、おごつてあげます。」

苦笑しながら言うフェイト。

「マジで!? やったっ!!」

「そうとなれば行くぞ、お嬢さん、泰蔵(少年)っ」

先程まで立つ力も入らずにいたお爺さんはフェイトの『おごつてあげます』という言葉が聞こえると目を見開き、起き上がるとピシヤリと立つ。

「体に力が入らなかつたんじゃなかつたのかよっ!!」

「そんなことより早く行こうよお姉さんっ！ 俺お腹すいた！」

「そうじゃぞお嬢さんっ、屋台へレッツゴーじゃ！」

少年とお爺さんはガシリとフェイトの腕を掴むと走り出した。

「ちよっ！ は、走るなああっ!!」

（お爺さん脚早っ!!! というか何かこの状況っ…似たようなことが前にもあつたような…）

少年はともかくお爺さんの脚の早さに驚くフェイト。

数年前の出来事を思い出そうとするもぼんやりとしか思い出せない。

そしてフェイトは…待っているなのは達のことも忘れていた。

【※数年前の出来事↓4話参照。】

「あつ、キャロ、フェイトさん行っちゃうよ」

お爺さんと少年に腕を引っ張られて走るフェイトを見て追いかけようとするエリオ。

そんなエリオの腕を顔を俯けて掴むキャロ。

「キャロ？」

「エ、エリオくん、フェイトさんに挨拶するのはまた今度にしようかつっ」

フェイトさんもう行っちゃったし、ねっ?」

真つ赤な顔を上げ、苦笑しながら言うキヤロ。

「え? あ、うん。キヤロがそうしたいなら別にいいよ。」

というか顔真つ赤だけど大丈夫:~?」

「あはは:~大丈夫だよつ:~お詣り終わつたし帰ろつか」

(まさかフェイトさんがあんな人前でし、しもつ:~しししも:~つ:~あ、あんなこと言うなんてつ:~)

それに:~フェイトさんがソツチだったなんて知らなかった:~つ!!)

「そうだね」

衝撃の事実を知つて頭がパニック中のキヤロとは違い、平然としているエリオ。

何故平然としているのか、それは数カ月前、酒に酔い潰れたフェイトと遭遇したエリ

オはフェイトの部屋に連れ込まれ、

フェイトは部屋で泣きながら酒を飲み、ユーノに対しての嫉妬、愚痴、下ネタをエリ

オに向かつて言うのだ。

最初はかなり驚き、フェイトに対してどう接すればいいのか悩んだエリオだが、

それからたまたまにフェイトに捕まり、強制的に話を聞かされながらエリオが思ったのは

:

(ユーノさん…可哀想だな…)

だった。

フェイトはユーノを『フェレットの癖に…っ』、『エロ眼鏡淫獣っ!』、『女なのか男なのかわかんねえよっ!!』、『ヴィヴィオと何で声が似てるんだよっ!!』

とビールを片手にテーブルをバンバンと叩きながら叫ぶ。

挙げ句、一旦落ち着くと一人二役でなのはとフェイトの劇を始めるのだ。

エリオは思った、フェイトはこんな人だっただろうか？

一人になるといつもこうなのだろうか？ いつも…一人で夜中に劇をやっけてにやけているのだろうか？

自然とエリオの頬には涙が伝い、笑みながらフェイトの一人劇を見る。

それからエリオは

自然と親の目でフェイトを見ていた。

「それじゃあキャロ、行こう」

「うん」

エリオはキャロと再び手を恋人繋ぎし、仲良く…

キャラは頭がパニック状態のまま、エリオは何故か笑みながら歩いている。
（今年は…少しでも多くフェイトさんの笑顔が見れたらいいなあ……）

最近は泣いてるか鼻血出してる顔しか見てないし…
エリオは青空を見ながら内心でそう思った。

【その頃のなのはさん達】

「フェイトママ遅いですね〜」

スマホで時間を見て言うヴィヴィオ。

「あはは…もうすぐ来るんじゃないかな？」

（あれから数分か…ここにいられる時間も30分きつた…早いなあ……）

って、そうじゃないっ！ フェイト大丈夫かなあ…

ユーノとヴィヴィオは手を繋ぎ、なのはがお守りを買ったのを待っていた。

「……あのー…ユーノさん」

「なにかな？」

「私……」

「あっ!! 忘れてたっ! ちょっと待ってねヴィヴィオっ」

額に冷や汗を浮かべながら慌ててポケットから何かを取り出すユーノ。

「え？ あ、あのっ」

話を途中で切られ、苦笑するヴィヴィオ。

「はい、ごめんね、遅れたけどお年玉。それから…まだ言ってなかったよね、あけましておめでとう。今年もよろしくね、ヴィヴィオ。」

優しく笑みながら言うユーノ。

「あ……えつと……あ、ありがとうございます。まさかユーノさんからも貰えるなんて……すみません……」

ヴィヴィオは受け取ると、苦笑しながら礼をする。

「あはは、ヴィヴィオは小学生だし、幼馴染みの子供だからね」

苦笑しながら礼をするヴィヴィオを見てユーノはクスリと笑う。

「本当にありがとうございます。でも……新年の挨拶、一番に挨拶するのは私じゃなくてママにして欲しかったです」

ヴィヴィオは苦笑しながらお守りを買うのに悩んでいるのを見て言う。

「え？」

「ユーノさん、あの、前から思ってたんですけど……」

ユーノさん、うちのママの事…好きですよね？」

ニツコリとユーノに向かって笑みながら言うヴィヴィオ。
そんなヴィヴィオの発言にユーノの表情はひきつる。

「え……？」

恋する乙女なのはさんとフェレッツ…フェイトに阻止され続けて長年告白出来ていないユーノ、

そんな二人を応援する恋のキューピッド？ヴィヴィオ。
影ながら応援していたヴィヴィオだが、少し動くことを決めた。

そして、新年早々…というより年中無休で騒がしいフェイトの暴走はまだもう少し
(後1話?) 続く……かな？

着物なのはさんの初詣へ3〳エロ眼鏡淫獣って…エロって言うか妄想ばかりしてるフェイトに言われたくな…なのっ…〳

「えつと…：…ヴィ、ヴィヴィオ…？ ママって…もしかしてフェイトの事…？」

思わず苦笑するユーノ。

何故自分の気持ちちをヴィヴィオが知っているのか、ユーノの頭はパニック状態に。

「違います!! 誤魔化さないで下さいよ、私わかつてますから！」

大丈夫です、ユーノさんなら安心してママを任せられます！」

エへへ、と笑みながら嬉しそうに言うヴィヴィオ。

「えつ、ちよつ！ ちよつと待ってっ！ い、いいい、いつから知ってっ!!」

「いつからって…：…というか、寧ろ気づかないのがありえないというか…：…なんというか

……正直こつちが困ってるし……」

苦笑しながら言うヴィヴィオ、最後はつい口が滑ってしまった。

「え？」

「あつ、い、いやつ、あはは……その……ユーノさんわかりやすいですからっ」

（ユーノさんもママも何でお互い気づかないのかな……本当に不思議で仕方ないよ！

見てるこつちがむず痒いというかつ……

ユーノさんはママに魔法の力をくれた人、私もたくさんお世話になったし、ユーノさんは優しいし、ママを本当に愛してくれてる。何でこんなに進展しないのかなあ……)

「わ、わかりやすいのか……クロノとはやてにもそれ言われたよ……」

苦笑するユーノ。

そんなユーノを見てヴィヴィオは溜め息を吐いた。

「ユーノさんのお友達さんも、ママのお友達さんも大変だなあ……これは……」

「ヴィヴィオ？」

「ママは『そういうこと』には凄く乙女で可愛らしいんです。ユーノさんのお陰で最近

のママ……凄く可愛いんですよっ」

（うっすらと伝えてみたけどどうだろう…なんとなくわかってくれるかな？）

最近ママ凄く乙女だし、ユーノさんの前でだけママの様子が変なのはユーノさんも少しは気づいてると思う…っ）

「……えっと、まあ、それは良かった…かな？」

あははと苦笑しながら？を浮かべるユーノ。

「……………」

（そうだよね…伝わらないよね…っ…もつと具体的に言うべきなんだろうけど…

出来ればお互い自然に気付く感じがいいと思うし……………うーん……………）

ユーノに向かって苦笑しながら、脳内でどうにかならぬかと考えるヴィヴィオ。

「ヴィヴィオ、ユーノくん、ごめんね遅くなっちゃった」

お守りを買ったのはが苦笑しながらやって来た。

「あ、ママ」

「お帰り、なのは」

「うん、あれ…フェイトちゃんまだ来てないの？」

あれから数分経つが戻って来ていないフェイト。

なのははまわりを見渡した。

「あはは…もうそろそろ戻って来ると思うよ」

「ねえ、ママ、ちよつと」

ヴィヴィオは手を動かし、なのはに屈むように伝える。

「なあに？」

なのははヴィヴィオの指示に従い、屈むとヴィヴィオはニツコリと笑み、なのはの耳元で小さく囁いた。

「縁結びのお守り買ってきたの？」

「え…？」

ヴィヴィオの発言になのはは一瞬目を点にすると、段々と頬を染め、ヴィヴィオの口を手で塞いだ。

「むぐつ…！」

「ヴィ、ヴィヴィオつ、な、なな、何でわかつ…」

顔を真っ赤にしてかなり動揺するなのは。

「何してるの？」

なのはの背後からユーノが声をかけてきた。

「ひゃあっ!？」

ビクンツ！と体を跳ねさせてなのはは驚くと、勢いよくユーノとヴィヴィオから距離をとる。

「えっ……なのは……？」

声をかけただけで離れ、何故か自分から視線をそらすなのはにユーノはキョトンとする。

「ち、ちがつ…違うのユーノくんっ！ あ、あれっ、あれだよっ！」

その…っ…フェ、フェレットさん飼いたいねってヴィヴィオと話してただけなの！」

（今ユーノくんの顔が近かったっ…ユーノくんと距離が…っ！）

真っ赤な顔で言うなのは。

そんななのはを見てヴィヴィオはクスリと笑った。

「フェレットを…？」

（何故フェレット…）

「そうなんです、今ママと話してて。

フェレットさんを家族に迎えないな…って♪ それじゃあママも戻ってきたので、私もお守り買ってきますねっ」

ニッコリと笑んでヴィヴィオは言うと、なのはの手を引き、ユーノの隣に移動させる。

「それじゃあ行ってきますっ！」

ヴィヴィオはなのはとユーノに手をふり、走ってお守りを買に行ってしまった。

「ヴィ、ヴィヴィオっ!!」

(な、なな、何でユーノくんと二人きりにするの〜!!)

ヴィヴィオに手を伸ばそうとしたのはだが、ヴィヴィオはもう行ってしまった。

「ヴィヴィオもお守りかあ…流石に恋愛…はないよね」

あははと苦笑しながら言うユーノ、の隣でなのはは硬直している。

(あれ、なのははどうしたんだろう…)

固まっているのはを見てユーノはなのはの肩をポンポンと軽く叩いた。

「ひゃっ! ゆ、ユーノくんっ…」

「ぼーっとしてたけど…どうしたの? 大丈夫?」

「だ、大丈夫っ! 元気だよっ?」

にやははと苦笑しながら言うなのは。

「そう? なら良いんだけど…は…くしゅっ!」

ユーノは身震いをする、突然くしゅみをした。

「ユーノくん!? だ、大丈夫? 寒いつ?」

「まあ、寒いのは寒いけど大丈夫だよ。ほら、最近凄く寒かっただろう？ だから少し風邪気味というか…」

苦笑しながら言うユーノ。

「風邪気味って…大丈夫じゃないよっ！ 悪化して熱出たら大変だし、ユーノくんが寝込んだら心配しちゃうしっ」

「あはは、ごめんごめん、でも元氣だから。」

ユーノは自分をジト目で見て言うなのはに苦笑しながらも笑む。

「せめてマフラーがあつたら…本当に大丈夫？ 首もと寒くない？」

「大丈夫だよ、心配してくれてありがとう、なのは」

ほんのりと頬を染め、笑むユーノ。

なのはの気持ち嬉しくてにやけてしまいそうになるが、必死に耐える。

「心配するのは当たり前だよ…そうだ、ユーノくん手貸して？」

「手を？ わかった」

なのははユーノの手を右手で握ると、左手でユーノの手を摩り始めた。

「なのは…？」

「ユーノくん手冷たくなってるよ？ さつきは温かったのに。」

せめて手だけでも温かくしないとっ」

にっこりと笑みながら言うのはを見て、ユーノは嬉しさと恥ずかしさのあまり顔を真っ赤に染めた。

「ユーノくん顔真っ赤だよ!! だ、大丈夫っ?!」

「だ、大丈夫だから気にしないで! 平気だからっ」

ユーノはそう言うのと真っ赤な顔を隠すように俯けた。

「そ、そうなの? あっ、あのね、ユーノくんっ」

「な、なに…?」

「私ね、ユーノくんにその…健康祈願のお守り買ってきたのっ!

だからっ、う、受け取って貰えたら…嬉しいんだけど…」

ユーノの手を握ったままバレンタインチョコを渡すかのような言い方をするのは。

「僕に…?」

「うん…ユーノくん…ほら、いつも徹夜がほとんどでしょ?」

だから…体調崩さないようにって…今はユーノくんの手温めてるから、渡すのは後

でもいいかな…?」

「…っ…うん、ありがとう…なのは…」

ユーノは自然となのはの手を握り返していた。

自分の手を摩っていたなのはの左手に手を重ねて。

驚いたなのは頬を染めてユーノを見つめ、ユーノも頬を染めてなのはを見つめる。

「あれ…ほほう…?」

(いつのまにかなんかいい雰囲気になってる?)

いつの間にかお守りを買った終えたヴィヴィオが少し離れた場所から二人を見てにやっていた。

(ユーノさんの分の縁結びのお守り買ってきたんだけど…)

必要なかったかな? も、もしかしたらこのまま告白の展開に…とか!?)

ヴィヴィオは嬉しさに涙を浮かべ、離れてはいるがなのはに向かってジェスチャーで

『ファイトっ』と伝えた。

「え、えつと…っ…あ、あの…ユーノくん…?」

娘からの応援に気づいていないなのは、心臓と頭が爆発するのではというくらいに

緊張していた。

ジーっとユーノに見つめられ、なのはの顔は恥ずかしさで真っ赤に。

「あ、あの…さ、なのは…」

ユーノも何処か緊張気味になのはを見つめながら口を開いた。

「な、なに…?」

「僕…っ…なのはの事…ずっと言いた」

ユーノがこの際とばかりに『告白』をしようとしていると

ピコンツ!!

ユーノの頭が何かで叩かれ、謎の音とともに、見えたのは風で靡く長い金色の髪と黒の着物。

「えっ…」

ユーノは金髪の髪が見えた方を見ると、そこにはにっこりと笑っているが確実に不機嫌なフェイトが立っていた。

「ふえ、フェイト…?」

「やつと見つけたよ、なのは、ユーノ、ヴィヴィオ。

取り合えずユーノ……」

にっこりと笑んでいたかと思えばフェイトは真顔に戻り…

《さっさとなのはから手を離しやがれこのエロ眼鏡淫獣》

念話でユーノにそう言った。

流石空気が読めない変態フェイトさん、期待を裏切らない。

《ちよつ、誰がエロ眼鏡淫獣だよっ!!》

「フェイトちゃんやつと戻ってきたんだね! もう、何処に行ってたの? ピコピコハンマーなんか持って」

なのははフェイトが片手に持っている赤と黄色のピコピコハンマーに指をさして言う。

「ちよつとねっ…まあ気にしないで? 戻ってきたし、恋みくじ引きにいろいろなの

はっ♪」

握りあっているなのはとユーノの手をパツと離し、なのはの手を握りしめて満面の笑みで言うフェイト。

「あ、そうだったねっ、恋みくじ引かなきゃっ!」

「じゃあ行こうなのはっ!」

(必ず大吉を引いてみせる! そしてなのはに今年は告白してなのはと一つになってそのままゴールイン!!)

ふんすつと荒い鼻息をすると、フェイトはなのはの手を引き、ユーノとヴィヴィオを置いて走っていく。

「えっ!? ちょっと、ちょっと待ってフェイトちゃん!! フェイトちゃんてばああっ!!」
なのははユーノの方へ振り向く暇もなくフェイトに連れ去られて行った。

「フェイト!? 早く追いかけないとっ、ヴィヴィオ、なのは達のとこにいつ……: ヴィ:
ヴィオ……?」

フェイトを追いかける為、ヴィヴィオを連れていこうとヴィヴィオの方へ振り向いたユーノ。

だが、ヴィヴィオは目を点にして固まっていた。

「ヴィヴィオ…？ どうしたの…？」

「…あ、いえ…あはは、何でもないです…ただ…『空気を読む』って大切だなあ…って…」

フェイトママは悪気はなかったんだろうけど…あの、ユーノさんこれを」

ユーノの声を聞くと目をぱちくりとさせ、苦笑しながら言うヴィヴィオ。

片手に持っていた緑色のお守りをユーノに渡した。

「お守り…？」

「はい、ママと一緒になれますようにっと思つて…緑色があつたので緑色にしてみました♪」

「あ、ありがとう…ヴィヴィオ…」

（縁結びって書いてある…）

「私、応援してますから！ 私に出来ることがあつたら言つてくださいねっ、全力で協力します！」

「えっと…ありがとう、でも気持ちだけ貰つておくね。」

流石に好きな人の子供にそこまでしてもらうのは…」

(とういか好きな相手の子供に縁結びのお守り貰った時点でなんととうか…自分が情けないとうか……)

お守りを片手に苦笑しながら言うユーノ。

「遠慮なんてしないで下さい！ さあ、ママ達を追いかけましょうっ！」

ヴィヴィオはユーノの手を握ると歩き始めた。

「わっ、待ってヴィヴィオっ」

「早くしないとママ達とはぐれちゃいますから！」

なのはさん達の騒がしい？お正月、後少し続くようです。

(次話ラスト)

着物なのはさんの初詣へ4〳〵今日のなのはの下着はピンク…なの…あ、鼻血がっ…

「や、やった！ 大吉だあ〜」

涙ぐみながら喜びの声を上げるなのは。

(きよ、凶…だと!?)

喜ぶなのはの隣で、フェイトは石像化していた。

※普通は凶は入っていないようですが小説内だけの設定ということ…

二人はユーノとヴィヴィオが来る前に、恋みくじを引いた。

そして結果、

なのは ↓大吉

フェイト ↓凶

だった。

「フェイトちゃん、フェイトちゃんはくじ引いた？」

なのはがフェイトの方へ向こうとすると、フェイトは慌ててくじを片手でクシヤリ握り潰し、隠した。

「あ、あはは…今から引くところだよなのはっ」

額にだらだらと汗を浮かべ、おみくじを勢いよく混ぜてフェイトは再び引いた。

（なにがこの恋は諦めなさいだよ!! 諦められるわけないじゃないっ!!

私の全てはなのはなんだよおおっ!!!)

フェイトは内心で泣き叫びながら恐る恐る引いたおみくじを見る。

〔末吉〕

この恋は諦めた方が良いでしょう。

（ふざけんなあああっ!!!!!!）

フェイトは涙を大量に流しながらおみくじを地面に投げつけた。

「フェイトちゃんっ!？」

「なのはあっ……!」

フェイトはショツクで泣きながらなのはに抱きついた。

「ど、どうしたのフェイトちゃんっ、おみくじ…そんなに結果が…?」

なのはは泣くフェイトの頭を撫でる。

フェイトはしれつとなのはの胸に顔を押し付け、泣いていた。

(諦めた方が良いでしょうってさつきと変わんねえよっ!!)

凶より末吉の方がまだ良いけど変わってないじゃんっ!!! さつきまでの私を返し

てよっ! あ、なのはの胸やわらかっ……鼻血出そう)

フェイトなのはの胸に顔をパフパフと押し付け、もはや泣いているのかにやついて
いるのかわからない。

「フェイト、おみくじ投げ捨てちゃダメだよ…」

(末吉だったのか…)

フェイトが投げ捨てたおみくじを拾い、苦笑しながら言うユーノ。

「あ、ユーノくん」

「げ、ユーノ…」

ユーノを見てフェイトはチツと小さく舌打ちをした。

《舌打ち聞こえてるよフェイト…》

《スミマセンデシタ〜(棒)》

ユーノは苦笑を、フェイトはユーノを虫けらを見るような目で見つめ、二人の間にはギスギスとした空気が溢れる。

が、そんな空気には気づかないのはとヴィヴィオは「ママ、おみくじどうだった?」

ユーノの隣からトコトコとなのはの元へ行き、ニコニコと笑みながら言うヴィヴィオ。

「えつと…大吉だったよ」

少し恥ずかしそうにしながら小声でなのは答えた。

「わっ、やったねママっ♪」

「うんっ」

ヴィヴィオとなのははハイタッチをした。

そんな二人を後ろにフェイトとユーノは…

《へいよー、エロ眼鏡淫獣ユーノさんよお、私がない間なのはとなにしてたんだああっ!?》

キレ気味にユーノへ念話で言うフェイト。

おみくじの結果よりも今フェイトの頭にあるのはなのはがユーノに何かさかれていなか、だった。

《どうしたのその口調?!》 というか別になにもしてないしエロ眼鏡淫獣言うなっ!!》

《ふっ…笑わせてくれるねユーノ…私にはわかるんだよっ!!》

寒いからっつて…寒いからっつてなのはに温めてもらっつてたんでしょっ!!

なのはの体で温めてもらっつてたんでしょ!?!》

《誤解をうむような事言わないで?!》 いや、確かに『手』を温めてもらっただけどね!》

《お互い手を握りしめあつて見つめあいやがっつて!!》

なのはに下心あるのはわかっつてるんだよっ!!》

ピコピコハンマーでビシツとユーノを指すフェイトの瞳は涙で潤んでいた。

《下心あるのはフェイトだろっ?!》 本当になにもしてないよ!》

《なのはの体でっ…なのはの体でっ…やっつて温めてもらっつたんでしょっ…》

グスツ…と突然泣きながら言うフェイト。

モワモワとフェイトの頭に雲のような物が浮かんだ。

《えっ、もしかして妄想劇場見るパターン!?》

ユーノ正解。

『な、なのはっ、こんなところでっ…』

『だって…ユーノくん寒いんでしょ…？ だから私の肌で……体で温めてあげるの…』

なのはは頬を赤らめながら帯に手をかける。

『さ、寒いってそこまですらないから大丈夫だよっ』

顔を真っ赤にし、なのはから視線をそらすユーノ。

『嘘…だってユーノくん……こんなになつてるもん……私…ユーノくんならいいから…だから……温め合おう…？』

『なのは……』

ユーノは暫くなのはを見つめると、なのはの唇を奪った。

《そして二人は物陰に隠れてパンパンパンパンツ…!》

なのはは…っ、なのははユーノのでイ》

《やめてえええっ!!! 僕となのはをなんだと思ってるんだよフェイトはあああっ!!!》
真っ赤な顔をしてフェイトの肩を掴み、揺さぶりながら言うユーノ。

《何が物陰でパンパンパンパンツだよっ!!! ふざけるなこのエロ眼鏡淫獣っ!!!》

ユーノに揺さぶられながら脳内でアレな声をあげるなのはを妄想し、フェイトは恒例のアレをポタリと落とす。

《勝手に自分で妄想しといて何で僕のせいっ!? どうか鼻血出してるフェイトにエロ眼鏡淫獣って言われたくないよっ!!!》

《あ、やば、鼻血がっ》

フェイトはハンカチを取り出すと鼻にあてる。

《というかフェイト、フェイトの変態な妄想に冷静にツッコむのはおかしいかもしれな
いけど、なのははそんな積極的なタイプじゃないと思う。》

《あ、私、なのはならSでもMでもイけるから。なのはの命令ならメスぶ》

《わかったっ!!! わかったからなにも言わなくていいよフェイトっ!!!》

ユーノはフェイトが言おうとした言葉をなんとか阻止した。

(今さらだけどほんと…フェイトって筋金入りの変態だな…つ)

きつとフェイトが言おうとした言葉はメス豚。ユーノはひきつった表情でフェイトを見る。

《ねえユーノ、今思ったんだけど…なのはがSだったら私は常にピーをピーに入れていつでも出来るようにスタンバってた方がいいかな?》

真顔で言うフェイト。

《取り合えずフェイト、エロい事しか頭がないみたいだから取り合えず黙ろう。》

ユーノも真顔で冷静に答えた。

「あ……そ、そうだ、フェイト、あの後お爺さん達とはどうだったの?」

取り合えず話を変えよう、ユーノはそう思い、先程のお爺さんの話をフェイトにふつた。

「ああ……まあ、許してもらえたよ。お詫びに屋台をおごってあげただけど…自分の財布を痛めないからって大量に買わせてきてっ…」

遡ること数分前…

『お姉さんお姉さんっ！ 俺、たこ焼きとからあげと焼き鳥とりんご飴と綿あめとフライドポテトねっ!!』

『それ殆ど全部じゃない…』

張り切る少年にフェイトは苦笑しながらツッコんだ。

『わしはあれじゃ、あのー…あの……いかの焼き!』

『イカ焼きですね、いかの焼きって…』

お爺さんにも苦笑しながらフェイトはツッコんだ。

『取り合えず…食べたいって言った物は買ったけど…食べれるの?』

『んぐっ…大丈夫っ、お腹空いてるから余裕で食べるっ!』

フェイトが屋台で買った物が、少年が座る椅子の横に積み上げられている。

フェイトはそれを見て表情がひきつった。

少年はズルズルと焼きそばを食べ、数秒後にはたこ焼きを、いか焼きを、とうもろこ

しをと凄まじい勢いで食べていく。

(この光景、某大食い番組でありそうだな)

フェイトは少年を見ながらそう思った。

そして、そんな少年の隣に座るお爺さんは

『んぐーっ！ はっ、歯が…入れ歯じゃとやっぱりいかは食べにくいのお……』

いか焼きに苦戦していた。

(いかってそんなに固かったっけ…)

少年と同様、フェイトはひきつった表情で今度はお爺さんを見る。

『爺ちゃん、いかいらなら俺が食べようか?』

『いいんか?』

『うん、はい、じゃあ食べかけだけだからあげあげる』

少年は食べかけの、たった1つの残ったからあげを爪楊枝にさし、お爺さんに渡す。

(からあげ1つだど!? いやいやつ、その積み上げられた食べてないやつをお爺さんにあげろよ!!)

フェイトはスパンツと少年の頭を軽く叩き、積み上げられた物から焼きそばを取ると

お爺さんに渡した。

『あつ、それ俺のーっ!!』

『少しはお爺さんに気を使えよ!! お爺さん、いか食べにくいなら焼きそばは?』

『じゃがこれは泰蔵の…』

『泰蔵くんはもう十分過ぎるくらい食べてるからっ! お爺さんお腹空いてるんだし食べてください、ねっ?』

フエイトから焼きそばを受け取ったお爺さんは暫く考え込むと頷き、微笑んだ。

『ありがとう、お嬢さん。 ありがとうと頂くわい』

お爺さんは嬉しそうにズルズルと焼きそばを食べ始め、フエイトはお爺さんを見てホツつとする。

(まあ…取り合えずこれで償えたよね、喜んでもらえたし…)

『そうだつ、爺ちゃんの食べてる写真婆ちゃんに送ろっ』

少年はポケットからスマホを取り出した。

そしてお爺さんの写真を撮り始めたが、少年はスマホを取り出したと共にポケットから何かを落とした。

『あれ、なんか落としたよ』

フエイトは少年のポケットから落ちた巾着らしき物を取る。

と、チャリツ…と音がした。

『ん?』

(今の……お金……の……)

巾着を開き、フェイトは中身を確認する。

すると、中に入っていたのは硬貨と札だった。

『あ、お姉さん拾ってくれてありがとう』

少年はフェイトに手を伸ばすが、フェイトは巾着を見て震えていた。

『おい……お金無くしたんじゃないやなかったの? お爺さんの財布無くしたんじゃないや……』

『うん、無くしたよ?』

『じゃあこのお金は……?』

フェイトは巾着を少年の顔の前で揺らし、ニツコリと笑む。

『へ? お金?』

『巾着の中に硬貨と札が入ってるけど? これ君のじゃないよね、金額的に』

『え………あ……あああぁーつ!!?! そ、そういえばっ! 爺ちゃんから財布預かった時爺ちゃんの財布破けてお金落ちてきてたから、巾着にお金移したんだっ!!』

少年は次第にだらだらと額に汗を浮かべる。

『何で今さら思い出すのかな？財布、無くしたんだよね？』

『ちや、ちやんと探して、無かったから無くしたと思つてっ』

『この巾着は君のポケットから落ちただけど!? ポケット調べたんならわかるよね!?』

『ひっ!? し、調べたよっ! でも巾着の中まで見なかつたし、巾着にお金入れてたの忘れてたしっ』

『普通触つたらわかるだろっ!! 取り合えずお爺さんに謝りなさいっ!』

お腹空きすぎて倒れたんだからっ!』

フエイトはビシツつとお爺さんを指差す。

お爺さんは目を点にしてフエイトと少年を見ていた。

『あ、謝ります謝りますっ! だから怒らないでっ! 爺ちゃんごめんっ!! 俺のせいでっ』

少年は頭を下げてお爺さんに謝る。

『……………良いんじゃないよ、お金が見つかって良かったわい。これでお嬢さんに奢ってもらった分を払えるからのお』

『爺ちゃん…っ』

少年はお爺さんの優しい言葉に涙を浮かべた。

『えーつと…ごめんさい、払えるって私に奢ってもらった分を払うつもりですか？
払ってもらわなくて良いです、だってこれ、お爺さんへのお詫びですから。』

真顔で答えるフェイト。

『じゃ、じゃが…たくさん買って貰ったのに悪いわい』

『良いです、お爺さんよりこの子がメインになっちゃってますけど…お爺さんに悪いことしたのは本当ですし。』

ぶつけた件はこれでチャラでお願ひします』

『ヒューツ！ お姉さんカッケーツ！』

『お前は調子に乗るなっ！』

フェイトは少年に凸ピンをした。

『あだっ！ 痛いよお姉さんっ！』

『少しは反省しろっ！』

グニツと少年の頬をつねると、フェイトは苦笑する。

『まったく…困ったお孫さんですね』

『可愛い孫じゃよ』

『ウへへ…』

少年は照れ笑いをしながらりんご飴を食べ始めた。

『そうじゃ、泰蔵、なのよ婆さんになにか買って帰ろうかのう』

『そうだね！』

『……………ん？なのよ？』

(なのよ…なのよ…なのよ…よ…なの……な…なのはあああーつ!!!)

フェイトは『なのよ』からの愛しの『なのは』を思いだし、顔を青くした。

『お嬢さん？　どうかしたのかい？』

『お姉さん？』

『なのはがっ……………なのはが…っ…しまったっ!!　今あのエロ眼鏡淫獣になのはを任せてるんだっ!!』

お爺さんっ、私はこれでっ!!』

何故忘れていたのだろうか、フェイトは慌ててなのはのもとへ向かおうとする。

『待ってお姉さん！　これ、お姉さんの500円玉でくじ引いて当たったピコピコハン

マーっ！

いらなから持ってって！』

少年は行こうとするフェイトへ向けてピコピコハンマーを投げた。

『そこはせめて記念に持つて帰れよっ!! ま、ありがとっ、それじゃあ!』
フェイトはピコピコハンマーを受け取ると猛ダツシユで走って行った。

(聞こえるっ、なのはがユーノとシてるのがああああっ!!!)

『ユーノくっ、ああんっ! 出してえっ! 私の中につ、いっぱいい…っ!』
『なのはっ、なのはっ!』

(させてたまるかああああっ!!!)

メラメラと瞳に炎を灯し、フェイトはピコピコハンマーを片手に妄想しながら走り続けた。

「という事があったの」

「途中までいい話っぽかったのに最後で台無しだよ」

真顔でツツコむユーノ。

やはりフェイトはフェイト、どんなときでも全力変態。

「とにかく、なのはを妊娠させていいのはわたつ」

「言わせないっ!!」

「もがっ!」

人が多いこの場所で言わせてはいけないと咄嗟に判断したユーノはフェイトの口を手で塞いだ。

「取り合えずなのは達と一緒に屋台でもみつ……………あれ……………なのはとヴィヴィオは……………」

取り合えずフェイトを落ち着かせる為、なのは達と共に屋台を見ようと考えたユーノだったが、近くにいたはずなのはとヴィヴィオがいらない。

「ふはっ! 嘘っ! なのはとヴィヴィオがいなくなつた!?

そんなっ…なのはもヴィヴィオも可愛いから変態に襲われるかも…っ…早く見つけないと変態につ!」

顔を青くしながら言うフェイト、変態はお前だ。

「取り合えず手分けして探そう!」

「うんっ! ふう……………なのはあああああーっ
!!!!!!」

フェイトは深呼吸すると、突然大声でなのは名を叫んだ。
ユーノと周囲の人々は耳を塞いだ。

「これで多分なのはがっ……！」

フェイトはキョロキョロとまわりを見渡す。

すると、何処からか声が聞こえた。

「フェイトちゃんっ！」

「フェイトママっ！」

少し離れた場所から聞こえる声。

「フェイト、今の声って！」

「なのはとヴィヴィオだっ！ 屋台の方から聞こえた！」

ユーノとフェイトは二人の声が聞こえた方へ走る。

「なのはっ、ヴィヴィオっ！」

「あ、フェイトちゃん、ユーノくんっ！」

「フェイトママっ、ユーノさんっ！」

「なのは何処に行つてだのおおーっ!!」

フェイトは泣きながらなのはに抱きついた。

「わわっ! ぐ、ごめんねフェイトちゃんっ、ヴィヴィオがわた飴食べたいつて言うから
買いに行つてたの。」

フェイトちゃん鼻水…っ…」

苦笑しながらなのははフェイトにティッシュを差し出す。

「心配したよ、ヴィヴィオ」

「ごめんなさい…このわた飴限定20個で売り切れそうだったので…虹色のわた飴なん
ですよっ!」

ヴィヴィオは苦笑してユーノに謝ると、買った虹色のわた飴を見せる。

「へえ、虹色つて凄いなね」

「一口食べます?」

「え、いやいや、ヴィヴィオのだし…」

「遠慮しないでどうぞっ♪」

わた飴をユーノの顔に近づけ、ヴィヴィオは微笑む。

「えーっど…っじゃあ一口だけ…」

ユーノはヴィヴィオの可愛い笑みに負け、一口だけわた飴を食べた。

「うん、美味しいね」

「ママと間接キス〜♪」

小声でボソツとにやけながら言うヴィヴィオ。

「ブツ!!!」

ユーノは思わず吹き出した。

「ちよっ、コラヴィヴィオっ!!」

顔を真っ赤にして怒るユーノ。

「あははっ、ごめんなさい嘘ですっ」

(嘘じゃないけど)

そんなユーノに対し、笑いながらヴィヴィオは謝った。

「嘘!?!」

「どうしたの?二人共」

なにやら騒がしいヴィヴィオとユーノに、なのははキョトンとした表情で話しかける。

「べ、べべ別につ…」

動揺しながら答えるユーノ。

「ユーノくんどうしたの？」

「別にどうもしてないよっ!？」

真つ赤な顔で、なのはから視線をそらしながら言うユーノになのはは頭に？を浮かべる。

「ふうく…スッキリした…」

なのはから貰ったティッシュで鼻をかみおえたフェイトがなのはの背後からユーノ達を見る。

「どうしたの？」

「さあ…なんかユーノくんが変で…」

「やだなあ、なのは、ユーノが変なのはもとか」

「まだもう少し時間あるから早く屋台を見ようかっ!! ねえ、なのはっ!」

フェイトが話している途中でユーノは少し大きめの声でそう言った。

「あ、うんっ、ユーノくん時間そんなないもんねっ」

「よーしっ、じゃあ皆で金魚掬いしたいっ!」

兎のように跳ねながらヴィヴィオが言う。

「金魚掬い……フツ……ユーノっ、勝負だよっ！」

《どっちがなのはにたこ焼きをぁーんするかっ!》

決め顔で言うフェイト。

《ええっ!?!》

「フェイトちゃんとユーノくん勝負するの？ なら私も二人には負けないよー？」

「なのはまでっ!?!」

「なのはも勝負となったらレッツ金魚掬いっ☆」

フェイトはなのはとユーノの腕を引いて走り始めた。

「ちよっ、ちよっと待ってフェイトちゃんっ！」

「走らないでフェイトっ！」

「ま、待ってよフェイトママっ、ママにユーノさーんっ！」

フェイトに連れられて走るなのはとユーノの後ろから追いかけるヴィヴィオ。

《ウへへ……勝つたらなのはにぁーんっして……私なのはにぁーんっしてもらったっ



にやけながら走る変態フェイトさん。

変態フェイトさんと着物なのはさん、そしてエロめが…ユーノとヴィヴィオのお正月はこの後もう少し続いたようです。

〔おまけ〕

「それじゃあなのは、今日は本当に楽しかったよ。」

「あ……ま、待ってユーノくんっ！ 今日……その……お仕事だったのに来てくれてありがとうっ……凄く嬉しかったよ！」

来年……も……また一緒に……初詣行きたいな……」

顔を赤らめながら言うなのは。

二人の片手には袋に入った金魚が。

「……っ！ うんっ、来年は……もつとゆつくり……なのはと一緒にいられるようにするから……あはは、喜んで貰えたなら良かったっ……」

ユーノも顔を赤らめながら言う。

(いい雰囲気っ、もうそろそろゴールは近いかなっ♪)

離れた場所から二人を見るヴィヴィオ。

空気を読めないフェイトは自分の後ろにいる、そう思っただけで安心していた。

「うんっ、そうだね、私も来年はなのはと二人きりでゆっくり過ごせるようになるからねっ！」

(ホテルで)

いつの間にか二人の間に現れたフェイト。

しれっとなのはの手を握っている。

「……………」

「……………」

いい雰囲気を壊された二人は目を点に。

そして

(しまったあああーっ!!!)

ヴィヴィオも目を点にして固まった。

お正月編、これにて

終わり

番外編へへ＋αへへ

くなのはさんと変態フェイトのエイプリルフルく

「あ、フェイトちゃんからメールだ」

本日、4月1日正午。

高町なのは（15）は自分の部屋のベッドに横たわっていた。

「なにになに？ 『大事な話があるの……今すぐ来てくれないかな……』 大事な話？

行かなきゃっ……メール返信して、ええつと……何も持っていないわけには……あつ、翠

屋のケーキを持っていこう！ おかーさんっ！」

なのは慌ててフェイトにメールを返信すると、靴下を履きながら部屋を飛び出でいた。

【そのころのフェイトさん】

「フフツ、上手く作れたわね」

「うん、母さんが手伝ってくれたおかげだよ」

二つの皿に作ったチョココレートを並べながら笑む女性二人。

「いいえ、フェイトが心をこめて作ったからよ」

ウインクしながら言う女性、彼女はリンディ・ハラオウン。

『フェイト』の母である。

「えへへ…なのは喜んでくれるかなあ」

チョココレートを見つめ、頬を染めながら言う女性はフェイト・T・ハラオウン（15）。

数年後に全力変態フェイトさんと呼ばれるあのフェイト。

会話を聞いていると今日はバレンタインだったかと思ってしまうが今は春、四月。

「アルフも食べたと言って言いそうだから少し残しておきましょう」

「うん。あ…でも母さんが作ったのはお酒入りで、私が作ったのは…」

「そうねえ…それじゃあ私のとフェイトのを…」

「ダ、ダメっ!!」

「……フェイト……?」

突然大きな声を出して言うフェイトにリンディは驚いた。

「こ、これは…その…なのはのだからっ……アルフにはまた今度作ってあげればいいよ」

苦笑しながら言うフェイト。

アルフに食べさせるわけにはいかない、というか食べさせてはいけない。
何故なら

(媚薬入りのチョコレートなんだからアルフに食べさせられないよ)

エイプリルフルールを利用し、フェイトはなのはを家に呼び寄せた。

そして変態な妄想をしながら作った媚薬入りチョコレートをなのはに食べさせるのがフェイトの狙い。

リンディは作ったチョコレートをクロノへ渡しに行く為、家に残るのはフェイトだけ。

(アルフはザファイラとデート中でいないし…こんなにいいチャンス滅多にない。

エイプリルフルールというこのイベント、最高だよねっ！

毎年私が嘘をついた後怒るのはは最高に可愛い…もう食べたい、ベッドの上で喘がせてやろうか！)

キッチンで立ったままグヘへとやけているフェイトに気づかないリンディ。

「フェイト、右のお皿のチョコレートが私ので、フェイトのは左のお皿だから」

「うん」

二人が作ったのは見た目そっくりなチョコレート。

ましてやお皿までも一緒。

右のか左のか覚えなければ間違えてしまう。

「それじゃあフェイト、私は着替えて来るわね」

「うん」

リンディはエプロンを脱ぐと自分の部屋に行き、リンディの部屋の扉が閉まったのをフェイトは確認すると、スマホを慌てて取り出し、メールを確認した。

『今すぐ来るからっ』か……なのは……今年は怒るなのはをベッドの上で喘がせてあげるから……気持ちいいこといっぱいしてあげるから……」

鼻血をポタポタとたらしながら言うフェイト。

すると

ピンポーン♪

チャイムが鳴った。

フェイトは走って玄関に向かい、ドアを開けた。

「フェイトちゃん大事な話ってなに!? なにがあったの!? って、わあっ!!」

ドアを開けたフェイトに向かって早口で問い詰めるのはだが、フェイトを見て表情をひきつらせた。

「なのはあ…♪」

フェイトは鼻血を出したままにつこりと笑む。

なのはは慌ててバッグからポケットティッシュを取り出し、フェイトに差し出した。

「ティッシュありがとう、取り合えず中に入って」

フェイトはティッシュを鼻につめながらなのはを家に上げた。

「お、お邪魔します…」

「なのはさんいらつしやい」

着替えたリンデイが部屋から出てきた。

「あ、リンデイさんお邪魔してます。これ、うちのケーキです。」

「あらあら、わざわざありがとう♪ゆっくりしていいってね」

「何処かにお出掛けですか？」

「ええ、クロノにチヨコレートを渡しにね♪」

「チヨコレートを…ですか？」

「か、母さんっ、取り合えず私となのはは部屋に行くから！ 行つてらっしやい、母さん」
フェイトは慌ててチョコレートと並べた皿を取り、なのはの手を引いて自分の部屋へ向かう。

「フェイトちゃん!？」

「え、ええ…行つてくるわね、フェイト……」

リンデイがそう言った時にはフェイトの部屋のドアはバタンと閉まった。

「あ、まだチョコレートのラッピングをしてなかったわ。

どの袋に入れようかしら♪」

ルンルン♪と鼻歌を歌うリンデイ。

リンデイがまだいることに気づいていないフェイトは

「なのは、あのね…大事な話…なんだけど……」

「うん、大事な話ってなんなのフェイトちゃんっ」

「なのは、今日は何月何日?」

「え? ええつと…四月一日だよ?」

「うん、そう。 四月一日。」

「それがどうしたの? フェイトちゃん。」

「なのは、私は大事な話なんてないよ。」

「へ？」

フェイトの発言になのは目を点にした。

「今日は四月一日。今日はエイプリルフルだよ？　なのは忘れてたの？」

クスクスと笑うフェイト。

そんなフェイトに対しなのはプルプルと震え、頬を膨らませてそっぽ向いた。

「心配したんだよっ！　本当に心配したんだから!!　いつも顔文字あるのに今日のメールにはなかったし！」

エイプリルフルだからってついていい嘘とついちやいけない嘘があるよ！」

瞳を涙で潤ませながら言うなのは。

普通なら少し心が痛むのだが、フェイトは違う。

(怒るなのは可愛い…)

ウヘへとやけながらなのは見ていた。

「ちよつとフェイトちゃん聞いているの!?　私は怒ってっ、きやつ!」

ベッドに座っていたなのは我慢出来なくなったフェイトがなのはを押し倒した。

「聞いているよ、ごめんね、心配させちゃったよね……でも凄く嬉しい……なのはがそれだけ

私を思ってくれてるんだもん……」

フェイトはなのはに抱きつき、指をなのはの髪に絡める。

「当たり前だよ……」

「うん……ねえなのは、さつき母さんとチョコレート作ったの。」

良かったら食べてくれないかな？」

フェイトはなのはから離れ、机に置いていた皿を取る。

「あ、そのチョコレート？」

「うん、私が作ったの」

「美味しそうだね、それじゃあ遠慮なく♪」

なのははチョコレートを一粒手に取り、食べた。

（ああ……今媚薬チョコがなのはの体に……いっぱい気持ちよくしてあげるからね、なのは♪）

チョコレートを食べるのはを見てフェイトはにやけが止まらなかった。

「わあ、凄く美味しいよこのチョコレート♪」

またもう一粒手に取り、なのはは食べた。

そしてフェイトは荒い息を吐きながら準備は万端。

いつでも襲う準備OK。

「もつと食べていいよ、なのは♪」

「うん♪」

それからもう一粒、またもう一粒となのはは食べ：

ギシリとベッドが鳴る。

顔を赤くしたなのはがベッドに倒れ、だるそうにしていた。

「なのは、大丈夫？」

フェイトはしれつとなのはに覆い被さり、なのはの頬に触れる。

「フェイト……ちや……なんか……体が熱いの……っ……」

「どうしたの？ 熱があるのかな……顔赤いし……取り合えず服を脱ごうか……♪」

にっこりと笑い、フェイトはなのはの服に手をかけた。

すると

「何で服脱がないといけないのかな？ フェイトちゃんのえっち♪」

なのははフェイトの腕を片手でガシリと掴み、フェイトの頬を思いきりピンタした。

「へっぶっ!!」

真つ赤になつた頬を震えながらフェイトは手でおさえた。

「な、なのは……………」

「フェイト……ちや…………Zzzz……」

フェイトをぶつたと思えばなのはは数秒で眠りについた。

「え？　ちよつ、なのは……………」

（何で寝てるの？　体が火照つて即エッチしたくなるつて書いてあつたのに……え、何で？）

「Zzzz……」

「ま、まあ、寝てるなら寝てるでまた別のシカタがあるから良いけど……………」

気を取り直してフェイトはまたなのはに覆い被さつた。

「まずは胸から……………」

フェイトはなのはの胸を服越しに揉もうとする。

すると

今度はなのはの脚で腹を蹴られた。

「グフォツ!!」

フェイトはベッドの上を腹をおさえて涙を流しながらゴロゴロと寝返りを繰り返す。

（あしいつ!!!　どんなタイミングで脚きてんの!!　というかなのは爆睡してるのに何

で!?)

「Z z z……」

爆睡中のなのはを見て震えながらフェイトは起き上がった。

「寝てるのに何でっ………というか媚薬聴いてないだろこれ…っ!

しかもさつきからなんか酒臭い!!」

フェイトは苛立ちを先程から漂う酒の臭いにぶつけた。

「大体何で酒の臭いなんか!! ……ハッ!？」

「酒………母さんが作ったのはお酒入りの…ま、まさかつ!そんなことっ………私はちゃんと左の………いや、右のを取ったような…っ………あかんっ! そうなると媚薬チョコがクロノのもとに!？」

大変や!! って、なんかはやての口調になってしまった!!」

フェイトは必死に記憶をあさり、動揺のあまり親友の八神はやて(15)の口調になる。

「だからなのはは寝てるの?! いや、というか母さんそんなにお酒入れてないのに酔うとかお酒に弱すぎでしょなのはっ!!

って、そんなこと言ってる場合じゃない!!」

フェイトは慌ててリンディへ通信を繋げた。

『え、チョコレートを？』

「そう！ 母さんが持っていたチョコレートは私が作ったので、私なのはに食べさせたチョコレートは母さんが作ったチョコレートだったの!!」

『あら、なのはさんは大丈夫なの？』

「なのはは酔って今寝てる！ それよりもチョコレートは!? まだクロノに渡してないよね!」

『あ……ご、ごめんなさいフェイト……もうクロノに渡しちゃって……さっきメールでエイミーさんと一緒に美味しく頂きましたって来たの……』

(別の意味で頂きましたってか!!)

フェイトは顔を青くして硬直した。

『フェイト……？ 大丈夫？』

「あはは……食べちゃったんなら仕方ないよね……それじゃあ母さん、また」

『ええ……』

フェイトは通信を切った。

「計画…台無し……」

フェイトは涙を流しながら気持ち良さそうに眠るのを見る。

「もうこうなったら意地でもなのはとエッチしてやる!!!」

なのはああああっ!!」

フェイトは思いきりなのはに抱きついた。

すると

なのはの肘がフェイトの顔を殴った。

フェイトは顔を手でおさえ、涙を流しながら再びなのはに抱きついた。

だが、またナイスタイミングでなのはの膝がフェイトの腹を蹴り、フェイトはまたベッドの上で腹をおさえて寝返りを繰り返す。

こんな事が15分程続き…

「あれ、私……」

なのはは起き上がり、目を擦る。

「よく眠れた…?」

あちこちポロポロなフェイトがなのはの隣に横たわっていた。

「ど、どうしたのフェイトちゃん…っ!!」

「私は諦めな……い……」

フェイトは瞼を閉じ、眠りについた。

「ちよっ、えっ、フェイトちゃん!?! フェイトちゃんってばーっ!!」

なのははフェイトを揺さぶるが、フェイトは暫く目を覚まさなかつた。

終わり

くナースフエイトさんく

気分転換番外編

【ナースフエイトさん】

私はフエイト・テストロツサ・ハラオウン。

高町なのは専用のナースです。

今日はなのが熱を出した為、泊まりがけの看病をすることになりました。

『あのね…体が熱くて……キツいの…頭もボーッとするし、風邪じゃないかなって……』

『うん、おでこ熱いね…それじゃあまず汗たくさんかいてるから、着替えよつか』

『えっ…？ あ…えつと…じゃあ自分で着替えるね…』

『ダメだよなのは、私が着替えさせてあげるから大丈夫っ。』

下着もゼーんぶ…脱がしてあげるから…っ』

『や、やだよっ…そんな…恥ずかしい…っ』

『女の子同士なんだから恥ずかしくないよ。 さ、脱ごうね…なのは…』

私はなのはのパジャマを脱がし、あることに気づきました。

『あれ…ホツカイロが4つもパジャマの中に……』

『そ、それはっ……』

『イケない子だね、なのはは……』

『だ、だつてっ……フェイトちゃんに会いたかつたんだもん……っ』

『そんな子にはえっちなお仕置きっ♪』

『ひゃんっ!』

私はなのはのブラをずらし、なのはの胸を揉みながら耳元で囁いた。

『なのは、今の私はナースだからなのはがしてほしい事、何でもしてあげるよ?』

そう囁いてあげると、なのははブルツと小さく震えて蕩けた瞳で私を見てきた。

やっぱりなのはは可愛すぎる。

『あつ……ああん……っ……な、ん……でも……?』

『うん、なんでもしてあげるよ』

『えつと……ね……あの……二人きり、だからっ……フェイトちゃんがしたいようにしてくれ』

たら…嬉しいな……』

ぎゅつとなのはの手が私の手を握った。

『そっか…なら遠慮なく…♪』

私はなのはの右耳を甘噛みしてた。すると、可愛いなのはが小さく声を上げる。

『ひやつ…！ み、耳はダメっていつも言って…っ』

『好きでしょ？ 耳に触れられるのも、キスされるのも』

『それは…好きだけど……』

恥ずかしいのかなのはの顔が赤い、本当に可愛い。

『でもなのはがもつと好きなのは…ここ、だもんね…♪』

私はなのはのソコに下着越しに触れ、優しく指でソコを撫でる。

『ふっ…ああ…っ…フェイトちゃん…』

『フフツ、それじゃあ下着脱ごうか…邪魔でしょ？』

私はなのはの下着に指をかけ、ゆっくりと下ろしていく。

『フェイトちゃん…大好きだよ…』

なのはがゆっくりと私に顔を近づけてくる。

『うん、私もなのはが大好きだよ…』

脱がし終えたなのはの下着を片手に、私はなのはに唇を重ねた。
なのはがもつと私の背に腕を絡めて求めてくる。

なのはの思いにこたえるため、私は……

「なのひゃ〜…♪ Z z z …」

フェイトの部屋に窓から光が射す。

ベッドの上で寝返りをし、気持ち良さそうに眠るフェイト。

するとノック音が聞こえた。

「フェイト〜、朝よ〜、そしてなのはさんが来てるわよ〜」

ドアの向こうから聞こえる声は母のリンデイ。

「ファツ!? な、なのは!」

気持ち良さそうに眠っていたフェイトはガバツと起き上がる。

「か、母さん! なのはが来てるの!」

「ええ、後はやてさんも来てるわよ、私はリビングにいるから」

リンデイはそういうと行ってしまった。

「なのはとはやてが!?! って…今のは夢!?! 私となのはの百合セツ(※ピー)は夢だった

の!？」

そう、先程のアレはフェイトさんのエッチな夢でした。

「ゆ、夢……夢にしてはなんかりアルだったな……って……」

枕が鼻血で染まつてる!? 大変だつ、シーツにまで! というか早く着替えなきや
!」

フェイトは慌ててベッドから降り、クローゼットから服を引っ張り出す。

「そういえば今日は、なのはとはやてと出掛けるんだつた!」

なのフェイト思い出ビデオなんて見てたから起きれなく……つ……」

フェイトは着替えながら夜中観たなのフェイDVDを思い出す。

「なのはの着替え中……出会った頃とはだいぶスタイルが変わって……あの胸に顔を埋めたい……夢が現実にならないかな」

そう言いながら着替え終わると、フェイトはリビングへ向かい

「なのは! はやて!」

「フェイトちゃん!」

親友二人に思いきり抱きついた。

「おはよう、フェイトちゃん♪」

「あはは、元気やなあ、フェイトちゃんは」

なのはとはやては笑みながらフェイトを抱き締める。

（ああ…幸せ…）

フェイトは嬉しそうにやけながら二人を抱き締めた。

この日、フェイトはなのはとアイスで間接キスをしたらしく一日中ご機嫌だった。

〔終わり〕

くフェイト、エロゲーをプレイする＋おまけく

買ってしまった。

ゲームなんて普段あまりしないのについ買ってしまった。

何故なら

このエロゲーのヒロインが

なのはに似ているからだ。

「今日は休みだし、DVD借りて見ようと思って行ったのになあ……このなのはにそっくりな子が見えたからつい……」

学園物か……取り合えずプレイしてみよう」

ゲームのパッケージを見ながらフェイト（18）はゲーム機をセットしていく。

「なにになに？ 主人公はごくごく平凡な男子高校生…幼馴染みのヒロインとラブラブな日常を楽しもう…？」

フェイトはパッケージの裏に書いてある説明を読む。

「ありふれた設定だなあ…ま、取り合えずプレイしてみるか♪ なのは待つててね♪
鼻息を荒くしながらフェイトはゲーム機を起動させ、プレイし始めた。

『主人公の名前を設定してね☆』

「名前か…そんなの決まってる！ 名前はフェイト（男）だよ！」

テレビ画面に向けて叫びながら名前を入力していく。

「説明見る限りもう幼馴染みとは恋人なのか…告白されるところ見たかったな…」

『フェイト（男）くんだね♪ じゃあ次はヒロインの名前を決めてね♪』

突然ゲーム画面に謎の女性が現れた。

「えっ、誰?! ヒロインじゃなくないっ!？」

「というか…ちよつとやそつと動いたくらいでそんなに胸揺れないし。」

女性が少し動く度に胸が不自然に揺れる。

フェイトはジト目で女性の胸を見て鼻で笑った。

「つて、ヒロインの名前も変えられるんだ！　？　名前？　そんなの決まってるっ、高町なのはだよ」

上機嫌でヒロインの名前を入力していくフェイト。

先程からにやけが止まらない。

『やっほーっ♪　名前入力してくれてありがとう、フェイト（男）くん♪』

名前を入力し終わると、なのはにそっくりな少女が画面に現れた。

「な、なのはあああ!!!」

フェイトは目を見開いて驚くと同時になのはの名を叫んだ。

「な、なのはが制服着てるっ、しかも黒のセーラー!?　可愛すぎかああっ!!!」

慌てて隣にあるティッシュを数枚取り、鼻血が出ている右の穴にティッシュを詰め
た。

『あらなのは、もう来たの?』

『お母さん、ここからは私がフェイト(男)くんの説明するからお母さんはお家に帰って?』

『そうね、お邪魔しちや悪いものね♪ それじゃあフェイト(男)くん、なのはをお願いね♪』

ヒロイン(なのは)に向けて笑みながら言うと、ヒロインのお母さんはフェイト(男)に向けて手を振りながら画面から消えた。

「ヒロインのお母さんだったの!? 桃子さんには似てなかったな…っ…まあ、ゲームだから仕方ないけど…」

『フェイト(男)くん、そろそろストーリー始めようと思うんだけど、準備はいい?』

「オーケーですっ!!!」

(かわいい…っ…)

自分に向けてにっこりと笑むなのは(ヒロイン)が可愛くてフェイトの表情は蕩ける。『それじゃあ、ゲームスタートだよっ♪』

クルリと一回転し、サイドテールの髪を揺らしながら言うなのは(ヒロイン)。

画面は変わり、主人公の部屋の背景が映し出された。

「よし、始まった始まった♪ 待っててねなのはっ、今すぐ飛び起きてなのはの家に迎えに行くからね!!」

多分ゲーム内の時間は朝で主人公は寝ているパターン、そう考えたフェイトはボタンをポチポチと押してストーリーを進めていく。

すると

『ふふっ…気持ち良さそうに寝てるね、フェイト(男)くん…♪』

画面は寝ている主人公に覆い被さるヒロインが映し出され、フェイトは目を見開いた。

「いつの間にそこに!? というかはじめから何この嬉しい展開!!」

ふんすつと鼻息を荒くしながらフェイトは画面を見る。

ヒロインは主人公を見て妖艶に笑んでいた。

『もう…学校だつて言うのに起きないなんて…6時だよ? フェイト(男)くんが起きないなら私が起こしてあげるね…♪』

そう言うヒロインは寝ている主人公に唇を重ね、暫くして気付いた主人公は飛び起

きた。

『な、なにするんだよなのはっ！ 朝だぞ!?』 というか何で俺の家にいるんだよ!』

『だって合鍵持つてるし♪ ほらほら、なのはさんが目覚めのキスしてあげますよ♪』
顔を赤くして言う主人公にクスリと笑うと、ヒロインは強制的に再び主人公の唇を奪った。

「おおっ……朝から大胆ですななのはさん……」

興奮し過ぎてもはや口調が変わるフェイト。

テレビ画面には朝からベッドの上で熱いキスを交わす二人が映し出され、どうも体が火照って仕方ないフェイトは冷凍庫からアイスを取り出し、食べながらゲームを続ける。

『んうっ、お、おい、いい加減にキスはやめろっ』

『えー？ むう……キスくらいいいじゃない』

『駄目だ、さ、俺の上から降りて部屋を出てくれ。 着替えるから』

『フェイト（男） くんを着替え見ちゃダメ……?』

『駄目だ』

『むう…っ…フェイト（男）くんのケチ〜』

「ちよつ、何で追い出すの!？」 なのはに裸見てもらえよ!!」

食べ終えたアイスの棒をくわえながら画面に向けて言うフェイト。

なのはにそっくりなヒロインを見る為にプレイしているというのに暫く主人公の語りが続き、フェイトは段々やる気が無くなってきた。

「何で私こんなゲームやってるんだろ…今さらだけどね…まあ、時々パンチラとかあったけどさ…本当にこれエロゲーなの？ 何処が18禁だよっ!!」

くわえていたアイスの棒をパキッと折りながら言うフェイト、そう言いつつボタンを押す手は止めない。

「まだ16時か…大丈夫だね」

この部屋で一緒に暮らしているのが帰って来るまで、まだ数時間あることを確認するとフェイトは黙々とゲームを進めていく。

そして暫くすると、その時は来た。

『公園に来てなにをするの?』

既にゲーム内では2週間が経ち、主人公とヒロインは夜の公園に来ていた。

『なにつて…好きだろ?　なのは外でするのが』

『きやつ!?!』

「来たあああつ!!　ついに来たつ、ついに来たよこの時が!!」

茂みに隠れてヒロインを押し倒した主人公に、これまで以上に興奮したフェイトは思わず正座をしてゲームを進める。

『だめつ、ひゃ…つ!　こん、なところでなんてつ、んんつ!』

『なのは好きだろ?　野外プレイ』

『そんなことつ!　あつ、やつ、入つて…つ…ああつ!!』

ついに「よいこの皆は見ちや駄目だよ」、な絵が画面に映し出された。

「おうふ……」

まだティッシュを詰めていないもう片方の穴から鼻血が流れ、フェイトはテレビ画面をじーつと見ながら、鼻にティッシュを詰める。

「野外…プレイか…」

『ふえ、いと…ちや…つ！ だ、めつ…こんなところ、でつ、掻き回さないでえ…つ』
『お外でシてるんだから声抑えないと、人に聞こえちゃうよ？』

なのはのソコを指で掻き回しながら笑むフェイト。

『いやあつ…あつ、ああ…つ！』

涙を流し、震えながら声を上げるなのはにフェイトは唇を重ねる。

『んんうっ！』

『んっ…ちゅ…っ…』

ピクツとなのはが体を反らせるが気にせずにフェイトは更になのはを責め続け、あつという間になのはを…

「ウへへ…っ…た、堪らんっ…」

フェイト、エロえろ妄想から只今帰還。

「んっ…ちよつと流石に息が苦しいけど仕方ないか。 おおつ、凄いつ、いいぞもつとやれ私っ!!」

鼻に詰めたティッシュに息苦しさを感じながら、ゲーム上の自分、主人公にガッツポーズをして言うフェイト。

時折蕩けた表情を浮かべるヒロインの絵がアップで映る度にフェイトが床をバンバンと叩く。

「最高過ぎるっ…私も実際になのはを抱きたいっ！ 野外ぶれええ…っ…」

先程のように、妄想の中では何度もの抱いたが実際はまだ抱けていない為、フェイトは涙を流しながらテレビ画面を見る。

「私だつてっ、私だつてなのはを抱きたいよおお…っ！ あんあん言わせたいよっ！でもっ、でもそんなに簡単にいかないんだよお…っ」

鼻にティッシュを詰め、泣きながら、叫びながらエロゲーをするフェイト。
なにかと忙しい。

『あつ、あああつ！ も、無理いつ、わたし…っ、あつ、あつ』

『なのはっ!』

「はっ!? これはっ…! これはもうすぐなのはがイク!? そんなに口開いて喘いじゃって…ああ…幸せ…」

画面に映るヒロインの絵にうつとりとして見るフェイト。

もうすぐでヒロインが…

というところで、

ガチャッ

玄関のドアが開く音がすると

「ただいま♪」

本物のなのはさん、ご帰宅。

「…っ!?!」

なのはの声が聞こえ、一瞬硬直するとフェイトは慌ててテレビの電源を切り、セーブ

もせずにゲーム機の電源も切った。

(テレビとゲーム機の電源切ったっ!よしっ!!)

「ただいま、フェイトちゃん」

仕事帰りに買い物をしてきたのだろうか、なのはの片手には買い物袋があった。

「お、おお、お帰りなのは」

額にだらだらと汗を浮かべ、ぎこちなく言うフェイト。

「か、帰って来るの早かったねっ」

(全部証拠隠滅したよね!? 何もないよね!?)

「うん、ヴィータちゃんに気使われちゃってね。今日はフェイトちゃん休暇で家にい

るからお言葉に甘えて帰って来ちゃった♪」

「そ、そっかつ」

「ゲームしてたの?」

チラッとフェイトの近くにあるゲーム機を見てなのはは言う。

「えっ!?! あ、うんっ…」

「そっか♪ 今日の晩御飯はハンバーグなんだ……ん?」

袋から材料を取り出し、フェイトに見せようとしたのはだがある物に気づき、屈む

とソレを手を取った。

「エロ……エ……ロ……ハッピー……ライ……フ……っ」

目を点にしてソレに書かれたカラフルな字を読み上げるのは。

そう、なのはが手に取ったのはフェイトが先程までプレイしていたゲームのケースだった。

（あああああぁーっ!!!!!!）

フェイトは顔を一瞬!で青くし、硬直した。

「……………」

ケースのパッケージの絵は普通な為、なのはは裏を見ようとする。

そして見たのは…

裸で交わる女の子と男の子の絵だった。

「……………」

耐えられなくなったフェイトはケースをなのはから取り上げ、投げ捨てる。

「……っ……!!」

あまりの衝撃に硬直しているのはは顔を真っ赤に染め、スササツとフェイトから少し離れた。

「ち、違うのなのはっ!! 誤解なんだよ!!」

近づかないで、と言っているような目で見てくるのはにフェイトは涙を浮かべながら言う。

「な、なな、何でフェイトちゃんそんなゲームっ…」

「ち、違うのっ!! これは…っ、これは私のじゃないんだよ! これはクロノのなのっ!!」

どうにか誤魔化そうと考えたフェイトの口から出た犠牲者の名前は、兄のクロノ・ハラウン。

クロノは今頃涙目だろう。

「えっ!! そ、それクロノくんのなの!?!」

「い、イエスっ!!」

(ごめんクロノ…っ…)

「エイミーさんに見つかるのが嫌だからって言うから一時的に預かってたの！」

や、やだなあつ、私がこんなゲームするわけないよ♪」

苦しい言い訳で笑みながら逃れようとするフェイト。

「そう…なんだ…びつくりしたあ…」

「あはははは、隠してたのにこんなところに落ちてるなんてー、もうやだなあー」

棒読みでそう言いながらフェイトは投げ捨てたケースを棚の奥にしまった。

「ちなみになのはっ！ 私はね、さっきまでマ〇オやつてたの!! マ〇オだよっ！」

「あ、そ、そうなの？」

「うん!! 普通のゲームしましたっ！」

「そ、そっか…♪ ところでフェイトちゃん、また鼻血出たの？大丈夫？ 今度本当に耳

鼻科行こうか？」

フェイトの鼻に詰められている2つのティッシュを見て言うのは。

「こ、これはねっ、マ〇オプレイしてたら興奮し過ぎて鼻血が出ただけで!!」

別にあのゲームやってて鼻血が出たわけじゃっ」

「そんなにマ〇オ面白いの？ じゃあ、ご飯食べた後私も一緒にゲームしていい？」

「え…っ…あ、う、うん！ やろうやろう！」

（良かったつ、怪しまれてはないみたいっ…）

「それじゃあご飯作ってくるね、今日はハンバーグだよ」

立ち上がるとエプロンを着用し、笑みながら言うのは。

「わーいつ、なのはのハンバーグ嬉しいな〜っ！」

（さて、どうしたものか…っ…なんかあのゲームやりづらくなってきた…

買ったばかりだけど売ろうかな…でもなあ…っ…もういつそ…誰かに預かってもら

うか…！）

誰に預けようかと考えるフェイトの頭に浮かんだのは、はやて、クロノ、ユーノだった。

（はやてはまず無しだね、次はクロノだけど…エイミイさんがいるしなあ…っ…クロノには悪い事したし…仕方ない、ここはユーノにするか）

「フェイトちゃん、食器出すの手伝ってー」

「はい」

なのはに呼ばれ、キッチンへ向かうフェイトは口角を上げてニヤリと笑っていた。

〔後日〕

「ということで暫く預かって？　　というか貰ってくれると助かるんだけど」

休憩時間を利用して無限書庫に訪れたフェイトはゲームソフトをユーノに渡そうとしていた。

「いや、何がということでのなの？　いきなりアダルトゲーム貰ってって言われても貰うわけじゃないじゃないか！

　　というかせめてパッケージの絵見えないように隠してよ！」

　　書庫で仕事中にフェイトに呼ばれ、何かと思えばソフトを貰ってと言われたユーノ。

「あー、ごめん、そこまで気まわらなかつたわ。　ほら、このゲームなのはにそっくりな子出てるから。パンチラとアレとかあるから。」

　　真顔でフェイトはソフトをユーノに押し付ける。

「いや、だからいらなくて！　自分で処理してよ！」

「売るも捨てるも出来ないんだよ！　なのはにそっくりな子が出てるのにそんなこと出来るわけじゃないじゃない！」

「なら買うなよっ！」

　　ユーノ、正論である。

ゼエハアゼエハアと言いながら言い合いをする二人。
そんな二人のもとへ

「司書長ー、すみませ……………っ!？」

ユーノに話があつたのか、女性司書がユーノのもとへやって来た。
が、アレを見て表情をひきつらせた。

「どうしました?」

自分を見て硬直している司書を見てユーノは声をかけるが、女性は目を泳がせて苦笑した。

「な、なんでもありません…失礼しました……」

司書は慌てて戻っていき、ユーノは首を傾げる。

「どうしたんだろう」

「ねえユーノ、これだけは教えておくね、裏の絵見えちゃってるから隠した方がいいよ」
「え?」

フェイトに言われ、ユーノはケースの裏の絵を見た。

すると見えたのはなのはにそっくりな女の子が男の子と裸で交わっている絵。
顔を真っ赤にしたユーノはフェイトを見るが既にフェイトは逃げていて。

「ふえ……っ……フェイト戻ってこーいっ!!!」

思わず叫ぶユーノだが書庫に響き、フェイトには届かず司書達が驚くだけ。その頃のフェイトさんは呑気にスキップしながらなのはもとへ向かっていた。

「なのはとお昼っ、なのはとお昼っ♪」

今回の出来事で犠牲となったのはクロノとユーノ。

クロノはなのはに誤解され、ユーノは一人の女性司書に誤解され……

毎日のように自分のまわりの男性を振り回すフェイトさんは今日も

元気です。

〔終わり〕

〔おまけ〕

「ついに来たで…私の出番が!!」

「よっ、はやてちゃん!」

「待つてましたはやて!」

えっへん、とするはやてにパチパチと拍手するのはとフェイト。

「いゝやあゝ、長かったわゝ…リリカルなのはの三人娘の一人、八神はやての出番が15話目にしてあるなんてっ…」

シクシクと泣くはやて。

「はやての出番…? ちよっ、ちよつと待つてよ、次回からは本編に戻るんじゃないの?」

何処から来たのか突然ユーノが現れた。

「あ、ユーノくん。 実はね、今回は『ナースなのはさん』15話記念にまた番外編なんだよ♪」

ユーノに説明するなのはに背後ではやてとフェイトは頷く。

「えっ…いやいや、流石に番外編書きすぎじゃ…」

「本編私出ないやないかつ！ 番外編くらいっ…番外編くらい出させてよユーノくん！！」

「そうだよユーノっ！！ 自分はよく出番があるからって酷いよユーノ！」

ビシッとユーノを指差して言うはやてとフェイト。

はやては涙を流していて。

「出番って、フェイトほど僕出てないよ!?!」

「そうだよ…フェイトちゃん出番多いもん…私なんか主人公なのに脇役みたいで…っ…」

屈み込み、ため息を吐きながら言うのははいつの間にかネガティブモードに。

「そ、そんなことないよなのは！ なのはが主人公じゃなきゃ私出てないから!!」

「フェイトちゃん…っ…」

「僕だってなのはが看病に来てくれなかったら出てないし、そもそもこの話始まってないよっ…」

「ユーノくん…」

「よし、こうなったらユーノっ！ もう一回風邪引いてっ…いや、私が風邪引けば良いんだ!!」

待っててなのはっ、今すぐ風邪引いてくるからっ！ 風邪引いてなのはに看病してもらうから!!」

「フェイトちゃん…うん!」

何処かへ走って行こうとするフェイトになのはは涙ぐみながら頷いた。

「うん!じゃないよなのは! フェイトに風邪引かせてどうするのさっ!」

「だってこうでもしなきゃ私主人公じゃなくなるもん!」

「それじゃあなのはっ、行ってくる!!」

「うん!」

「うおおおーっ!!!」

フェイトは叫びながら走って何処かへ向かっていった。

「ちよっ、フェイトーっ!?!」

ユーノが叫んだ時には遅く、フェイトは黄色い光りを放ちながら遠くへ行った。

『ナースなのはさん』、『ナースフェイトさん』と来たら次は『ナースはやて』さんやなっ
！』

目をキラキラと輝かせて言うはやて。

「いやいや、まだ本編終わってないからね!!? 一応まだ僕、本編じゃ風邪引いてるから
！』

「もういつそ本編に乗り込んで私が皆の看病したるで!」

「それだとタイトル変わるから!!」

「そうなたらまた私の出番が…っ…」

なのは、再びネガティブモード。

「あーっ!! もうっ! ツッコミが回らない!!」

ゼエハアゼエハアと息を吐くユーノはツッコミで疲れる。

「ということ次回はナースはやてさんやで〜♪」

「違うからね!」

「また私の出番が…っ…」

ワーワーと騒ぐ3人をよそに

「騒がしいな…あ、クロノ・ハラオウンです。　　なのは達の代わりに僕が。」

次回は『王様ゲームなのっ』になります。」

何処から現れたのかクロノが現れ、次回の予告をしていくクロノ。

「次回も妹の応援をよろしくお願いします」

(フェイト…僕はなのフェイを応援しているぞ…!)

〔終わり〕

く5人で王様ゲームなのっく

〔ハラオウン家 リビングにて〕

「んく、折角5人揃ったんやし…なんかしたいなあ」

ポテトチップスを食べながら呟くのは八神はやて（15）。

「なにかしたいって、さつきから皆お菓子食べてるよ？」

はやての向かい側に座っている高町なのは（15）がチョコレートを口に入れて言う。

「あはは、それにしてもよく集まったよね、このメンバー」

はやての隣で苦笑しながら言うのはユーノ・スクライア。

ここはハラオウン家のリビング、テーブルにたくさんのお菓子とジュースを並べ、休暇を合わせたはやて、フェイト、なのは、クロノ、ユーノは話したりトランプで遊んだ

りしていた。

「本当だね、あ、クロノくんジュースお代わりいる？」

クロノのグラスに飲み物が入っていないのを確認すると、笑みながらなのは言う。

「ああ、すまない、ありがとうなのは」

クロノのグラスにジュースを注ぐなのは、の無防備なその背中にフェイトが抱きついた。

「きゃっ！ ちよっ、ちよっどフェイトちゃん!？」

頬を染めて驚くなのは。

そんななのはを見てフェイトはにやついた。

「だってなのはの背中が近くにあったから」

スリスリとなのはの背中に頬を擦り付けながら言うフェイト。

「い、今クロノくんにジュース注いでるから危ないよフェイトちゃんっ」

苦笑しながらなのはが言うが、フェイトは離れず。

「フェイト、なのはが困ってるから止めてあげなよ」

困っているなのはを放っておけず、ユーノがフェイトに言うが、フェイトはジロリと

ユーノを睨んだ。

《プクク、淫獣さん嫉妬ですか？　なのはに抱きついてる私に嫉妬ですか？》

なのはの背中にスリスリとしながらニヤニヤとユーノに向けて笑うフェイト。

※《》は念話です。

《嫉妬じゃないです、なのはが困ってるから言っただけです》

呆れた表情をしてユーノは言う。

《そっだよね、羨ましいよね〜♪　ユーノは男子だからなのはに抱きついたり出来ないもんね〜》

片手で口を押さえてプククと笑うフェイトにユーノは少し苛つくも、深呼吸をして落ち着こうとする。

《だから、別に羨ましくなん》

「出来たーっ！」

「！！？」

突然はやてが万歳をして叫び、なのは、フェイト、ユーノはビクツと体を跳ねさせて驚いた。

「な、なにが出来たの？ はやてちゃん」

「ふっふっふっ…じゃーん！ 折角このメンバー集まったんやから、王様ゲームしよか」
♪

いつの間に準備したのだろうか、はやては5本の棒が入った箱を手に持っていた。

「王様ゲーム？」

クロノとユーノははやてを見て首を傾げる。

「王様ゲームは、この箱に入った棒に番号と『王様』って書かれた棒が入ってな、皆でこの棒を一斉に引くんよ。」

そして、引いたら皆で『王様だられだ』って言って王様引いた人は名乗り出て、○番は○○をすゝるとか、○番は○番と○○するゝとか命令して、皆でワイワイ盛り上がるゲームやで♪」

「へえ…」

（命令…なんか嫌な予感がするんだけどな…）

はやての説明を聞いた後、ユーノはフェイトをチラッと見た。

フェイトはなのはに抱きついたままにやついて瞳を輝かせていた。

(王様ゲームっ…命令によつてはなのはとあんなことやこんなことが出来る!!)
ふんすつと鼻息を荒くするフェイト。

※そんなこと出来ません

「なるほど…楽しそうなゲームだな」

(これはフェイトとなのはの距離を縮めるチャンス…！)

お兄ちゃんに任せろフェイト！)

心の中でガッツポーズをとるクロノ。

まともな性格に見えるクロノだが、実は百合な妹を全力で応援する、百合好きなフェイトのお兄ちゃんである。

まあ、クロノが百合にハマったのはフェイトが原因なのだが。

ちなみに恋人のエイミイに見つからないよう、百合の薄い本を自分の部屋に数冊隠している。

「王様ゲームかあ…変な命令しないでよ？ はやてちゃん」

苦笑しながら言うのは。

「なのはちゃん、変な命令をするから楽しいんやで、王様ゲームは♪

じゃあ始めるから、フェイトちゃん座ってな〜」

「は〜い♪」

（ウへへ……なのはと……なのはと……っ）

先程までなのはに抱きついていたらフェイトだがなのはから離れ、にやつきながら座った。

「なんかドキドキするね」

正座をして言うなのは。

なのはの頬は少し染まっっていて。

「じゃあ始めようか♪」

テーブルに並べられたお菓子を少し退かし、箱を真ん中に置くとはやては笑んだ。

テーブルを囲んで座る5人。

【※時計回りに、はやて、ユーノ、なのは、フェイト、クロノで座っています。】

そして5人は箱に手を伸ばし、ドキドキの王様ゲームは始まった。

「せーのっ」

「「「王様だ〜れだ」」」

くじを引き終わり、はやての合図と共に同時に言うのは達。
さてさて、最初の王様は？

「私やね♪」

棒を片手にニッコリと笑むはやて。

『王様』の棒を引いたのははやてだった。

「じゃあ…2番が1番の耳を甘噛みせよ」

何故か王様口調で命令するはやて。

はやての命令に二名の体がピクリと跳ねた。

「えつと…っ」

2番と書かれた棒を片手に苦笑するなのは。

「え、なのは2番なの!？」

「フェイトちゃんもしかして1番？」

「いや、私は4番…っ…」

(なのはがユーノかクロノの耳を甘噛み?! なにそれっ、凄い羨ましいんだけど!!)

4番と書かれた棒を強く握り締めながらフェイトはクロノとユーノを睨む。

すると、クロノは自分は違うと首を左右に動かしてフェイトに訴えた。

だとすれば、残るのは一人だけ。

「あの…」

頬を染めてなのはをチラつと見るユーノ。

ユーノの手には1番と書かれた棒が握られている。

「は、はいはーいっ!! 引き直しを希望します!!」

(なのはに耳を甘噛みなんてさせるかあああっ!!!(!!))

額に汗を浮かべ、はやてに必死に訴えるフェイト。

なのはがユーノに顔を近づけて耳を甘噛みするなんて、想像するだけで鼻血が出そうになる。

「引き直しなんてルール違反やでフェイトちゃん。

様子からしてなのはちゃんとユーノくんやね、さ、二人共、王様の命令は『絶対』やで♪」

早くしろとばかりに満面に笑むはやて。

ユーノは染まった顔を俯け、なのははモジモジとしながら瞳を揺らす。

「な、なな、なのはっ、なのは嫌だよね!? ユーノの耳を甘噛みするなんて!!」

はやてを説得するのは無理だと判断したフェイトは、なのはに話しかける。

すると、頬を染めたなのははフェイトの方へ振り向き、口を開いた。

「だ、大丈夫だよ、フェイトちゃんっ…その…ゲームだし! 平気平気っ!」

あははと誤魔化すように笑いながらなのはは立ち上がり、ユーノのもとへ行くと隣に座った。

「あ、あ、あああつ、あのなのはっ! そのっ、えつと…っ」

突然隣に座り、自分を見つめるなのははユーノは顔を真っ赤にして頭は混乱していた。

「し、失礼しますっ!!」

恥ずかしいのだろう、顔を真っ赤にしたなのはは勢いに任せてユーノに顔を近づけると、右耳を甘噛みした。

「あ…っ…」

ピクンツと体を跳ねさせてユーノが思わず小さな声を上げた、と同時に

(あの淫獣やろおおおっ!!!)

フェイトが歯を噛み締めてユーノを涙目で睨み、いつの間にか片手に握っていたう○い棒を握り潰した。

(このまま二人の距離が縮んでくれたらええんやけどなあ…)

なのはとユーノを微笑んで見つめるはやて。

「んっ……ぐ、ぐ、ぐ、ごめんねユーノくんっ!! い、痛くなかった!？」

数秒すると慌ててユーノの耳から口を離し、少しユーノから離れてて言うなのは。

「だ、だ、大丈夫だよなのは! そのっ、ありがとうっ! じゃなくてっ!! えっと…っ!」

(あああああ…っ!! 僕は何を言ってるんだっ! 神様ありがとうっごさいます! もう死んでもいいです!!)

プシューと効果音が鳴るのではないかと思うほど顔を真っ赤に染めるユーノは、耳まで赤くなり、頭の中はごちゃごちゃに。

最早どつちがヒロインなのかわからない。

「おうおう、いいよいいよ、もっとイチャついてや〜」

からかうように笑いながら言うはやてに、なのはとユーノは同時に口を開く。

「イチヤついてないよっ!!」

「あははっ」

(どう見てもイチヤついてるようにしか見えへんけど…)

「もう…はやてちゃんつたらっ…」

頬を染めたままなのは立ち上がり、フェイトのもとへ戻ると座った。

すると

「なのはあああっ!!!」

ガバツとフェイトが勢いよくなのはに抱きついた。

「フェイトちゃん!」

「ううっ…イチヤイチヤしちややだよなのはあ…っ!」

(おのれエロ眼鏡淫獣っ…!!! なのはの可愛い唇を奪ったこと許さないからなあっ!!!)

嫉妬心に燃えたフェイトは泣きながらなのはの胸に顔を埋め、クロノに念話で話しかける。

《クロノ…協力、してくれるよね?》

《ああ、わかってるさ》

《クロノが王様になったら、私がなのはの番号を教えるから私となのはに命令を出す、OK!?!》

《ああ、僕はいつでも準備OKだぞ!》

この兄妹、ズルする気満々である。

「フェイトちゃん泣かないで? 何で泣いてるのかわからないけど…べ、別にユーノくとイチヤイチャなんてしてないよ?」

取り合えず、私のハンカチで涙拭いて?」

苦笑しつつ、天使のような微笑みを浮かべてフェイトにハンカチを渡すのは。

(Oh…こんなところに可愛い天使が…もう…食べちゃいたい)

うっとりとした表情を浮かべてフェイトはなのはからハンカチを受け取り、涙を拭く。

「よし、ええものを見せてもらったし、そろそろ次にいこか♪」

全員の棒を回収し、BOXに入れて言うはやて。

「そ、そうだねっ」

「うん!」

(次こそは私となのはがぁんなことやこんなことを!!)

「そうだな」

(百合、百合こそ癒し!)

「う、うん…」

(次なのはにぁんなことされたら…死ぬかもしれない…っ)

そして5人は再びくじを引いた。

「」「王様だくれだ」「」

さてさて、次の王様は？

「僕だな」

(百合きたぁぁあぁっ!!!)

王様と書かれた棒を皆に見せながらクロノは心の中で再びガッツポーズをとった。

「く、クロノが王様なんだっ!」

(なのフェイきたぁぁあぁっ!!!!)

そしてフェイトも同じく心の中でガッツポーズをとった。

《クロノ、なのはの番号は2番で、私は1番だよ!》
《わかった》

「それじゃあ…1番は2番にキスをしてくれ」

「1番は私だよっ!」

嬉しそうにフェイトは笑みながら隣のなのを見た。
すると

「え……に、2番なの……? 2番がフェイトにキスされるの!」

明らかに先程とは顔色が違うユーノが叫んだ。

「え……」

クロノとフェイトは思わず同時に声を出した。

「もしかして、ユーノくんが2番?」

不思議に思ったなのはがユーノに聞くと、暗い顔をしてユーノが頷いた。

「え……ちよつ、えええええっ!?!?! な、何でユーノが2番なの!?! なのはが2番じゃないの!?!」

思わぬ事実フェイトは叫んで言う。

「私は3番だよ？ ほら」

苦笑しながらなのはフェイトに棒を見せた。

「いやいやっ!! これどう見ても2番だよ!!」

「あー、ごめんなあ…実は3番の数字書くときちよつとミスっちゃったから、2番に見えるかもしれない」

あははと苦笑しながら言うはやて。

「ユーノくんの棒が2番やで」

「うそっ!!」

（いーやああああっ!!! 字くらいちゃんと書いてよはやてえええっ!!）

フェイトは心の中で泣いた。

泣いたのはユーノも同じで。

（何でよりによつてフェイトなんだああああっ!!! さっきので喜んでたのが悪いなら神

様ごめんなさい!!）

なのはを巡って日々バチバチとしている二人がまさかのキスを。

そんなこと、出来るわけがない。

「なのはちゃん、ユーノくんとフェイトちゃんがキスなんやて」

「そうだね…人前でするなんて恥ずかしいよね…っ」

顔を青くして硬直しているユーノとフェイトを見てソワソワとするなのは。

「なんかこう、モヤモヤしたりしない？ ユーノくんがフェイトちゃんとキスするんよ？」

「モヤモヤ…？ 別に…しないけどどうして？ 私元気だよ？」

はやての言っている意味がわからないのは首を傾げる。

（あかん、まだアプローチが全然足りてないでユーノくん…）

《ほんと無理だから、私はなのは以外とキスしないって決めてるからっ!!》

《それは僕だって同じだよ!!》

なのはとはやてをよそに、二人は念話で言い合いをしていた。

《何で2番ユーノなのっ!! 本当ならなのはとキスしてたのに!!》

《そんなこと言われてもくじで引いたんだから仕方ないじゃないか!》

言い合いばかりして行動しようとしなない二人を、クロノは興味なさそうに、なのははソワソワとしながら、はやてはため息を吐いて見ていた。

「ちよいちよい、お二人さんはいつになったらキスするつもりなん？」

「したくないよっ!!」

はやてに向けて二人は口を揃えてそう叫んだ。

(流石に二人が可哀想だな…仕方ない、ここは妹とユーノの為に僕が…一肌脱ぐか)
「なのは」

「なあに？ クロノくん」

「今の僕はまだ王様だ、ということとで命令を変更する。」

3番のなのはは1番と2番にキスをしてくれ」

(フエイト、一肌脱いでやったぞ)

全然一肌脱いでいないクロノ。

犠牲になったのはなのはだけである。

「ええっ!? わ、私があ!? ま、待ってよクロノくん! 何で私を巻き込むの!」

突然のことに顔を一瞬で染めるなのは。

「なるほど、その方がええなあ。 うん、それでいこうかなのはちゃん」

(フエイトちゃんはともかく、ユーノくんは喜ぶやろうし)

「何がええなあなの!? 完全に私巻き込まれただけだよね!」

思わずはやてにツッコむなのは。

「私…私なのはなら…キスされてもいいよ…」

（ナイスクロノっ!! 今度18禁百合本たくさんプレゼントしてあげるよ!!）

「ぼ、僕もなのはなら…いいよ…」

（神様本当にありがとうございませす!!!）

頬を染め、モジモジとしながら言うフェイトとユーノ。

「何でいいの!? 嫌がってよ!!」

「まあまあ、なのは。二人がこう言ってるんだ、この際何処でもいいからキスしてやってくれ。あ、別にフェイトは唇でもいいんだぞ、同性だしな、コホンッ」

途中まで真顔で言うクロノだが、最後辺りは頬を染めて言った。

「同性だからって流石に唇にはしないよっ!!」

「なのは…」

キラキラと瞳を輝かせてなのはを見るフェイトと、恥ずかしそうにしながらもなのはを見るユーノ。

二人の視線がなのはに突き刺さって。

「なのはちゃん、二人が待つとるよ」

なのはの肩をぽんつと軽く叩いて言うはやて。

「そんなあ〜…っ」

涙で瞳を潤ませて言うのと、なのははため息を吐いた。

そして、決意するとフェイトの方へ振り向いた。

「フェイトちゃん…」

「なの」

チュツ…

フェイトがなのはの名を呼ぶ前に、頬を染めたなのははフェイトの頬にキスをした。

「ふえ…っ…」

フェイトはボンツ！と効果音を鳴らして顔を真っ赤した。

(な、な、なのはの唇がっ…唇が私の頬にいいいい…っ!!!)!!!

キスされた頬を手で押さえ、フェイトは脳内でキスシーンをリピート再生する。

そしてその頃

「な、なのは…っ」

なのははユーノの隣へ再び座り、顔を近づけていた。

「ユーノくん…」

チュツ…

「あう…っ」

ユーノもフェイトと同じくボンツ！と顔を真っ赤にし、バタリと倒れた。

「ゆ、ユーノくん!?!」

倒れたユーノになのはは驚く。

(幸せ過ぎて今にも死にそうです…)

「あはは、幸せそうやなあ」

(ユーノくんはともかく、何でフェイトちゃんはあんなに嬉しそうなんやろ…)

ユーノを見てはやては微笑みつつ、フェイトを見て首を傾げた。

(ごちそうさまでした)

なのフェイを見て何処か上機嫌なクロノ。

クロノもまた、なのはがフェイトの頬にキスするシーンを脳内でリピート再生していた。

「あはは、幸せそうなお二人さんには悪いけど3回目、始めようか」
棒を回収しながら言うはやて。

ユーノとフェイトは火照った顔を冷ますためにうちわで扇いでいた。

そして始まった王様ゲーム3回目、

「」「王様だくれだ」「」

次の王様は…

「私だ」

なのはだった。

「なのはが王様かく、なのはにならどんな命令されても私は平気だよっ」

嬉しそうに笑みながら言うフェイトになのはは苦笑する。

「えっと、じゃあ…3番の人は4番の人をハグして下さい」

「お、3番は私やね」

「4番は僕だ」

3番ははやて、4番はクロノということだ

「じゃあ、はやてさんがハグしてあげますよ〜♪」

はやては優しげに笑みながらクロノを抱き締めた。

というよりクロノの顔を胸に埋めさせた。

「わぷっ！」

顔に当たる柔らかい感触に顔を真っ赤にするクロノは、慌ててはやての手を振りほどき、離れた。

「な、何するんだはやて！」

「なにつて、ハグやけど？」

「はやてちゃんったら大胆っ…」

キヤツと一人で盛り上がるなのは。

隣にいるフェイトは完全に別の世界へ行っていて。

「まったくっ…はやては…っ」

(柔らかかった…じゃない!! 僕にはエイミイがいるだろう! 落ち着け僕っ)

火照った顔を慌てて冷まさそうとジュースを一気飲みするクロノ。

「よし、じゃあ4回目行くよ〜」

回収した棒を箱に入れ、言うはやて。

4 回目の王様ゲーム、

「「王様だ〜れだ」」

次の王様は…

「私だ」

ふにやけた笑顔を浮かべてフェイトが言う。

「じゃあ、4番と2番ポツキーゲーム」

こういう時こそなのはの棒を覗き込んで命令すれば良かったものを、先程のキスのせいで頭がお花畑なフェイトは思い付きもなかった。

「に…」

2番と書かれた棒を片手にクロノが呟いた。

「え、クロノが…2番…?」

先程の熱は何処に行ったのか、再び青い顔をしたユーノが言う。

「ま、まさかユーノが4番か…?」

クロノとユーノは表情がひきつり、ユーノは自然と視線をそらした。

「ぷっ…あはははっ!! クロノちゃんとユーノくんが、ポツキーゲームっ!」

お腹を押さえて爆笑するはやて。

「わ、笑っちゃダメだよはやてちゃんっ…えっと、こっちは気にしないで…キスしていよっ、二人がキスするところ見ないからっ!」

何故か顔を真っ赤にし、手で顔を覆って言うなのは。

クロノとユーノはツッコんだ、

(なのは…指の間凄く開けてガン見してるじゃないか…)

「もう、次にいけないから早くしてよ二人共。」

クロノ、ユーノ女顔だし、女子だと思えば出きるって、キスの一つや二つ

他人事なので無表情で言うフェイト。

ポツキーを手にとると、無理矢理クロノにくわえさせた。

「いや、あの」

「つべこべ言わずさっさとする! ユーノは女子だよ女子! ユーノちゃんだよ!」

「女子…」

クロノはユーノをジッと見た。

女子だと言われればユーノはそう見える。

「そう思えばなんとかいけそうだ」

「なんでだよっ!!」

真顔で言うクロノにユーノがツッコんだ。

「よし、じゃあするぞ、ユーノ」

「え、ちよっ、まっ!」

ユーノに顔を近づけると、クロノはユーノの口にポツキーを入れ込んだ。

その頃の三人娘は

「あはははっ!!!」

クロノはともかく明らかに嫌そうな顔をしているユーノを見て、はやては目に涙を浮かべて笑う。

「く、クロノちゃんとユーノくんが…っ」

はやての隣でクロノ達を見てなのは頬を染めつつガン見し、フエイトは…

「早くしてよ〜」

お菓子をムシヤムシヤと食べながら興味なさそうに見ていた。

「はやては笑わないですよ！　なのははこっち見過ぎ!!　そこ（フェイト）少しは興味持ってます!?　というかクロノ顔近い!!」

ポツキーを通して徐々に迫るクロノの顔にユーノは顔を真っ青にする。

「仕方ないだろう、ポツキーゲームなんだから、んっ」

「きゃっ」

クロノがユーノともうすぐ、というところでポツキーを折り、何故かなのはが声を上げた。

「なんや〜、キスしないんか〜」

何処か残念そうに言うはやて。

完全に面白がっている。

「酷いよ三人共!!　他人事だからってはやては笑うし、なのはは凄く見てくるし!!
フェイトに至っては興味無し!」

目に涙を浮かべながら言うユーノ。

そんなユーノに三人娘は顔を合わせると口を開き、

「だってユーノくん無駄に可愛いから」

「だって本当に興味ないんだもん」

同時に言った。

「無駄に!？」

満面の笑みで言うはやてとなのはにユーノは複雑な気持ちになり、苦笑してツツコむ。

「ねえ、もういい？ そろそろ次したいんだけど」

ムスツと頬を膨らませて言うフェイト。

「はいはい♪ じゃあ5回目行くよ」

皆の棒を回収し箱に入れ、笑みながらはやてが言うと、5人は再びくじを引いた。

「「「王様だ〜れだ」」」

次の王様は…

「僕だっ」

ユーノだった。

「ユーノくんが王様か」

「ユーノくんは面白い命令してくれなさそうやね」

「面白い命令か…」

(面白い命令って…：言われてもなあ…：そんな直ぐには思いつかないよ)

王様と書かれた棒を片手に考え込むユーノ。

「あ、じゃあ…：2番は3番の頭を撫でて下さい。ちなみに…：そうだな…：3番は犬にな

りきって」

考えに考え、なんとなく思いついたユーノの命令を聞いて、フェイトが目を光らせた。

「はいっ!! 2番私です! 3番はだれ!」

だれと言いつつなのはを見つめるフェイト。

なのはは手に握っている棒の数字を見て苦笑すると、口を開いた。

「3番は私だよ」

「な、なのはが3番っ…」

(き、きたっ…なのフェイまたきたあああっ!!! しかもユーノの命令で!?
フハハハツ、悔しいでしょユーノ!

自分の命令でなのはと私がイチャつくところ見るなんて!!)

キラーン☆と目を光らせ、ユーノを見るとにやつくフェイト。

ユーノは眉をピクツと動かし、ジト目でフェイトを見る。

「ぐっ…!」

(しまったっ…:よりによってフェイトが喜ぶ命令を出しちゃった…っ)

自分の出した命令に後悔するユーノ。

「犬……ペットか…」

(なのはがフェイトのペット、つまり犬なわけだ。

フェイトの頬を舐めたり…ベッドで一緒に寝たりするのか…)

クロノは瞼を閉じ、その光景を想像する。

すると

「ゴフツ!!」

何を想像したのだろうか、顔を赤くして吹き出した。

「ど、どうしたんやクロノくん」

「だ、大丈夫!? クロノくん!」

「どうしたのクロノ…!」

はやて、なのは、ユーノの順で突然吹き出したクロノに声をかけるが、クロノは片手で顔を覆い、無言で何度か頷いた。

(ぼ、僕としたことが変な想像をしてしまったっ…いくらペットとはいえそんなところを舐め)

※クロノのエロエロ妄想タイムに入りそうな為強制終了。

「なーのーはっ♪」

我慢できない、とばかりにフェイトが腰を振ってなのはに抱きついた。

「ひゃあっ!?!」

突然抱きつかれ、頬を染めて驚くなのは。

そんななのはの項を、フェイトは指でそっと撫でた。

「はう…っ…!」

擦ったさにピクツと体を跳ねさせるのを見たフェイトは妖しく笑む。

「なのははね、今から少しだけ私のワンちゃんになるの。王様の命令は『絶対』だから、

出来るよね?」

なのはの耳元でフェイトはそう囁くとなのはから離れた。

すると、なのはは小さく頷き、上目遣いでフェイトを見つめる。

「可愛いよ、なのは」

（か、可愛すぎるっ…そんな上目遣いで見られたら…っ…今すぐ押し倒したいっ！ 別の意味で可愛がりたい!!）

ふにやけた顔をして、震えながらなのはの頭を撫でるフェイト。

（なんかこれ…恥ずかしい…）

フェイトに撫でられながらなのはは顔を真っ赤にして顔を俯けた。

そんな百合モード全開の二人をユーノは頭を抱えて、はやてはきよんとして見ていた。

（フェイトが暴走したら止めなきやつ…っ…というかなのは可愛い…っ…じゃなくて!! 僕までそんなこと言っただうするんだっ!）

（なんやろ……二人は付き合っという雰囲気やな…）

なのはとフェイトを見つ、隣で頭を抱えては首を振るユーノ見て、はやてはお菓子を食べながらユーノの肩をポンツと叩いた。

《ファイトやで、ユーノくん…》

《はやて…》

一方、ユーノとはやてをよそにイチャつくなのはとフェイトは…

「あ、あの…フェイトちゃん、撫でるのもうやめない…？ 髪が乱れるんだけど…」

フェイトに撫でられながら苦笑するのは。

「髪が乱れてもなのは可愛いよ」

「え？ えつと…あ、ありがとう…」

（い、いつまで撫で続けるつもりなんだろう…）

「ねえ、なのは、『わんっ』って言って？」

うつとりとした表情でなのはを見つめながら言うフェイト。

命令に関係無いことまでなのはにさせようとしている。

「え？ そ、そんな命令なかっ」

「お願い…ダメ？」

「うっ…」

瞳を潤ませて言うフェイトになのはは苦笑すると、ため息を吐いた。

「はあ…仕方ないなあ…わん…っ…」

モジモジとしながら小さな声で言うなのは。

「もういただきますっ!!!」

(もう我慢できないいいいっ…!!)

フェイトは鼻血を出しながら再びなのはに抱きついた。

「きやああっ?!?! ふえ、フェイトちゃん鼻血出てるよーっ!!!」

「わっ、フェイトなのはから離れて!」

慌ててユーノはなのはのもとへ駆け寄ると、フェイトを引き剥がした。

「フェイトちゃんティツシユ鼻に詰めて、そして落ち着くんや」

フェイトにティツシユを渡しながら言うはやて。

「なのひゃく…っ」

目をハートにし、ティツシユを鼻に詰めながらフェイトはなのはの名を呟く。

「あかん、完全に夢の世界や…」

「な、なのは大丈夫!?!」

「あ、ありがとうユーノくんっ、助かったよ」

心配そうに見るユーノに、苦笑しながら言うのは。

「困ったなあ、この様子やとフェイトちゃんは少し休憩やね。王様ゲームは4人でしょうか」

「え、まだ王様ゲームするつもりなの？ はやてちゃん」

「じゃあ次ラストにしようか？」

「そうだね、フェイトも休んでるし…クロノも流星に…あ…れ…？」

苦笑しながら言うユーノは、隣にいる筈のクロノを見た、がクロノはいなかった。

そして下を見ると

真っ赤な顔をしたクロノが倒れていた。

「ク、クロノーっ!？」

ユーノは慌ててクロノを揺するが、真っ赤な顔をしたクロノは何故か少しにやけていて。

先程のなのフェイを見て完全に妄想の世界へ旅だってしまったようだ。

「ダメだ…完全に夢の世界に行ってる…」

(何でにやけてるんだろう…)

揺すつても起きないクロノを見つめながらユーノは表情をひきつらせる。

「クロノくん大丈夫かなあ…」

不安げにクロノを見るのは。

「多分疲れて寝てるだけだと思う…」

(にやけて寝るほど疲れてるんだな…クロノは…)

「フェイトちゃんもクロノくんも夢の世界に行ってるみたいやし…

こころは3人で王様ゲームしよか♪」

箱を持つて笑みながら言うはやて。

「ええっ!? 3人でなんて少なすぎるよ! それに1人が王様引いたら誰が命令受けるのか分かつちゃうよはやてちゃん!」

「そうだよはやて!」

「えー? 次でラストでええからしようよ」

な? な? と笑みながら言うはやてに、二人はお互い顔を合わせて見ると、ため息を吐いて口を開いた。

「仕方ないな…」

「次で終わりだからね、はやてちゃん」

「やった♪ ありがとうな、ユーノくん、なのはちゃん♪

じゃあ、6回目ラスト、行くよ」

そして3人は6回目のくじを引いた。

「「王様だ〜れだ」」

ラストの王様は…

「私やね」

はやてだった。

「あはは、最初に戻ったね」

軽く笑いながら言うのは。

はやて↓クロノ↓フェイト↓なのは↓ユーノと来てラストは最初の王様になったは
やて。

「ラストの王様は私か〜…最後やからなあ……最後くらい……思いっきり楽しんでさえ

「？」

満面の笑みで何故かなのは見つめるはやて。

「な、なんか嫌な予感……っ」

はやてに見つめられ、なのはブルリと震えた。

「なのはちゃん何番？」

「いやいや、それ聞いたらダメでしょはやて」

「そっだよはやてちゃん」

「女子にしか命令できないんよ……だから……ね？」

手を合わせてお願い、というはやてになのは苦笑しつつ口を開く。

「一体どんな命令するつもりなのははやてちゃん……えっと……一番だよ……」

渋々答えたなのは、はやてはペアアツと表情を明るくさせ、微笑んだ。

「じゃあ、一番は王様に胸を揉ませよ♪」

につこりと笑みながらしれつととんでもないことを言うはやて。

なのははピシリと硬直し、手に持っていた棒を床に落とした。

「ゴフツツ!!! は、ははは、はやてっ!？」

まさかの命令にユーノは顔を真っ赤にして吹き出す。

「あ、あの…今変な命令が聞こえた気がするんだけど…私の聞き間違え…だよな？」
真つ青な顔を俯け、なのはは言う。

「聞き間違えやないで、なのはちゃん…ちよつと…大きくなった？」

いつの間になのはの背後に移動したのだろうか、はやては満面の笑みでそう言いながらなのはの胸を揉んでいた。

「きゃああああつ?!」

顔を真つ赤にしてなのはが叫んだときには遅く、もみもみとははやてなのはの胸を揉む。

(こ、こ、こ、これはっ…刺激がつよ…っ…)

ユーノには刺激が強すぎたのだろう、顔を真つ赤にしたままバタリとユーノは倒れ、夢の世界へと旅立ってしまった。

「いやあ、スッキリした♪」

満足気に笑みながら、はやてはなのはの胸から手を離す。

はやてに胸を揉まれたなのははプルプルと震えていて。

「これだなのはちゃんの胸もフェイトちゃんみた」

次の瞬間、話している途中のはやての顔になのはの肘が飛び、ヒットした。

「はやてちゃんっ……少し頭冷やしてね……っ」

なのはの攻撃を受けてバタリと倒れたはやてを、涙で潤んだ瞳で見つめながらなのはは呟いた。

はやても夢の世界へと旅立ってしまった。

「もう……お嫁にいけない……っ」

顔を両手で覆い、声を震わせて言うなのは。

なのはの回りには夢の世界へ旅立ったフェイト、クロノ、ユーノ、はやてが居て。

「ん……あ、あれ……？ 何でユーノくん……まで寝てるの……？ は、はやてちゃんはともかくっ、何でユーノくんまで寝てるの!？」

自分の後ろで寝て……気を失っているはやてを揺すりながらユーノを見て、なのはは言うがはやては目を覚まさない。

「皆寝ちゃったの!？」 お、起きてよっ、折角集まったのに皆寝ないでよー！」

はやて、フェイト、ユーノ、クロノと順番に揺するが誰も起きなくて。

「嘘でしょ…起きてつてばー!」

もうすぐで時刻は15時。

広いリビングで1人叫ぶなのは。

他の4人は…

寝ている者も入ればにやけている者もいて、はやては気を失っているだけだが。

1人残されたなのははこの後、テーブルの物を片付けると、いつの間にかはやての隣で眠りについた。

〔数時間後〕

「ただいま〜」

「フェイトただいま〜」

一緒に出掛けていたのだろうか、クロノとフェイトの母であるリンディ・ハラオウンと、フェイトの使い魔であるアルフが帰ってきた。

「ありや、皆寝ちやつてるよ」

「あらあら……♪」

二人はリビングを見るとお互い顔を合わせてクスリと笑った。

「余程遊んだのね、まだもう少し寝させておきましようか♪」

「うん！ 皆仲良さそうに寝てて微笑ましいね」

「そうね」

なのは達を見てにっこりと微笑むリンデイとアルフ。

すやすやと眠るなのは達は、時折微笑んで寝ていたらしい。(はやては除く)

終わり

「おまけ」

「いやいや!! 私だけ気失ってるっておかしいやろ!」

「は、はやてちゃんがいけないんだからねっ、い、いきなり揉んできたりするから!」

「揉んだ!? 何を揉んだの!? なのはの何を揉んだのはやて!!」

はやての肩をガシリと掴み、鼻息を荒くして言うフェイト。

「あはは…っ」

(刺激が強すぎたなあれはっ…)

あの光景を思い出し、顔を真っ赤にして苦笑するユーノ。

「ユーノ、なのはは犬と猫、どっちがいいと思う? 兎というのもありだな…」

ユーノの隣で真剣な表情をして言うクロノ。

「いや、1人だけ何の話してるの。というか言ってる意味がわからないよクロノ」

突然意味がわからないことを言うクロノに、ユーノは真顔でツツコんだ。

「何を揉んだのはやてええええっ!!!」

はやてを激しく揺すりながら言うフェイト。

激しく揺すられ、答えるにも答えられないはやては目に涙を浮かべている。

一方男子は

「じゃあ…ハムスターとかか？」

「だから何の話し!？」

真剣な表情で意味のわからない話しをするクロノに、ユーノが必死にツッコんでいた。

「何か私だけ空気……じ、次回からは多分本編だから出番が増えるといいなっ」

1人だけ相手にされないのはは苦笑しながら呟く。

背後から鼻血を垂らしたフェイトが迫ってきている事を知らずに。

「きゃあああああっ!?!」

「なのはあーっ♪」

自分もなのはの胸を揉もうとしたのだろう、フェイトの手はなのはの胸に伸びたが、触れる前になのはの肘が飛んだ。

バタリと倒れるフェイトを、ユーノは真顔で、クロノは完全に妄想の世界に、はやては苦笑しながら見ていた。

「て、照れるなのはもかわ…い…っ…」

フエイト、気絶。

「ということで、次回もリリカルマジカル頑張ります☆」

「何がということでのなの!?!」

何事もなかったかのように笑むのはに、ユーノが背後からツツコんだ。

変態フエイトさんとなのは達の騒がしい日常は、まだまだこれから。

ユーノ曰く、ツツコみが毎日追い付かないらしい。

終わり

本編2

全力全開の看病へ8〽ラツキースケベなユーノくん、なの〽

「何でテーブルにトランプが散らばってるのかな？ 何でユーノくんはフェイトちゃんを押し倒してたのかな？」

私……寝ててって、言った筈だよね……？」
にっこりと笑みながら言うのは。

「ご、ごめんなさい……」

「ごめん……なのは……」

ユーノ、フェイトの順で二人は頭を下げてなのはに謝る。

ユーノとフェイトは

正座させられていた。

「私はね、二人の体を心配して言ってるんだよ？」

特にユーノくんは薬飲んで熱が下がってるだけだし、一応明日は仕事なんだから今日で治さないとダメでしょ？

それに、毎日の仕事の疲れがたまってるだろうし……

まあ、久しぶりに3人揃ったし、遊びたいって思うのもわからなくはないんだけど……」

「ごめん……」

「そしてフェイトちゃん、フェイトちゃんもさつき熱があつたし寝てなきやダメだよ」

「うん……ごめんね、なの……」

「うん、まあ……反省してくれたならいいよ。」

それと……その……ユーノくんは……フェイトちゃんが好きなの……？」

なののは顔を俯け、頬を少し染めて言う。

「はい?」

なのはの思わぬ発言に、ユーノは表情を凍らせた。

「ちよつとなのは、やめてよそういうの。 私はユーノなんて眼中にないから、私が好

きなのは白い悪魔ことなの」

「フェイトっ!!」

言わせまいと慌ててフェイトの名を叫ぶユーノ。

「わっ!」

いきなりユーノが叫んだ為、なのははビクンツと体を跳ねさせて驚く。

「ちよつとユーノ、今いいところだったんだけ」

フェイトはそう言いながらユーノの方へ向く。

すると、ユーノが視線で何か訴えてくる。

下を見ろ、そう言っているようだ。

それにしてもなぜかユーノの頬が赤い。

フェイトは不思議に思いながらも下を、ユーノの手元を見た。

「……っ!?!」

フェイトは顔を青くした。

ユーノの手にあったのはフェイトのスマホであり、なのには見られてはいけない、いや、見られたら殺られるレベルの写真が表示されていた。

「白い…悪魔？　なんだかよくわからないけど、取り合えず今は寝ておかないと熱出ちゃうよ、フェイトちゃん」

なののはフェイトの手を引き、ソファアーのもとへ行く。

「ちよつ、ちよつと待つてなのはつ、私っ」

（私のスマホおおおっ!!!　いつのまに手にとつたの淫獣っ…！　ダメ…あの写真だけは…っ!!）

フェイトは顔を青くしたままユーノを睨むが、なのにはソファアアへ連れていかれる。

フェイトのスマホに表示されている写真、それは

数カ月前、ベッドで昼寝していたなののはのベッドに乗り、背後から抱き締めてなののはの服の隙間から手を入れ、胸を揉んでにやけているフェイトが写った写真だった。

（これは完璧な犯罪だよフェイト…っ…）

ユーノは体をプルプルと震わせながら顔を俯け、フェイトのスマホの電源を切ると

ベッドに置く。

「よし、じゃあ寝ててね、フェイトちゃん。今のところは熱ないみたいだから…キツくなったら言ってね?」

フェイトをソファアに寝せると毛布をかけ、笑みながら言うのは。

「あ、ありがとうなのは……あの…」

（どうしよう……っ……なのはにスマホがないって言って持ってきてもらおうかと思ったけど……）

ユーノが電源切ってくれてなかったら…写真見られたら……なのフェイルトが b a d e n d を迎えてしまう……っ……それだけは絶対嫌だっ!!）

だからだと冷や汗を流し、ユーノからスマホを取り返す策を考えるフェイト。

すると

「なのはー」

ユーノがなのはを呼んだ。

「はーいっ」

なののは慌ててユーノのもとへ向かう。

(ヤバいつ！ 淫獣っ…なのには写真を見せるつもり!?)

フェイトは慌てて起き上がり、ユーノとなのはを見る。

「どうしたの？ キツイ？大丈夫？」

なののは心配そうな表情をしながら言う。

「あ、僕は大丈夫だよ。なののは、これ、フェイトにスマホ渡してくれないかな」

「あれ？ フェイトちゃんのスマホを何でユーノくんが？」

「フェイトのスマホが僕の足元にあったんだよ。」

手元ないと困るだろうから渡しておいて」

ユーノはそう言うどベッドに乗った。

「そうなんだ、わかった」

なののはスマホを片手にフェイトのもとへ向かう。

(あ…れ…？ 電源…切つてある……見せるんじやなかったの?)

フェイトはきよんとししながらユーノを見る。

「あつ、フェイトちゃん寝てないとダメだよ。

はい、これフェイトちゃんのスマホでしょ？」

「あ……うん、ありがとう、なのは」

フェイトはなのはからスマホを受け取る。

すると、なのははフェイトの額に掌をあてた。

「ぼーっとしてるね、熱は……ないみたいだけど……」

「あ、うん、熱はないよ。そ、それじゃあ、私は寝るねっ」

フェイトはソファーに横たわると毛布を頭までかぶり、うつ伏せになる。

「おやすみ、フェイトちゃん」

フェイトに向けて柔らかな笑みを浮かべて言うと、なのははとある物を抱えて脱衣所へ向かった。

《フェイト、なのはをかけたトランプ対決だけど……反則をしたフェイトは負け、いいね？

ということ、約束した通りなのはにはなにもしない事、襲ったり変に触ったりしない事、いい？》

念話でフェイトに話しかけるユーノ。

《反則というかなんというか……その条件は厳し》

《いい加減にしないと、ね？》

フェイト、君がその条件を飲んだんだよ？

忘れたなんて言・わ・な・い・よ・ね

？》

威圧を込めながら言うユーノ。

聞かなくてもわかる、これは……もう疲れたからこれ以上面倒を起こすな、ということ。

《わ、わかるわかる……ごめん……約束守ります……》

(普段ニコニコしてる人程怒ると恐いんだよね……)

※「怒ると恐い人」例、Nさん(15歳)。

《うん、じゃあそういうことで》

《うん……》

(『今日1日』だけなんだし大丈夫、1日ぐらい耐えられる……今日1日耐えれば良いんだか

ら……っ……)

『今日1日』だけ、と自分に良いように変換しているフェイト。

(フフフツ……耐えればいい、ただそれだけ。

ユーノは忘れてるね……自分のスマホが私の手にあることをつ！)

フェイトはポケットからユーノのスマホを取り出し、写真を見始める。

(やっぱり……なのはの写真しかない……っ……ああああ……可愛すぎるっ……まさに天使っ、いや女神っ！)

次々とユーノのスマホの写真を勝手に見ていくフェイト。

居眠り中のなのは、なのはと出かけた時の写真と思われるもの、なのはとユーノのツーショット等々。

フェイト同様なのはばかり。

(取り合えず……時間が有る限りこの写真を私のスマホに……)

グヘへとやけながら毛布に隠れてユーノのスマホを勝手に操作し、LINEを使って画像を送る。

なのはの写真を勝手にフェイトのスマホへ送られているとは知らないユーノはベッドに横たわり、天井を見つめていた。

(ふう……フェイトは寝たみたいだね……)

ん？ フェイトが……寝た？寝たって事は……今なのはと二人きり状態……？)

そう考えるとユーノはかあつと頬を染め、ゴロンと寝返りをうった。

すると

「ねえ、ユーノくん、本当にキツくない？ 顔赤いけど…」

いつの間に来たのだろうか、ナース服に身を包んだなのはがベッドの前に座り、ユーノを見つめていた。

「わっ!?!」

サササツと素早く起き上がり、思わずなのはから距離をとるユーノ。

顔は見事に真っ赤に染まっていた。

「ユーノくん…? ど、どうしたの?」

きよとんととしてユーノを見るなのは。

好きな女の子がミニスカートのナース服を着ていれば世の男子はこんな反応をするだろう。

「い、いつの間にナース服に着替えたの!?!」

「えつと、フェイトちゃんが寝た後だよ? 本当にどうしたの? 私の顔に何かついて

る?」

両手でぺたぺたと自分の頬を触りながらなのはは言う。

「な、なにもついてないけどっ…わざわざナース服に着替えなくても…っ」
なのはから必死に視線を反らして言うユーノだが、やはり立派な男子、視線がつかないのはのスカート部分にチラツと行ってしまふ。

「なに言ってるのユーノくん、私はユーノくんの看病をしに来たんだよ？」

えっと…今日は一日、ユーノくんとフェイトちゃんの専属ナースだよ。

だから、具合がまた悪くなったり、困った事があつたら遠慮なく言つてね？」

可愛らしい笑みを浮かべて言うなのは。

今のなのはは白い悪魔というより天使そのものだ。

「う、うん…」

(誰かこの煩い心臓をどうかしてください…)

「まだ夜ご飯まで時間あるし…ユーノくんも少し寝る？ 寝た方が早く治るよ」

「そ、そうだね…」

火照った顔を冷ますため、落ち着く為にユーノは瞼を閉じた。

「おやすみなさい、ユーノくん」

「うん…」

それから数分後、ユーノとフェイトは寝ている為、なののはナース服を着用したまま静かに読書をしていた。

親友のすずかに勧められた小説を時には涙ぐみ、時には笑みながら。

そう、それは二人が寝ていると思っていたからだ。

(眠れない…)

モゾモゾと動き、必死に眠ろうとするユーノ。

なのとはと改めて二人きり状態だと思うとどうしても意識してしまつて眠れないのだ。

(なののは…本を読んでるのか…いいなあ…僕も風邪引いてなかったら…)

うつすらと瞼を開け、ユーノはなののはを見る。

眠れないユーノに対し、勝手に人のスマホを弄っていたフェイトは…

ユーノのスマホと自分のスマホを手に涎を垂らしてまさかの爆睡していた。

(寝なきや…寝よう、無になるんだ…)

それから暫くユーノの戦いは続いた。

いくら寝ようと思っても訪れない睡魔。

そして数十分後、

「風邪引いてるのに本読みたいだなんて…」

「お願いだよなのは、熱ないし、ベッドの上で読むから…ね？ それに眠れないんだよ…」

寝るのは無理だと判断したユーノは、なのはに声をかけ、本を読ませてくれと頼んでいた。

「でもなあ……ん？ 眠れないってことは今まで寝てたフリしてたの？」

「う、うん…」

「そっか…じゃあ、15分だけ読むっていうのは？」

長時間読むのはダメだから、どう？」

「短いなあ……うう、わかったよ…どの本読もうかな…」

ベッドから起き上がり、本棚のもとへ行く為に降りようとするユーノ。

そんなユーノを見てなのはは目を見開き、立ち上がった。

「ユーノくん降りなくていいから寝てて、私が本取るよ」

「え、でも…」

「大丈夫、どの本読むの？」

なのはは少し大きな本棚の前に立ち、ユーノの方へ振り向いて言う。

「じゃあ…5段目の…緑の本取ってもらえないかな」

「わかった」

自分の身長より高い本棚。

5段目の本となると背伸びをしないと届かないかもしれない。

なのはは背伸びをし、その本へと手を伸ばす。

「んっ……あ、あれ…届かな…っ」

背伸びをして一生懸命手を伸ばすが、あと少しの距離で本に届かない。

「あ…やっぱり僕がと」

「大丈夫だからっ、ユーノ…くんは寝てて…っ」

プルプルと震えながら脚に力を入れ、なのはは本に手を伸ばす。

「届かないなら別の本でも大丈夫だからっ」

「はっ…いや…っ、ユーノくんがっ、読みたいのこの本でしょ？ あと少しだから…っ、んんっ」

更になのが脚に力を入れて背伸びをしたその時、

ユーノは一瞬で赤面になり、なのはから視線を反らした。

（み、みみみ、見えてるっ!! なのはの下着が見えてるよっ!!!）

ミニスカートが背伸びをする度に引っ張られ、なのはの下着がチラツと姿を現せた。まあ、そんなことに気付いていないなのはは必死に背伸びを続けるのだが。

「な、なのはっ！ 本当にいいから！もう別の本で大丈夫だからもうっ！」

（これ以上見えるのは困るよ!!）

思わず両手で顔を隠して言うユーノ。

ユーノがなのはの姿に戸惑っていると、

やつが目を覚ました。

「ん…………？」

（あ…あれ…………なのはとラブホに居た筈なのに…なんか暗い…）

一体どんな夢を見てたんだ、フェイトはモゾモゾと動き、被っていた毛布を退かした。
(ん? あ、そっか、ここユーノの部屋で私なのはの写真を…)

両手に握っているスマホをぼんやりとする意識の中ジツと見つめ、フェイトはふにやつと笑んだ。

だが、次の瞬間、フェイトは凍りつく事になる。

「ダメっ……もう少し、なの……っ……もう少しで届くからっ……あ、ん……っ……はあっ……」

凍りつくフェイトの耳に聞こえたのはなののはの吐息混じりの声。

「あつ、届いたっ、あ、れ……? 抜けない……っ……かたいよおっ……ん……っ……」

なんとか本に手が届いたものの、びっしりと詰められた本棚からなかなか本が抜けな
い。

ただそれだけの事なのだが、変態フェイトさんには別のものにしか聞こえず。

(な、なななな、何してるのなのはあああああっ!!!)

今すぐにも起き上がりたいが、体がショックで凍りついてなのはを見ることがすら出
来ないフェイト。

「も、もう止めようよなのは！ こ、これ以上はっ」

（もう完全に見えちゃってるから本当にやめてっ!!）

半分は完全に見えているなののは下着。

爆発しそうな頭をユーノは抱えていた。

（これ以上は!!? あの淫獣野郎人が寝てる間になのはに入れやが）

「やあつ、止めないっ、ユーノ、くんのっ…もう…少しだから…っ」

「な、なのはっ…」

殆ど掴んだ本をなのはは力を込めて引っ張った。

すると

「あつ、とれ…っ…へ…?」

本が取れた、のは良いが数冊の本が同時に取れ、一冊しか手に取っていなかった為その本はなのはに目掛けて落ち…

るところでなのはは腕を引かれ、ドサドサと落ちる本を前に、床ではなく少し柔らかい何かの上へ倒れるように座り込んだ。

「いった…っ」

なののは後ろから聞こえる声は

「ゆ、ユーノくんっ!？」

ユーノの声だった。

なののはが座っているのはユーノの脚の上であり、尻餅をついたユーノは痛みに顔をしかめていた。

「あ、あはは…良かった…怪我ないみたいで…」

「だ、大丈夫っ!? ユーノくんこそ怪我は!？」

ユーノの脚の上に座ったまま後ろを向き、涙ぐみながら言うなのは。

「大丈夫だよ、ちよつと尻餅ついたくら」

「ななななっ、な、なな…っ!! なののはあああああっ?!?!」

取り合えずなののはユーノの上から降りた方がいいが、いまはそれどころではない。

プルプルと震えながら二人を指さし、涙を流して叫ぶフェイト。

やっとの思いで立ち上がったフェイトにとってその光景は…地獄で。

ミニスカートのなののはがユーノの脚の上に座って先程の甘ったらしい声を上げていたと勘違いしているフェイトは、唇を噛み締めてユーノのベッドの前へ移動し、

「私のっ…私のなのになにしてんだあああああつ!!!」

涙を大量に流しながら破る勢いでユーノの枕を握り、思いきり投げつけ、

その枕は見事にユーノの後頭部へ直撃し、パタリとユーノは倒れた。

「ゆ……ユーノくううんっ!!!」

倒れたユーノを見てなのは目を点にし、ユーノの名を叫んだがユーノは返事をしな
かった。

続く